志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

農業農村活性化農業構造改善事業上門地区及び
県営農免農道整備事業安楽地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

山角（やまずみ）B・炭床（すみとこ）遺跡

付編　宇都遺跡（遺物編）

2014年3月

鹿児島県志布志市教育委員会

序　　文

本書は、平成３年度農業農村活性化農業構造改善事業上門地区及び県営農免農道整備事業安楽地区の事業実施に伴い、志布志町教育委員会が実施した、山角Ｂ遺跡及び炭床遺跡の発掘調査報告書です。

両遺跡からは、主に縄文時代後期後半と晩期後半の遺物が見つかりました。特に、市内では三例目となる勾玉が見つかっており、貴重な発見例となりました。

山角Ｂ遺跡と炭床遺跡は平成３年度に発掘調査が行われましたが、長らく報告書が刊行できず、懸案となっていました。しかし、今回報告書刊行の機会を得て、調査成果が広く公開できることは喜びに堪えません。

本書が市民の皆様をはじめとする多くの市民に活用され、地域の歴史や文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご理解・ご協力いただいた各関係機関及び発掘調査に従事・協力していただいた地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

志布志市教育委員会
教育長　和田幸一郎

例　言

1　本報告書は農業農村活性化農業構造改善事業上門地区連絡道整備事業及び県営農道整備事業安楽地区に伴う山角Ｂ遺跡・炭床遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は鹿児島県志布志市志布志町安楽字山角・炭床に所在する。

3　山角Ｂ遺跡・炭床遺跡は、発掘調査において「山角遺跡」という名称で呼ばれていた。しかし、報告書作成段階において、遺跡台帳に基づく「山角Ｂ遺跡」・「炭床遺跡」という名称に訂正している。

4　発掘調査は志布志町農政課及び鹿児島県農政部の依頼を受け、志布志町教育委員会が実施した。

5　報告書作成は山角Ｂ遺跡他発掘調査報告書作成事業として、志布志市教育委員会が実施した。

6　発掘調査は平成３年９月12日から11月22日まで実施し、報告書作成は平成25年度に実施した。

7　本書で用いた方位は全て磁北であり、レベル値は鹿児島県農政部が提示した事業実施計画図面に基づく、海抜絶対高である。

8　遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。

9　挿図の縮尺は各図面に示した。

10　遺跡位置図等の地図は国土地理院発行の1：25,000地形図『志布志』、1：50,000地形図『志布志』、大日本帝国陸地測量部発行の1：50,000地形図（明治35年測量）を利用した。

11　発掘調査における図面作成及び写真撮影は米元史郎と小村美義が行った。

12　遺構・遺物の実測・トレースは臨時職員の協力を得て、坂元裕樹が行った。また、一部遺構図作成にデジタル技術を用いた。

13　遺物の写真撮影は鹿児島県立埋蔵文化財センターにて、吉岡康弘氏が行った。

14　本書の執筆・編集について、第３章第２節及び第４・５章の執筆を坂元が、その他の執筆を相美が行い、編集は両名で行った。

15　出土遺物及び図面・写真の記録類は志布志市教育委員会で保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物注記の略号は「ＹＡ」である。

16　付編として、平成５年度に松山町教育委員会によって発掘調査が行われた松山町宇都遺跡（旧宇都Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡）の出土遺物を掲載している。

17　松山町宇都遺跡出土の土器付着の赤色顔料について、鹿児島県立埋蔵文化財センターの中村幸一郎氏より玉稿を賜った。

18　報告書作成の際には、以下の方々よりご指導・ご助言を頂いた。ご芳名を記すことで、謝意を表します（敬称略）。

大久保浩二・東和幸（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

凡　例

1　土器の表面にススが付着しているものについて、断面図に矢印で示した。

2　土器の胎土観察には実体顕微鏡を用いた。

3　土器観察表で用いている胎土中の鉱物・岩片の種類は右のとおりである。

「石/長」：石英・長石類で、透明・白色不透明を呈するもの。

「角/輝」：角閃石・輝石類で、黒色を呈し、柱状のもの。

「雲母」：金色の雲母で、薄い層状のもの。

「火ガ」：火山ガラスで、黒色や透明・半透明を呈し、泡がはじけたようなもの。

「風礫」：風化礫で、白色を呈した小礫状のもの。

「く礫」：くされ礫で、赤～赤褐色を呈する小礫状のもの。

本文目次

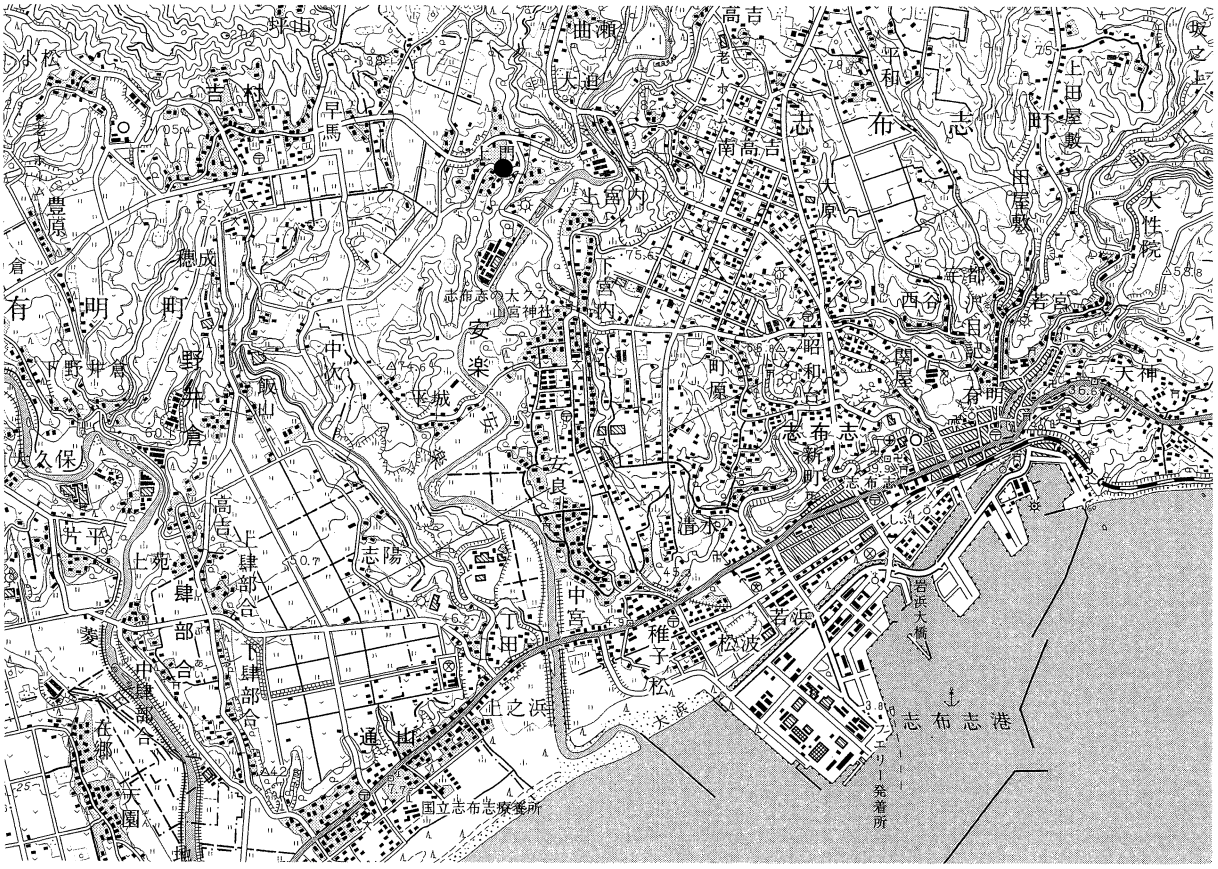
序文
例言・凡例
目次
遺跡位置図及び周辺環境の変遷
第１章　調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経過　・・・・・・・・　1
　第２節　調査体制　・・・・・・・・・・・・・・・　1
　第３節　確認調査　・・・・・・・・・・・・・・・　2
　第４節　本調査　・・・・・・・・・・・・・・・・　2
　第５節　整理・報告書作成作業　・・・・・・・・　2
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境　・・・・・・・・・・・・・　3
　第２節　歴史的環境　・・・・・・・・・・・・・　3
第３章　調査の方法
　第１節　発掘調査の方法　・・・・・・・・・・・　7
　第２節　層序　・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
第４章　調査の成果
　第１節　縄文時代の調査　・・・・・・・・・・・　11
　第２節　古墳時代の調査　・・・・・・・・・・・　23
第５章　総括
　第１節　縄文時代　・・・・・・・・・・・・・・　27
　第２節　古墳時代　・・・・・・・・・・・・・・　29
付編　宇都遺跡出土遺物の紹介
　第１節　概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・　30
　第２節　出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・　30
　第３節　分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・　34
写真図版　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　37
報告書抄録

挿図・表目次

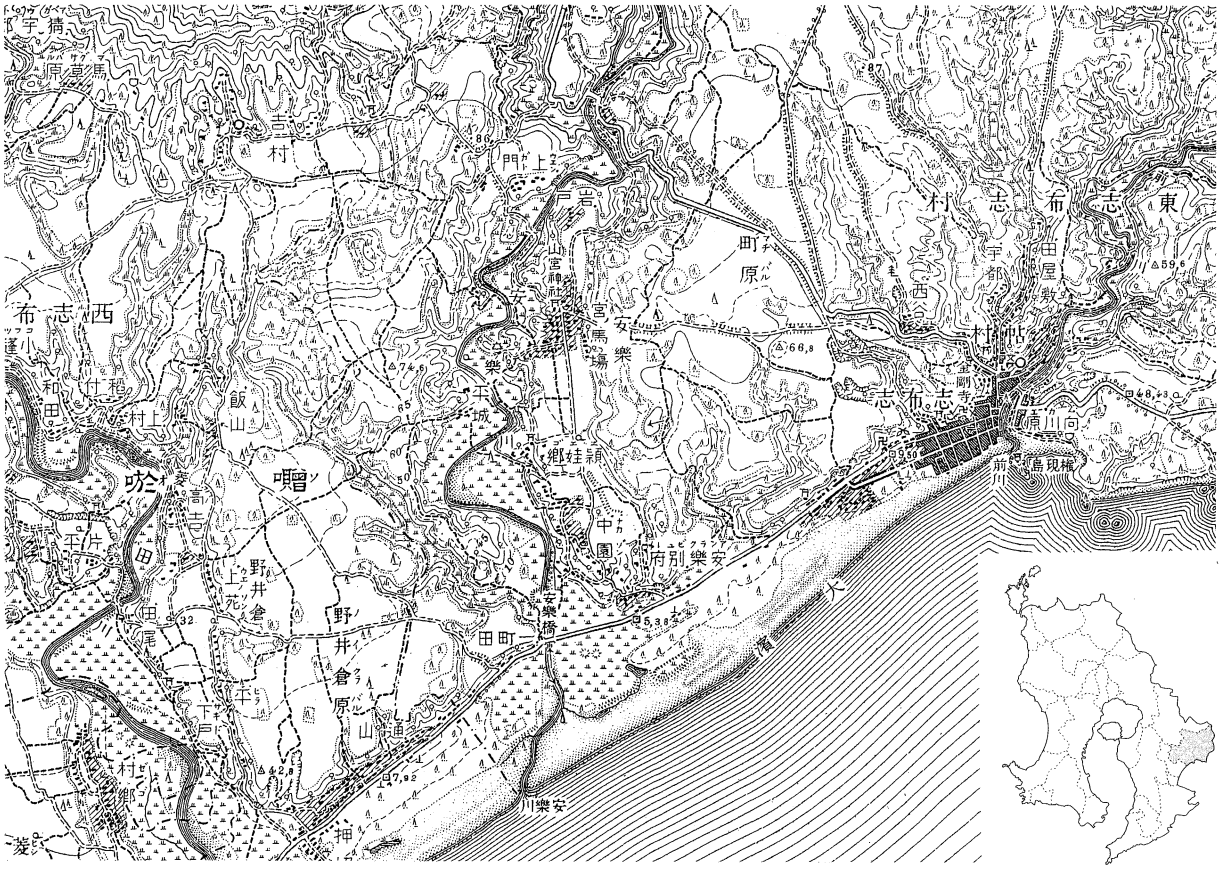
遺跡位置図及び周辺環境の変遷（１:50,000）
第１図　周辺遺跡位置図（１:25,000）　・・・・・・・・・　4
第２図　遺跡位置図及びトレンチ・調査区位置図　・・・・　8
第３図　土層柱状図　・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
第４図　土層断面図（1：100）　・・・・・・・・・・・・　10
第５図　集石平・断面図　・・・・・・・・・・・・・・・　12
第６図　縄文時代土器平面分布図　・・・・・・・・・・・　13
第７図　縄文時代土器（１）　・・・・・・・・・・・・・　14
第８図　縄文時代土器（２）　・・・・・・・・・・・・・　15
第９図　縄文時代土器（３）　・・・・・・・・・・・・・　16
第10図　縄文時代土器（４）　・・・・・・・・・・・・・　17
第11図　縄文時代土器（５）　・・・・・・・・・・・・・　18
第12図　縄文時代土器（６）　・・・・・・・・・・・・・　19
第13図　縄文時代石器平面分布図　・・・・・・・・・・・　21
第14図　縄文時代石器（１）　・・・・・・・・・・・・・　22
第15図　縄文時代石器（２）　・・・・・・・・・・・・・　23
第16図　古墳時代土器平面分布図　・・・・・・・・・・・　24
第17図　古墳時代土器　・・・・・・・・・・・・・・・・　25
第18図　縄文時代石器組成　・・・・・・・・・・・・・・　28
第19図　宇都遺跡出土遺物（１）　・・・・・・・・・・・　31
第20図　宇都遺跡出土遺物（２）　・・・・・・・・・・・　32
第21図　宇都遺跡出土遺物（３）　・・・・・・・・・・・　33
第22図　宇都遺跡出土遺物（４）　・・・・・・・・・・・　34
第23図　分析対象土器内面　・・・・・・・・・・・・・・　36
第24図　双眼実体顕微鏡（８倍）　・・・・・・・・・・・　36
第25図　蛍光Ｘ線分析装置による成分分析　・・・・・・・　36
第26図　電子顕微鏡（1,500倍）　・・・・・・・・・・・　36
第１表　周辺遺跡地名表　・・・・・・・・・・・・・・・　5
第２表　縄文時代土器観察表（１）　・・・・・・・・・・　25
第３表　縄文時代土器観察表（２）　・・・・・・・・・・　26
第４表　縄文時代石器観察表（３）　・・・・・・・・・・　26
第５表　古墳時代土器観察表　・・・・・・・・・・・・・　26
第６表　縄文時代石器組成・石材組成表　・・・・・・・・　28
第７表　宇都遺跡出土土器観察表　・・・・・・・・・・・　35
第８表　宇都遺跡出土石器観察表　・・・・・・・・・・・　35

写真図版目次

図版１　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　37
　①　空中写真
　②　Ａ地点土層断面図
　③　Ｂ地点土層断面図
　④　Ｃ地点土層断面図
　⑤　集石１号検出状況（南から）
図版２　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　38
　①　集石４号検出状況（東から）
　②　Ａ地点遺物出土状況（南から）
　③　Ｂ地点遺物出土状況（西から）
　④　Ｃ地点遺物出土状況（西から）
　⑤　Ｄ地点遺物出土状況（北から）
　⑥　石匙（№90）出土状況
図版３　縄文時代土器（１）　・・・・・・・・・・・・・　39
図版４　縄文時代土器（２）　・・・・・・・・・・・・・　40
図版５　縄文時代土器（３）　・・・・・・・・・・・・・　41
図版６　縄文時代土器・石器　・・・・・・・・・・・・・　42
図版７　縄文時代石器・古墳時代土器　・・・・・・・・・　43
図版８　宇都遺跡出土土器（１）　・・・・・・・・・・・　44
図版９　宇都遺跡出土土器（２）　・・・・・・・・・・・　45
図版10　宇都遺跡出土土器（３）　・・・・・・・・・・・　46



平成12(2000)年



遺跡位置図及び周辺環境の変遷（1：50,000）

明治35(1902)年

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（大隅耕地事務所、以下県農政部）は、志布志町安楽地区における県営農免農道整備事業の計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（以下県教委）に照会した。その結果、当該事業区域内に山角遺跡が存在していることが判明した。

これを受けて、県農政部・県教委・志布志町教育委員会（以下町教委）は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るための協議を行った、その結果、平成３年度に確認調査を実施することになった。

平成３年５月、県農政部より文化庁長官へ、文化財保護法第57条の３第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」がなされた（平成３年５月18日付）。これを受けて、県教委から県農政部へ、工事着手前の発掘調査が必要である旨の「通知」がなされた（平成３年６月13日付）。その後、県農政部と町教委との間で、確認調査に係る業務委託契約が締結された（平成３年７月１日付）。

また、志布志町農政課（以下町農政課）は志布志町安楽における農業農村活性化農業構造改善事業上門地区連絡道整備事業の計画策定にあたり、事業対象地内の埋蔵文化財の有無についての照会を町教委に行った。その結果、当該事業区域内に山角遺跡が存在していることが判明した。

これを受けて、町農政課と町教委は協議を行った。その結果、県営農免農道整備事業と併せて確認調査を実施することになった。

平成３年５月、町農政課より文化庁長官へ、文化財保護法第57条の３第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」がなされた（平成３年５月23日付）。これを受けて、県教委から町農政課へ、工事着手前の発掘調査が必要である旨の「通知」がなされた（平成３年６月13日付）。

両事業に伴う確認調査は平成３年７月３日～８月８日に行った。その結果、縄文時代を中心とする遺物が認められた。この確認調査を受けて、県農政部や町農政課との協議を行った。その結果、設計変更が困難であることから、事業着手前に記録保存を目的とする本調査が必要となり、確認調査に引き続いて実施することになった。

平成３年７月、県農政部より文化庁長官へ、文化財保護法第57条の３第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」がなされた（平成３年７月30日付）。これを受けて、県教委から県農政部へ、工事着手前の発掘調査が必要である旨の「通知」がなされた（平成３年９月12日付）。

また、平成３年８月、町農政課より文化庁長官へ、文化財保護法第57条の３第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」がなされた（平成３年８月23日付）。これを受けて、県教委から町農政課へ、工事着手前の発掘調査が必要である旨の「通知」がなされた（平成３年９月12日付）。

第２節　調査体制

１　平成３年度（確認調査・本調査・整理作業）

事業主体	鹿児島県農政部（大隅耕地事務所）	
	志布志町農政課	
調査主体	志布志町教育委員会	
調査責任者	志布志町教育委員会	
	教　育　長	徳重　俊二
調査事務局	社会教育課長	慶田　泰輔
	社会教育課長補佐	井手　富男
	文化体育係長	下平　晴行
	主　事	中窪　徹
	主　事	荒平　安次
	主　事	松崎　陽子
調査担当	主　査	米元　史郎
	主事補	小村　美義

２　平成22年度（整理作業）

事業主体	志布志市教育委員会	
調査主体	志布志市教育委員会	
調査責任者	志布志市教育委員会	
	教　育　長	坪田　勝秀
調査事務局	生涯学習課長	津曲　兼隆
	文化財管理監	米元　史郎
	文化財管理室長	
	兼指定文化財係長	竹田　孝志
	埋蔵文化財係長	上田　義明
	主　幹	村田　有子
	主任主査	出口順一朗
	主　査	大窪　祥晃
調査担当	主　査	相美伊久雄
	埋蔵文化財調査員	坂元　裕樹
	臨時職員	生重美恵子
	臨時職員	杉尾木の実

３　平成25年度（整理・報告書作成作業）

事業主体	志布志市教育委員会	
調査主体	志布志市教育委員会	
調査責任者	志布志市教育委員会	
	教　育　長	坪田　勝秀
		（～平成26年２月23日）

		和田幸一郎
		（平成26年２月24日～）
調査事務局	生涯学習課長	樺山　弘昭
	文化財管理室長	竹田　孝志
	埋蔵文化財係長	上田　義明
	主任主査	大窪　祥晃
調査担当	主任主査	相美伊久雄
	埋蔵文化財調査員	坂元　裕樹

第３節　確認調査

確認調査は平成３年７月３日～８月８日に実施した（作業員実働24日、延べ作業員数359人）。調査面積は78㎡である。調査は地形等を考慮し、工事計画地に３×２ｍのトレンチを５ヶ所、４×２ｍのトレンチを６ヶ所、計11ヶ所設定した。なお、県事業部分（以下、農免農道部）が１～８トレンチ、町事業部分（以下、町道部）が９～11トレンチとなる。

トレンチは人力で掘り下げを行い、シラス（Ⅻ層）まで掘り下げた。その結果、１・３・５・６・９・10・11トレンチで、アカホヤ層（Ⅶｂ層）上位のⅢ・Ⅳ層において遺物が認められた。６トレンチではアカホヤ層下位のⅧ層からも遺物が認められた。出土遺物はコンテナケース５箱分である。

なお、７トレンチはアカホヤ層上面まで、８トレンチはアカホヤ層下位までそれぞれ削平されている。

第４節　本調査

発掘作業は平成３年９月12日～11月22日（作業員実動38日）に実施した。延べ作業員人数は794.5名、調査範囲は915㎡である。調査範囲は、確認調査の結果からＡ～Ｄの４地点に分けた。

表土は重機（バックホー）で剥ぎ取りを行い、Ⅱ層以下を人力（鋤簾・山鍬）により掘り下げを行った。

発掘作業終了後、文化財保護法第65条及び遺失物法第１条に基づいて「埋蔵文化財発見届」（平成４年１月９日付）を志布志警察署長へ、「埋蔵文化財保管証」（平成４年１月９日付）を県教委に提出するなど、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

なお、発掘作業の具体的経過は、調査日誌が所在不明のため記載できない。

第５節　整理・報告書作成作業

整理作業は発掘作業終了後、平成３年12月から平成４年３月に志布志町文化会館にて行った。当初、次年度以降に報告書作成を予定していたが、志布志町内における発掘調査の増加など諸般の事情により実施できなかった。

その後、志布志町埋蔵文化財整理作業室において、随時整理作業を行っていたが、平成22年度に改めて、図面整理、遺物の分類・選別・実測・拓本、遺構製図、一部原稿執筆を行った。

平成25年度、山角Ｂ遺跡他発掘調査報告書作成事業として、志布志市埋蔵文化財センターにおいて、追加遺物の実測・拓本、遺物・遺構トレース、レイアウト、遺物写真撮影、原稿執筆、編集などを行った。そして、１月20日の印刷製本に係る契約後、本書の刊行をもって、全ての業務を終了した。

最後に、遺跡名称の変更について説明しておきたい。山角Ｂ遺跡と炭床遺跡は確認調査や本調査において「山角遺跡」という名称で呼称され、その遺跡名で発掘調査に係る諸手続きが行われていた。しかし、報告書作成段階において、平成21年度に見直しを行った遺跡台帳に基づいて「山角Ｂ遺跡」と「炭床遺跡」という名称に変更を行った。なお、Ａ～Ｃ地点が炭床遺跡に、Ｄ地点が山角Ｂ遺跡にそれぞれ該当する。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部に位置し、宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曽於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向け湾口を開く志布志湾に面する。

本市の地形は東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は、西側に砂丘海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。

市の北東部には御在所岳(530.4m)・笠祇岳(444.2m)・陣岳(349.3m)など、日南層群が構成する急峻な山岳地帯がある。その西側には入戸火砕流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主体をなす。「原(ばる)」と呼ばれる比較的平坦な台地であるシラス台地は、南流する前川・安楽川・菱田川など大小の河川の浸食作用による深い浸食谷(「迫(さこ)」)により細かく刻まれ、大小の狭長な台地となっている。

また、このシラス台地からは、北部の霧岳(408.3m)や中央部の岳野山(274.3m)、西部の宇都丘(179.1m)・草野丘(268.4m)など、市北東部同様の日南層群が構成する山岳・丘陵が突き出ている。

海岸に沿ったシラス台地の崖下には砂丘が広がっており、この砂丘上に志布志市街地が立地している。この砂丘は発達過程により、旧期砂丘と新期砂丘に二分される。旧期砂丘は砂鉄を多く含んでおり、台地崖下に広がる。新期砂丘は旧期砂丘以南に広がり、旧期砂丘に比べ幅が厚い。

前述の三河川の流域には高位・中位・低位の三段の段丘が認められる。段丘崖下からの自然湧水によって低・中位段丘では集落が形成されてきた。一方、高位段丘では地下水位が深いため集落形成が困難で、近～現代に開かれるまでは畑地として利用されるにとどまっていた。

この地域の地質は古いほうから、日南層群－阿多鳥浜火砕流－夏井層－阿多(夏井)火砕流－旧期ローム層－入戸火砕流－新期火山灰層となる。日南層群は主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多鳥浜火砕流は夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多(夏井)火砕流は黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.5～10.5万年前とされる。入戸火砕流は海岸に沿った地域では海抜40m程のシラス台地を形成する。下部には大隅降下軽石層が存在する。

山角Ｂ遺跡・炭床遺跡は安楽川河口から約４㎞上流の、野井倉台地から東へ突出する舌状台地に位置し、標高約45メートルを測る。台地両側は低地に続く比高差約30mの急崖となり、東の眼下には安楽川が大きく蛇行して流れる。台地基部側の道路沿いや台地南側に集落が位置し、他の台地面は畑地となっている。

第２節　歴史的環境

山角Ｂ遺跡・炭床遺跡一帯は以前より土器や石器などが採集されていたようで、大正年間には旧制志布志中学校教諭の瀬之口伝九郎氏によって調査がなされたようである。昭和42(1967)年に文化財保護委員会が発行した『全国遺跡地図(鹿児島県)』では「上門遺跡」として報告されている。その後、「上門Ａ～Ｄ遺跡」の４遺跡が報告され、さらに小字名から「山角Ａ～Ｄ遺跡」と呼ばれるようになった。そして、平成21年度における遺跡台帳等の修正作業によって、遺跡名の訂正を行っている。

志布志市には現在約500ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が認められている。戦前には大正５(1916)年に志布志町六月坂横穴墓について報告を行った瀬之口伝九郎氏や昭和19(1944)年に志布志町出口Ａ遺跡採集の独鈷石を紹介した梅原末治氏の調査研究がある。戦後は、河口貞徳氏・諏訪昭千代氏・上村俊雄氏・酒匂義明氏等の発掘調査・研究に加え、海老原行秀氏・瀬戸口望氏という志布志町在住の研究者による熱心な調査・研究が行われており、学史上重要な遺跡が多い。最近では地域高規格道路に伴う大規模な発掘調査により、質量ともに充実した資料が新たに追加されている。

なお、本市は現在の行政区分では鹿児島県に属するが、過去は日向国に属しており、明治４(1871)年の廃藩置県後も一時期、都城県や宮崎県に属した歴史もある。したがって、この地域の歴史・文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地方の影響も考慮する必要がある。

旧石器時代

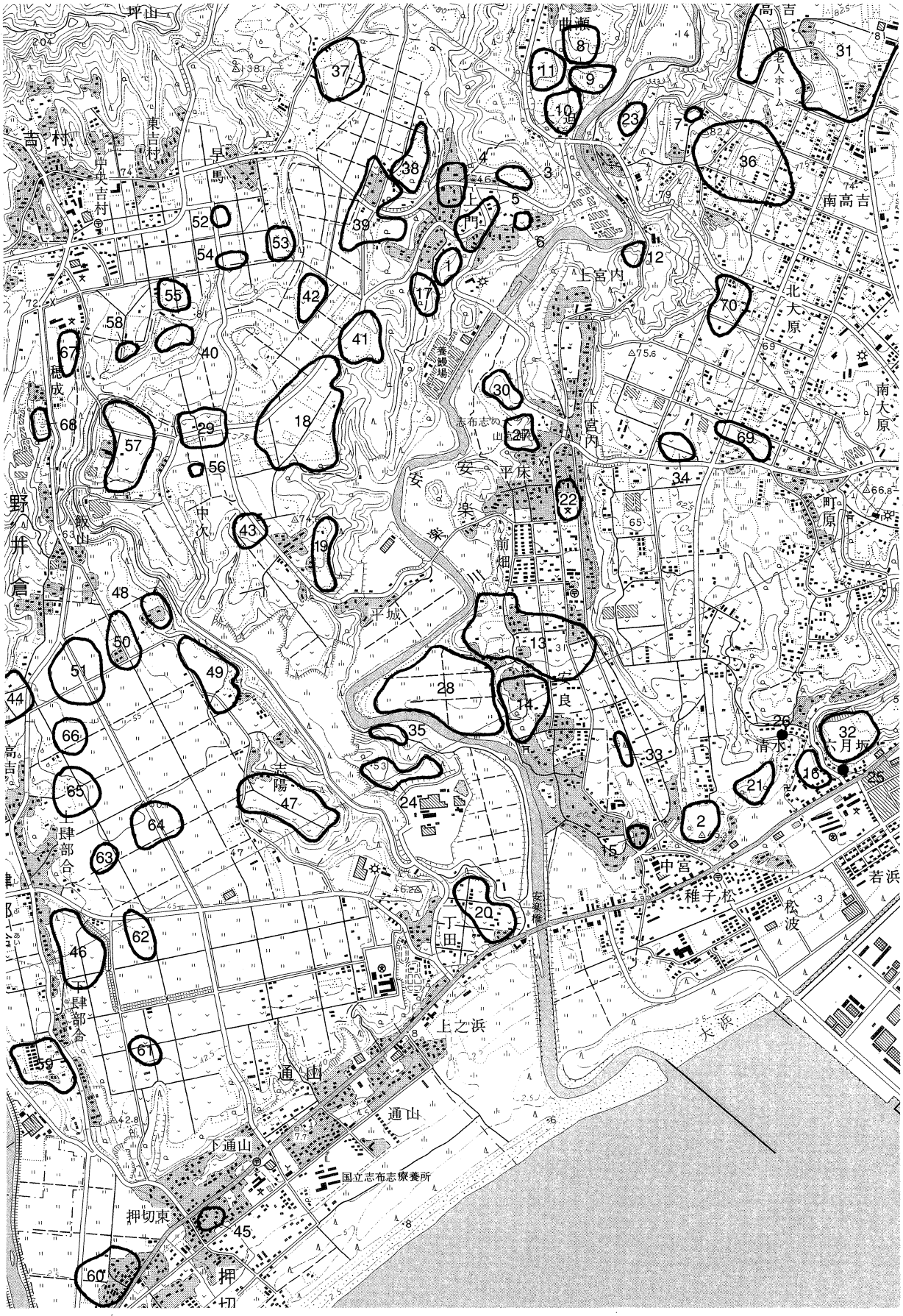
剥片尖頭器・角錐状石器等が出土した志布志町中須Ｂ遺跡・松山町蕨野Ｂ遺跡、細石器が出土した志布志町道重遺跡・中原遺跡、有明町和田上遺跡などがあるものの、調査事例は少ない。

縄文時代

志布志町では故瀬戸口氏等の調査によって、「縄文銀座」と呼ばれるほど多数の遺跡が見つかっている。

草創期　学史上重要な志布志町東黒土田遺跡がある。隆帯文土器や舟形配石炉、貯蔵穴が見つかっている。特に貯蔵穴から出土した堅果類は日本最古である。志布志町鎌石橋遺跡でも隆帯文土器が出土している。

早期　前半期の竪穴建物や集石、連穴土坑が多数見つかった志布志町倉園Ｂ遺跡、塞ノ神Ａ式壺形土器等の良好な資料が出土した夏井土光Ｂ・Ｃ遺跡、耳栓が出土し



第１図　周辺遺跡位置図（１：25,000）

第１表　周辺遺跡地名表

	遺跡番号（旧番号）	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世
1	15-110（68-28）	大久保Ａ	志布志町安楽字大久保		○	○			
2	15-111（68-29）	別府	志布志町安楽字別府		○	○			
3	15-139（68-59）	山角Ａ	志布志町安楽字山角		○				
4	15-140（68-60）	**山角Ｂ**	志布志町安楽山角・炭床		○		○		
5	15-141（68-61）	**炭床**	志布志町安楽字炭床		○		○		
6	15-142（68-62）	上重	志布志町安楽字上重		○				
7	15-143（68-63）	大渡Ｂ	志布志町安楽字大渡		○				
8	15-186（68-109）	中原	志布志町安楽字中原ほか		○				
9	15-187（68-110）	小瀬Ａ	志布志町安楽字小瀬ほか		○				
10	15-188（68-111）	小瀬Ｂ	志布志町安楽字小瀬ほか		○	○			
11	15-189（68-112）	中原（曲瀬）	志布志町安楽中原	○					
12	15-190（68-113）	百堂穴	志布志町安楽字岩戸		○				
13	15-191（68-114）	宮脇	志布志町安楽字宮脇ほか		○			○	
14	15-192（68-115）	安良	志布志町安楽字勢園		○			○	
15	15-193（68-116）	鳥井下	志布志町安楽字鳥居下		○				
16	15-194（68-117）	船磯	志布志町安楽字船磯ほか		○				
17	15-209（68-132）	大久保Ｂ	志布志町安楽字大久保ほか			○			
18	15-210（68-133）	高牧	志布志町安楽字高牧			○			
19	15-211（68-134）	二重堀Ａ	志布志町安楽字二重堀			○			
20	15-212（68-135）	権現原	志布志町安楽字権現原			○			
21	15-213（68-136）	別府上	志布志町安楽字別府上					○	
22	15-221（68-144）	宮内	志布志町安楽字宮内			○		○	
23	15-225（68-147）	大渡	志布志町安楽字大渡		○	○			
24	15-235（68-159）	小牧古墳群	志布志町安楽字小牧				○		
25	15-236（68-160）	六月坂横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫				○	○	
26	15-237（68-161）	水ヶ迫横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫					○	
27	15-238（68-162）	山宮古墳	志布志町安楽字宮下						○
28	15-242（68-168）	水神松	志布志町安楽字水神松				○		
29	15-254（68-180）	金ヶ迫Ａ	志布志町安楽字金ヶ迫			○			
30	15-250（68-176）	安楽城跡	志布志町安楽字前原						○
31	15-259（68-188）	高吉Ｂ	志布志町安楽字都上ほか			○			
32	15-265（68-194）	外堀	志布志町志布志字外堀		○				
33	15-266（68-195）	八ヶ代	志布志町安楽字八ヶ代			○	○		
34	15-281（68-210）	宮之上	志布志町安楽字宮之上					○	
35	15-284（68-213）	安楽小牧	志布志町安楽字小牧		○				
36	15-291（68-220）	船迫	志布志町安楽字船迫ほか			○	○		
37	15-295（-）	渡迫	志布志町安楽字渡迫					○	
38	15-296（-）	上原	志布志町安楽字上原			○			
39	15-297（-）	大久保Ｃ	志布志町安楽字大久保			○			
40	15-298（-）	金ヶ迫Ｂ	志布志町安楽字金ヶ迫			○		○	
41	15-299（-）	七本松Ａ	志布志町安楽字七本松			○			
42	15-300（-）	七本松Ｂ	志布志町安楽字七本松			○			
43	15-301（-）	二重堀Ｂ	志布志町安楽字二重堀			○		○	
44	15-313（69-12）	高吉	有明町野井倉字高吉ほか		○	○			
45	15-348（69-47）	松原	有明町野井倉字松原ほか			○			
46	15-383（69-82）	大代	有明町野井倉字大代ほか		○			○	
47	15-385（69-84）	次五	有明町野井倉字次五ほか					○	
48	15-388（69-87）	東	有明町野井倉字東ほか			○			
49	15-389（69-88）	横堀	有明町野井倉字横堀ほか		○	○	○		
50	15-390（69-89）	下段Ｃ	有明町野井倉字下段ほか		○	○			
51	15-391（69-90）	下段Ｂ	有明町野井倉字下段ほか			○			
52	15-397（69-96）	早馬Ａ	有明町野井倉字早馬			○			
53	15-398（69-97）	早馬Ｂ	有明町野井倉字早馬			○			
54	15-399（69-98）	早馬Ｃ	有明町野井倉字早馬			○			
55	15-400（69-99）	吉原	有明町野井倉字吉原			○		○	
56	15-401（69-100）	中次Ａ	有明町野井倉字中次			○			
57	15-402（69-101）	中次Ｂ	有明町野井倉字中次			○			
58	15-403（69-102）	前原	有明町野井倉字前原			○			
59	15-427（69-126）	平Ａ	有明町野井倉字平ほか				○		
60	15-456（69-155）	塩入	有明町野井倉字塩入ほか			○	○		
61	15-457（69-156）	坂上	有明町野井倉字坂上ほか					○	
62	15-459（69-158）	鎌迫	有明町野井倉字鎌迫ほか			○			
63	15-460（69-159）	上苑上	有明町野井倉字上苑上					○	
64	15-461（69-160）	甚堀	有明町野井倉字甚堀ほか			○			
65	15-462（69-161）	上苑Ｂ	有明町野井倉字上苑ほか					○	
66	15-463（69-162）	下段Ａ	有明町野井倉字下段					○	
67	15-484（69-183）	中原	有明町野井倉字中原ほか			○	○		
68	15-485（69-184）	東原	有明町野井倉字東原			○	○		
69	15-510（-）	尖堀	志布志町志布志字尖堀				○	○	○
70	15-513（-）	見帰	志布志町志布志字見帰		○				

た志布志町稲荷上遺跡・有明町横堀遺跡など、遺跡数が多い。

前期　曽畑式が出土した志布志町別府石踊遺跡・野久尾遺跡、有明町本村遺跡等があるが、調査事例は少ない。

中期　この時期も調査事例は少ないものの、春日式期の竪穴建物が見つかった松山町前谷遺跡、野久尾式や深浦式・船元式が出土した志布志町野久尾遺跡など、学史上重要な遺跡がある。

後期　志布志町の中原遺跡と片野洞穴が有名である。中原遺跡では在地系の宮之迫式・指宿式と瀬戸内系の中津式・福田ＫⅡ式・宿毛式の良好な資料が多数出土している。片野洞穴では西平式～御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨角器が出土している。この他、後期のほぼ全ての型式が出土した志布志町家野遺跡、独鈷石が見つかった出口Ａ遺跡がある。

本遺跡のように中岳Ⅱ式が出土した遺跡としては、志布志町出口Ｂ遺跡・上田屋敷遺跡・家野遺跡・稲荷上遺跡・稲荷迫遺跡、松山町井手間遺跡・前谷Ｂ遺跡・京ノ峯遺跡などがある。特に、稲荷迫遺跡では中岳Ⅱ式の埋設土器が見つかっている。また、完形に復元できるものも出土しており、これまで全形が分かる資料が少なかった中岳Ⅱ式において重要な資料が加わった。

晩期　有明町井手上Ａ遺跡や上苑遺跡では入佐式深鉢の埋設土器が見つかっている。特に井手上Ａ遺跡資料は横位状態のもので類例が少なく、注目できる。志布志町小迫遺跡では黒川式干河原段階の良好な資料が認められている。

本遺跡のように刻目突帯文土器が出土した遺跡としては志布志町夏井土光遺跡・小迫遺跡・稲荷迫遺跡、有明町上苑遺跡・上苑Ａ遺跡がある。また、晩期に属すると考えられる勾玉が志布志町西原Ａ遺跡と小迫遺跡で出土している。

弥生時代

縄文時代に比べると調査事例は少ないものの、重要な遺跡が松山町に存在する。それは京ノ峯遺跡で、中期後半の円形・方形周溝墓が見つかっており、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられている。また、稲荷迫遺跡では中期前～中葉の入来Ⅰ・Ⅱ式期の土坑墓が見つかっている。

井手上Ａ遺跡では中期中葉の入来Ⅱ式期の竪穴建物が見つかっている。中期後半の山ノ口Ⅱ式期になると竪穴建物の検出例は増加し、志布志町柳遺跡、有明町長田遺跡・本村遺跡、松山町井手間遺跡・前谷Ｂ遺跡がある。

このほか、県内で唯一の発見例である中広銅鉾が有明町土橋遺跡で見つかっている。

古墳時代

集落遺跡は有明町において調査事例が多い。仕明遺跡では中津野～東原式期の、屋部当遺跡では辻堂原～笹貫式期の、長田遺跡では笹貫式期の竪穴建物が見つかっている。志布志町でも稲荷迫遺跡で笹貫式期の竪穴建物が見つかっている。なお、市内では笹貫式新段階資料の出土例が多く、志布志町宮脇遺跡・安良遺跡、有明町上苑Ａ遺跡・中牟田遺跡・仕明遺跡がある。「謎の７世紀」と呼ばれている時期の南九州の様相を明らかにする上で注目される地域である。

古墳は、前方後円墳である志布志町飯盛山古墳・小牧１号墳、中期の「造り出し付き円墳」の可能性が指摘されている有明町原田古墳がある。高塚古墳以外には有明町原田地下式横穴墓・馬場地下式横穴墓群、松山町京ノ峯地下式横穴墓群、そして志布志町六月坂横穴墓がある。

古代

志布志町水ヶ迫横穴墓で須恵器の蔵骨器が見つかっている。墨書土器が志布志町小迫遺跡・安良遺跡、松山町牧ノ原Ａ遺跡、有明町井手上Ａ遺跡で出土している。このほかは注目される調査事例は少ない。

中世

国指定史跡である志布志城跡が有名である。志布志城とは、内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。

志布志城は文治５(1189)年頃の救仁院氏の居城に始まって以来、楡井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏など数々の領主に移り変わっており、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り広げられた場所であった。保存整備目的で継続的に調査が行われており、華南三彩など中世後期の中国産陶磁器や東南アジア産陶器が出土している。

この他、市内には建久(1190～1198)年間に地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる志布志町安楽城跡、文治４(1188)年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期(1359年)に救仁郷氏の居城とされる有明町蓬原城跡などが存在する。

山城以外の調査事例では、中世前期の備前焼・常滑焼等の国産陶器や白磁・龍泉窯系青磁等の輸入陶磁器が見つかった志布志町安良遺跡が注目できる。安良遺跡から約１km北に位置する安楽城跡や明治26(1893)年に境内から青白磁四耳壺の蔵骨器や鏡・太刀・青白磁合子などが見つかっている安楽山宮神社を含めて、その歴史的背景が注目される。このほか、有明町長田遺跡・仕明遺跡で中世墓が見つかっている。

この地域は中世において、日向国諸県郡救仁院・救仁郷とされた。また志布志の名が史料で確かめられるのは、正和５(1316)年のことで、「日向方島津御庄**志布志津**大沢水宝満寺敷地…」(『沙弥蓮正打渡状案』)とあり、万寿３(1026)年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

近世

日向国諸県郡志布志郷とされ、東を秋月藩と接することから陸海ともにきわめて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麓」を形成していた。藩米等の集積・積出港であった前川河口には津口番所が置かれていた。藩政末期には琉球を通しての密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は「密貿易屋敷」と呼ばれていた。これら地頭仮屋跡・津口番所跡・密貿易屋敷跡は発掘調査が行われ、陶磁器類が出土している。

近代

太平洋戦争末期、アメリカ軍の南九州上陸作戦（オリンピック作戦）を予想した日本軍は志布志湾沿岸に洞窟式の地下陣地を造った。とくに、海岸に面する台地の断崖に造成された洞窟陣地は総延長16kmに及ぶもので、全ての陣地が地下壕で連絡していた。壕は場所によっては２～３段にもなり、銃眼・砲座などの戦闘施設以外にも、炊事場などの生活施設も存在していた。また、志布志町権現島水際陣地跡も現存している陣地の一つである。

（参考文献）※発掘調査報告書は割愛した。

有明町誌編さん委員会　1980『有明町誌』

大木公彦・内村公大　2012『夏井海岸の地形・地質調査報告書』
志布志市教育委員会

志布志町誌編集委員会　1972『志布志町誌』上巻

志布志町教育委員会　1985『志布志の埋蔵文化財』

第３章　調査の方法

第１節　発掘調査の方法

１　発掘作業の方法

調査範囲は道路建設によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲である。確認調査の結果から、調査区をＡ～Ｄの４地点に分けた。調査面積は915㎡である（第２図）。

各調査区の基準軸は道路のセンター杭を利用し、これを基準に10m間隔でグリッドを設定した。

レベルは県農政部が提示した事業実施計画図面に基づくＢＭ８（海抜42.959m）から引用した。

発掘作業は表土を重機により除去し、Ⅱ層から人力（鋤簾・山鍬）により掘り下げを行った。確認調査の結果から、Ｂ地区Ａ－４・５区のみアカホヤ層下位のⅧ～Ⅸ層まで掘り下げた。

包含層から出土した遺物は一括取上げ及び平板測量により取上げた。出土遺物のうち、平板取上げを行ったものは548点である。

調査現場の写真撮影において、フィルムは35㎜のカラー・白黒・カラーリバーサルの３種類を使用している。

２　整理作業の方法

注記は遺跡名を表す「ＹＡ」を頭に、続けて「地点」「区」「層」「取上番号」の順で記入した。石器のうち、石鏃等の小型のものについては注記を行っていない。

接合後、実測及び報告書掲載のための抽出を行い、実測・トレース・拓本を行った。実測遺物には実測番号を付けて作業管理を行った。土器については実測作業と並行して実体顕微鏡を用いた胎土観察を行った。

遺物・遺構実測図のトレースはロットリングペンを用いた。なお、土層断面図・遺物分布図・遺構配置図の作成にはデジタル技術を用いた。

３　出土遺物の分類・抽出の方法

（１）土器

土器は主にアカホヤ火山灰層上位のⅣ層から出土している。それらの分類は既存の型式にあてはめて行った。文様等の特徴がないもの、あるいは小片等で判断できないものは「無文土器」として扱っている。分類の詳細は第４章において述べる。

実測及び報告書掲載遺物の抽出について、各類の中で数量が多いものは口縁部や底部など特徴的なものを優先した。また小片であっても各類の中で少数のものや時期比定可能なものは抽出した。

（２）石器

石器も土器と同様にⅣ層から主に出土している。それらを器種ごとに分類し、さらにその器種内で石材分類を行った。詳細は第４章において述べる。

報告書掲載遺物の抽出は器種の中で数量が少ないものはそのほとんどを、数量が多いものは特徴的なものを優先した。

（３）石材分類

石材分類について、肉眼観察によってある程度石材産地が推定できる黒曜石は細分化を試みた。頁岩は風化の度合いによって段階的に分類した。その他、砂岩については粒子の粗いものや細かいもの等存在するが、細分は行わなかった。各石材の詳細は以下の通りである。

黒曜石Ⅰ類

不純物を多く含み、漆黒で光を通さないもの。上牛鼻等で採取される黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅱ類

光を通し、不純物を大量に含むもの。アメ色～青味がかった灰色を呈する。三船等で採取される黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅲ類

飴色～黒色を呈し、不純物を含まない良質なもの。腰岳で採取される黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅳ類

灰白色で少し光を通し、黒色の粒状不純物を含むもの。姫島産の黒曜石に類似する。

凝灰岩

火山灰等が堆積し、凝固したもの。白色を呈する。

花崗岩

石英・カリ長石・雲母等を多く含むもの。風化が著しい。

頁岩Ⅰ類

風化が顕著で、白灰色を呈するもの。

頁岩Ⅱ類

風化がみられ、青灰色を呈し、白筋がみられるもの。

頁岩Ⅲ類

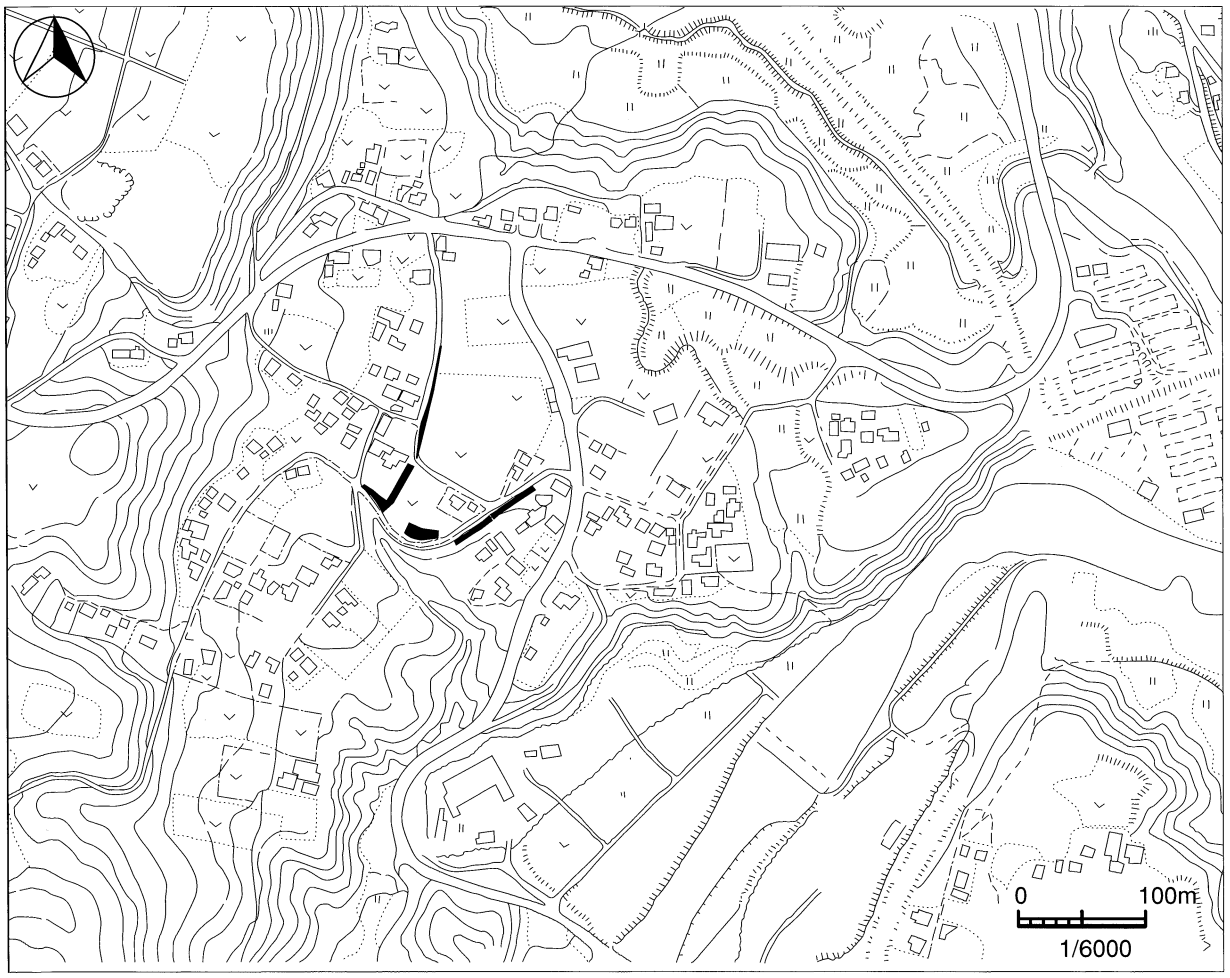
風化がほぼ見られず、暗青灰色を呈するもの。

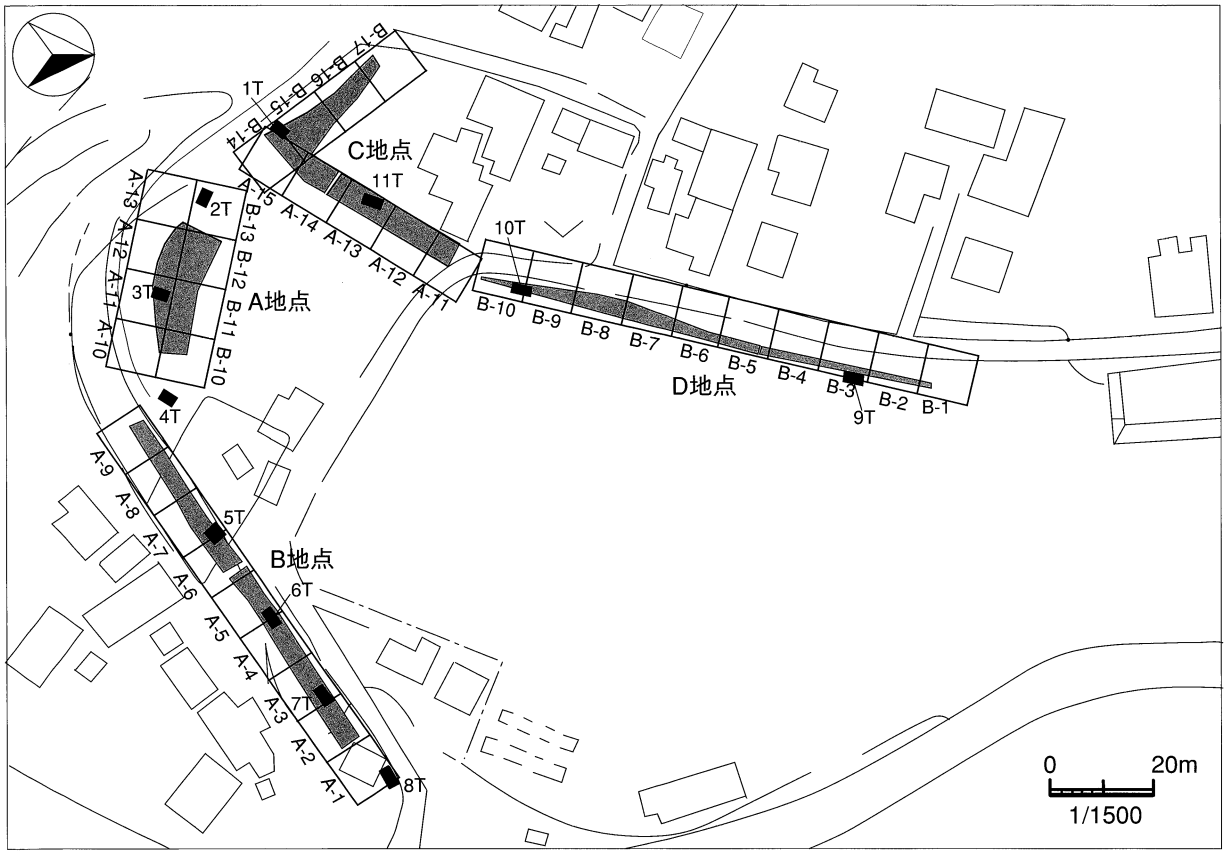
砂岩

砂粒や小礫等が堆積して固まったもの。灰色～やや黄味がかった白灰色を呈する。砂粒の大きさにやや違いがある。

チャート

珪酸を含み、光沢がある。黒灰色を呈する。





第２図　遺跡位置図及びトレンチ・調査区位置図

第２節　層序

基本土層を以下のように設定し、各層の残りが比較的良い、Ａ地点付近の土層断面を基本層序（第３図）として示した。

遺跡全体の残存状況は、一部Ｂ地点東端側でⅢ～Ⅵ層が削平されているものの、全体的に各層とも良好に残存している。以下、各層について説明する。

Ⅰ層：暗茶灰色土。現耕作土。層厚は約 20 cm。

Ⅱａ層：茶灰色土。部分的に大正パミス混じる。層厚は約 15～20 cm。

Ⅱｂ層：茶黒色土。部分的に認められない。層厚は約 30 cm。

Ⅲ層：黒褐色土。層厚は約 20 cm。

Ⅳａ層：暗赤褐色土。本遺跡の主となる遺物包含層である。縄文時代後期～古墳時代の遺物が出土している。層厚は約 25～30 cm。

Ⅳｂ層：黒褐色土。Ⅳa層と同じく、縄文時代後期～古墳時代の遺物が出土している。層厚は約 15～20 cm。

Ⅴ層：茶褐色土。部分的に御池火山灰をゴマシオ状に包含している。層厚は約 20 cm。

Ⅵａ層：暗黒褐色土。層厚は約 15 cm。

Ⅵｂ層：黒褐色土。径２～３cm程度の池田降下軽石を含む。層厚は約 15 cm。

Ⅶａ層：暗黄橙色火山灰土。アカホヤ火山灰の二次堆積によるものか、濁ってみえる。場所によっては認められない。層厚は約 10 cm。

Ⅶｂ層：黄橙色火山灰土。アカホヤ火山灰土。下部に砂粒状のパミスが認められる。層厚は約 45～50 cm。

Ⅷａ層：黒褐色土。縄文時代早期の包含層である。本遺跡でも数点出土している。層厚は約 25～30 cm。

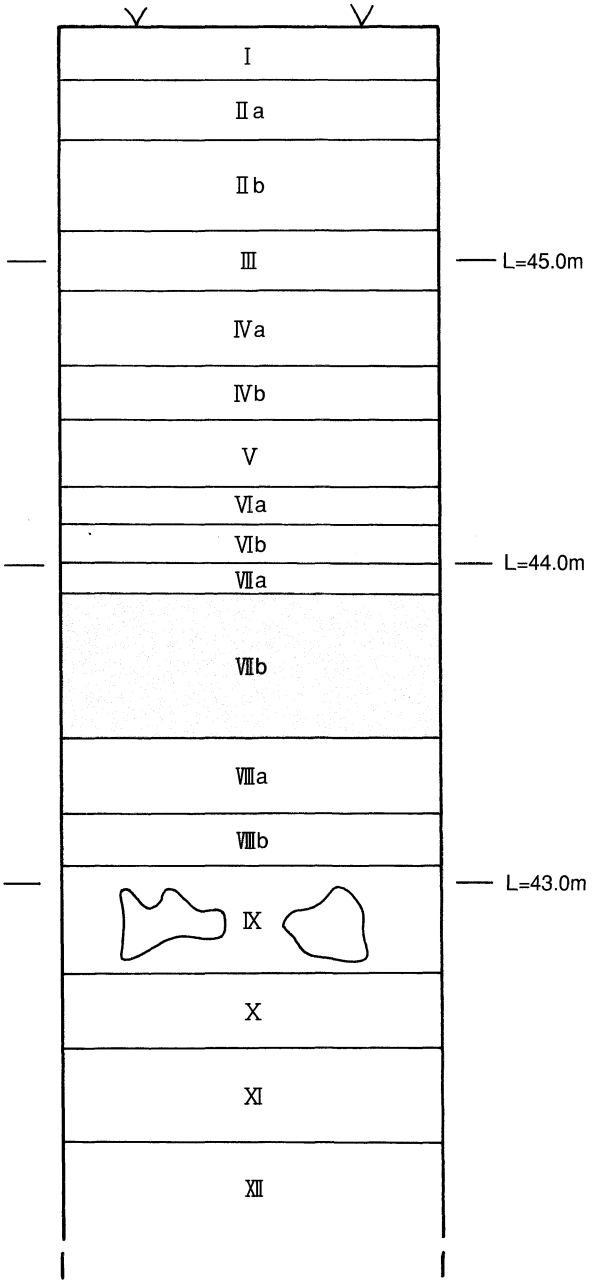
Ⅷｂ層：茶褐色土。径 0.3～0.8 cm程度の黄色パミスを含む。層厚は約 20 cm。

Ⅸ層：暗黄色褐色火山灰土。薩摩火山灰土。部分的に黄色を呈するブロック状の塊が認められる。

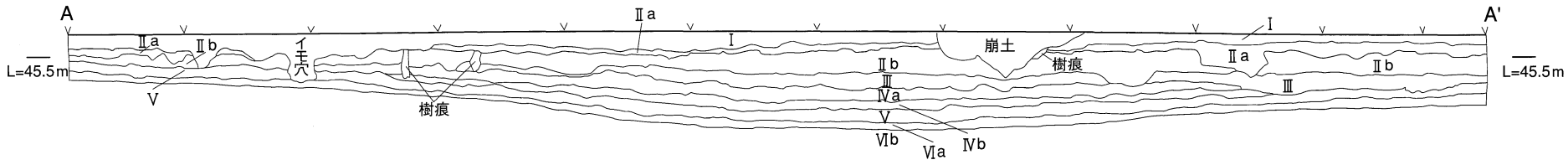
Ⅹ層：暗褐色土層。層厚は約 20 cm。

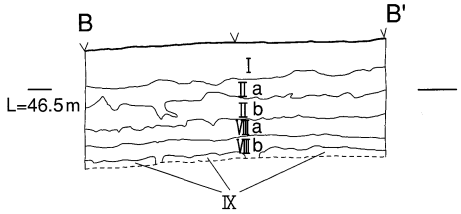
Ⅺ層：暗赤褐色粘質土。チョコ層。粘質が強い。色調や硬さにより細分される。層厚は約 40 cm。

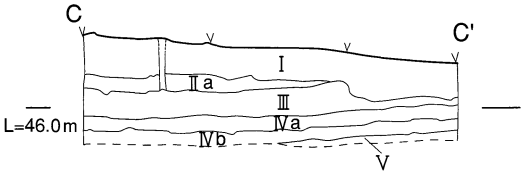
Ⅻ層：黄褐色土。ヌレシラス。

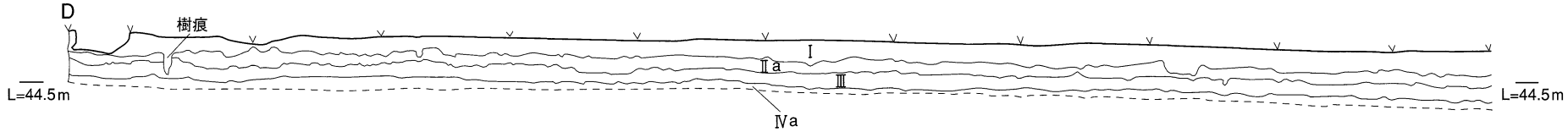


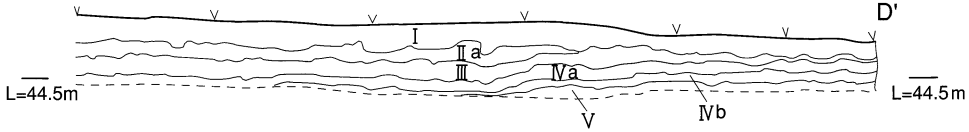
第３図　土層柱状図

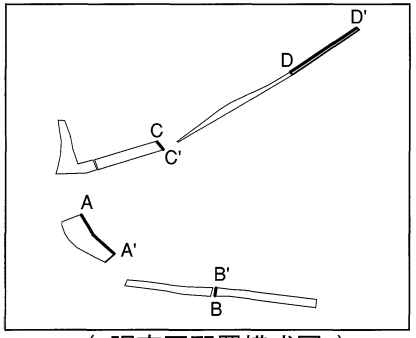












（ 調査区配置模式図 ）

0 2m
1/100

第４図　土層断面図（1：100）

第４章　調査の成果

第１節　縄文時代の調査

１　調査の概要

本遺跡の遺構は、Ｂ地点で縄文時代早期相当のものと考えられる集石が３基、Ｄ地点で縄文時代後期～晩期末のものと考えられる集石が１基確認されている。

遺物はほぼⅣ層内で出土しているが、Ⅷ層内でも数点出土している。なお、調査において一部レベル表記、位置等の記録を怠ったものがあり、不明な部分は写真により推定したものがある。反省する次第である。

２　遺構（第５図）

（１）集石１号

Ｂ地点Ａ－２区Ⅷａ層より、約 152 点の礫が２×３ｍの範囲で散在して検出された。主に 10㎝ 程度の礫が使用されているが、中には 20㎝ を越える礫も確認できる。なお、東側には集石２号が検出している。

（２）集石２号

Ｂ地点Ａ－２区Ⅷａ層より、１×1.5ｍの間に約 32 点の礫が集中して検出された。５～10㎝ 程度の礫が多くみられる。集石１号と隣接して検出しているため、同時期の使用など関係性が窺える。掘り込みは確認できなかった。

（３）集石３号

Ｂ地点Ａ－５区Ⅷａ層より、１×1.5ｍの間に約 33 点の礫が集中して検出された。礫の大きさは５～15㎝ と様々である。掘り込みは確認できなかった。

（４）集石４号

Ｄ地点Ｂ－６区Ⅳａ層より、約 41 点の礫が１×１ｍの狭い範囲で検出された。礫の大きさは５～20㎝ と様々である。石材は砂岩と頁岩が主である。掘り込みは確認できなかった。

３　土器（第７～12 図１～82）

本遺跡出土の縄文時代土器は、縄文時代早期に比定されるものが数点出土しているが、主体となるものは縄文時代後期～晩期末の土器である。形態及び文様により７類に分類し、６類土器は器種ごとにさらに細分した。

出土状況は、１類土器はＢ地点のみの出土で、２類～７類土器はＣ地点・Ｄ地点での出土が目立つ（第６図）。また、Ｂ地点Ａ－２～５区はⅥ層より上位の層が削平されているため、２類以降の土器の出土がほぼない。

１類土器（第７図１・２）

Ⅷａ層より出土し、縄文時代早期に比定される土器を一括した。２点のみの出土である。

１は外面に網目撚糸文を施すもので、口縁部の屈曲部分である。２は底部片である。

２類土器（第７図３～６）

口縁部と胴部に文様を施し、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部に向かってほぼ直線的に外開きする、いわゆる磨消縄文土器を一括した。８点出土し、４点図化した。

３・４は口縁部片である。口縁端部や胴部に沈線や凹点を施す。丁寧にナデ調整を行っている。５・６は胴部片である。外面に沈線文や縄文を施すもの（５）や、沈線文のみのもの（６）など、２つの施文パターンが認められる。

３類土器（第７図７）

１点のみの出土である。内外面ミガキ調整を施し、口縁部に浅い沈線を数条巡らしている。

４類土器（第８・９図８～37）

主に器壁が厚手で、内外面ミガキまたはミガキ様のナデ調整を行い、口縁部が外傾し胴部が張り出す器形の一群である。134 点出土し、30 点図化した。

８は４類土器の中で最も器壁が薄く作られている。口縁～胴部とも無文であり、胴部の張り出しが弱く緩やかに外傾しながら直線的にたちあがる。９も８と同じく無文のものであるが、８と比べ胴部の張り出しが強く、口縁部が短い。胎土に石英・長石類を多く含んでいる。

10・11 は無文の口縁部片である。胴部形態は不明であるが、やや外傾しながら直線的に立ち上がる。器面調整は、ミガキまたはミガキ様のナデである。

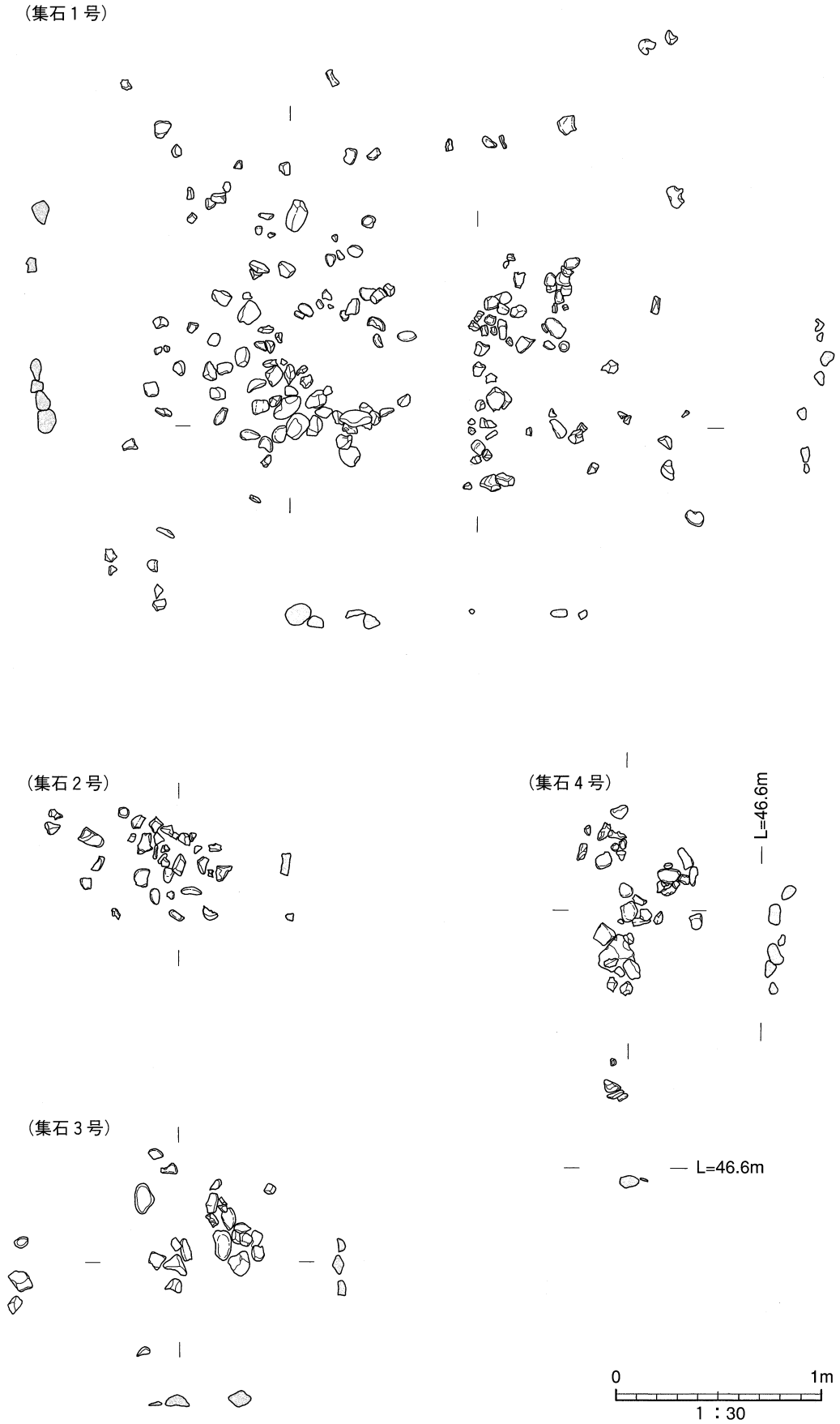
12～15 は口縁端部が肥厚するものである。やや外傾しながら直線的に立ち上がる。器面調整はミガキまたはミガキ様のナデである。

16～26 は口縁端部が肥厚し、肥厚させた端部に１条または２条の凹線を巡らすものである。器形は外傾しながら直線的に立ち上がる。21・22 のように口縁内面に明瞭な段を残すものや、23～25 のように内面に浅い凹線を残すもの、26 の凹線下部に三日月状の凹点文を施すものがある。器面調整はミガキまたはミガキ状のナデが主である。なお、17・18 は胎土に石英・長石を多く含んでいる。

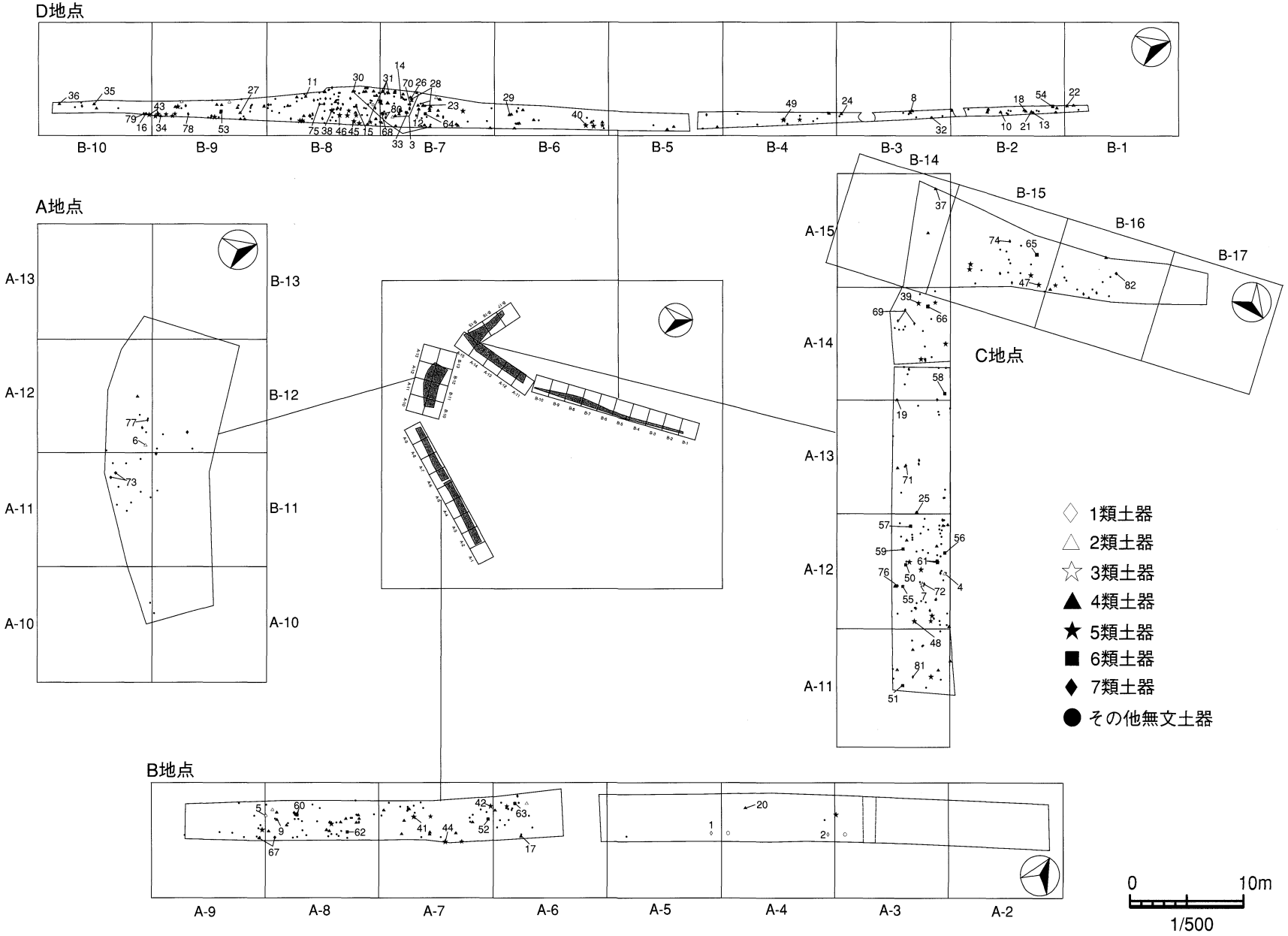
27～37 は４類土器と思われる胴部片を一括したものである。27・28 は無文の胴部である。屈曲部の張り出しが弱く、緩やかに外傾しながら口縁部に至ると考えられる。28 は内面下部に直径４㎜ 程度の孔が観察できるが、外面までは貫通していない。胎土に石英・長石類を多く含んでいる。

29～31 は胴部屈曲部に２条または３条の凹線を巡らすものである。

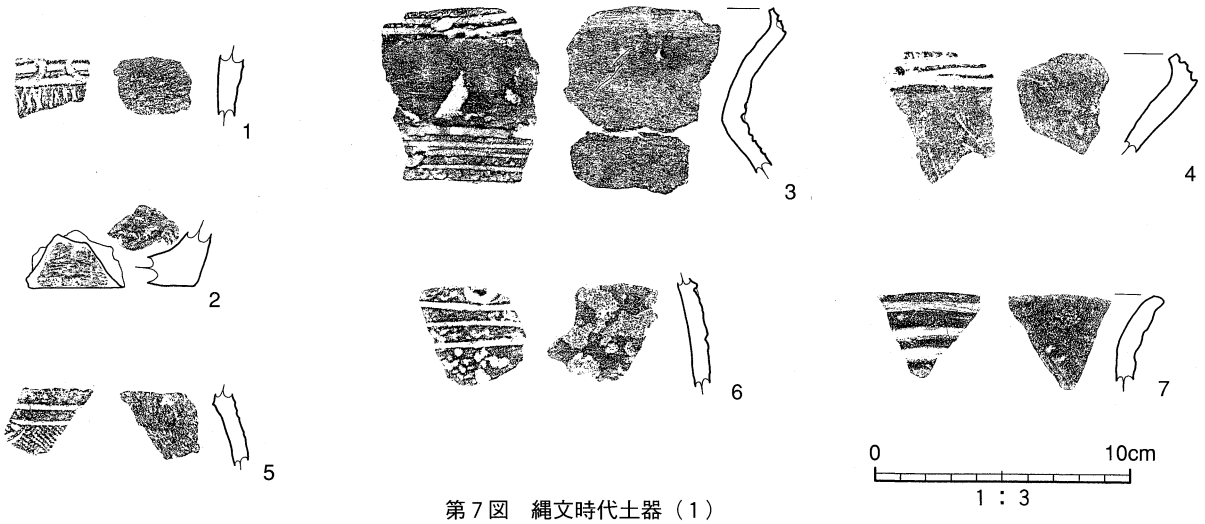
32・33 は外面に凹線文と、凹点文を施すものである。32 は小片であるため全体の器形は不明だが、部分的な凹点文ではなく、連続的に刻目状の文様を巡らすものと考



第５図　集石遺構平・断面図



第6図　縄文時代土器平面分布図



第７図　縄文時代土器（１）

えられる。33 は凹線文の中に部分的に太めの凹点を施す。

34 は胴部に粘土紐を貼付し段を作出している。後述する６類土器の突帯文系土器の可能性もあるが、胎土や器壁の厚さなどを考慮し、４類に分類した。35 は屈曲部にU字状の凹点文と凹線文を施すものである。

36・37 は外面に細い沈線を２条施すものである。

５類土器（第 10 図 38～49）

縄文時代後期～晩期に相当すると考えられる底部片を一括した。20 点出土し、12 点を図化した。

38・39 は底部に圧痕が認められるものである。38 は網代底で、編み方は単独の綾編みである。底面全体にはみられないことから、部分的にナデ消していると考えられる。39 は木葉痕の残る底部である。中心に葉の主茎部分がみられ、葉脈等は確認できない。

40～45 は平底で底面に圧痕が残らないものである。40 は底面にユビ押さえ痕が残る。41 は底面に２点小さい突起状の粘土貼付けがみられる。土器製作後、偶然粘土が貼付いたものか、または底部が不安定だったため、バランス調整のために貼付けたものと考えられる。

46・47 は外面にミガキ状の丁寧なナデが残るものである。内面調整は剥離しているため不明である。

48 は脚台を持つものである。粘土接合部で剥離しており、胴部と底部の接合製作技法がわかる。

49 は尖底を呈するものである。器壁が厚く、粗い調整である。

６類土器（第 11 図 50～66）

縄文時代晩期～晩期末に相当すると考えられる土器の一群である。６類土器と判別できるものは、17 点確認した。器種別に分類し、全点図化した。

深鉢形土器（50～58）

50 は口縁部が外反するものである。内・外面ナデ調整を施す。口縁屈曲部に、沈線状の文様が見られるが、口縁全体に施すものなのか、部分的なものかは不明である。51 は、口縁部がわずかに内傾し直線的に立ち上がるものである。50 に比べ、粗いナデ調整である。

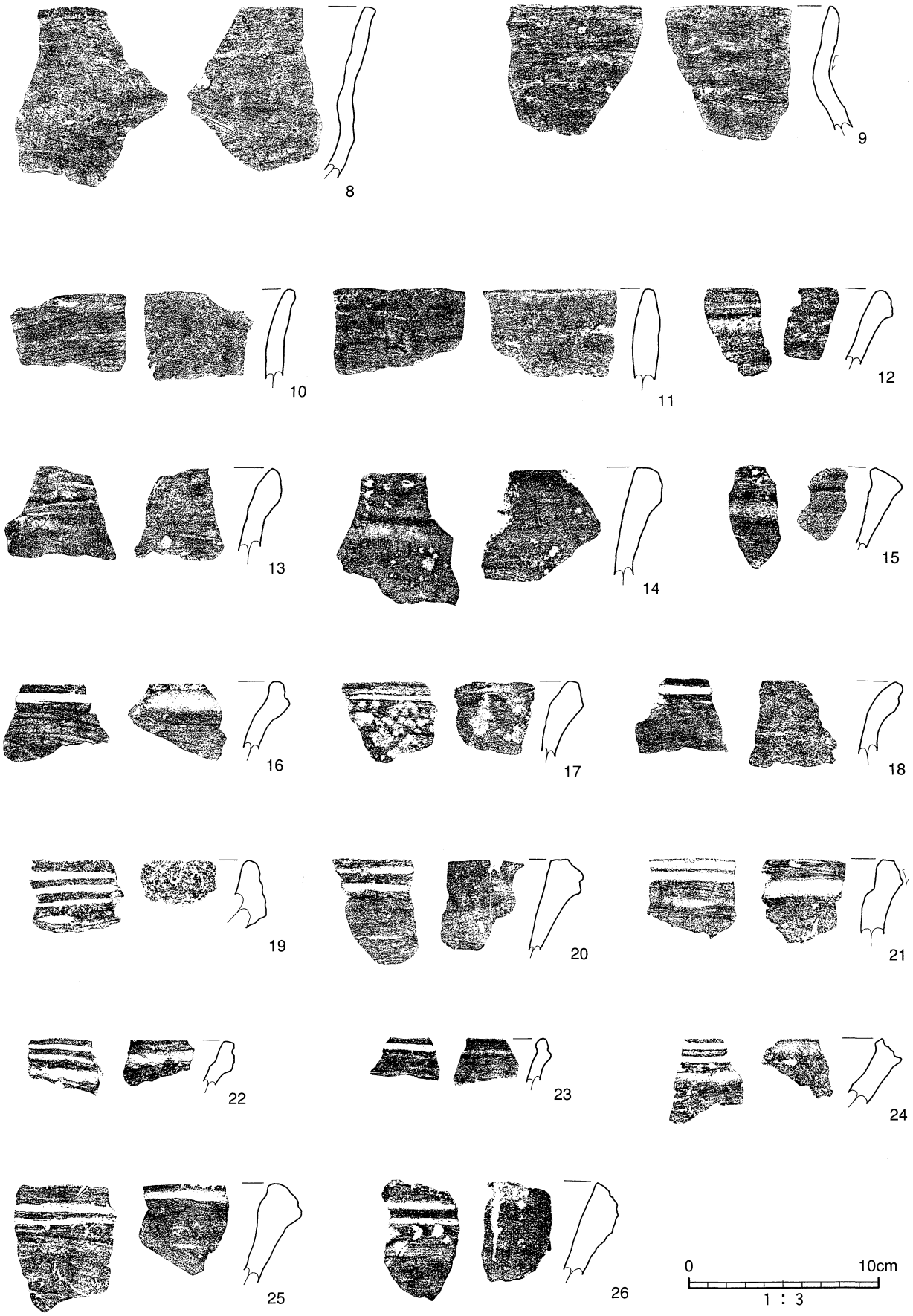
52～57 は外面に無刻目の突帯を施すものである。52 は口縁端部に粘土を貼付けし、肥厚させている。53 は口縁部中位と口縁端部に突帯文を施すものである。わずかに内傾しながら立ち上がる。器壁が薄く、浅鉢の可能性も考えられる。54 は口縁端部直下に、細目の突帯文を施す。

55 は、屈曲部より内傾しながら立ち上がる器形である。わずかに口縁端部を肥厚させている。胴部は屈曲させることにより、見せかけの突帯を表現している。胎土に石英・長石類を多く含んでいる。56・57 は内傾しながら立ち上がる器形である。口縁端部と胴部屈曲部に無刻目の突帯文を施す。外面にミガキ調整を行い、丁寧な印象である。形態・色調が酷似していることから、同一個体の可能性がある。58 は胴部屈曲部片である。黒褐色を呈しているが、55～57 と類似する器形と考えられる。

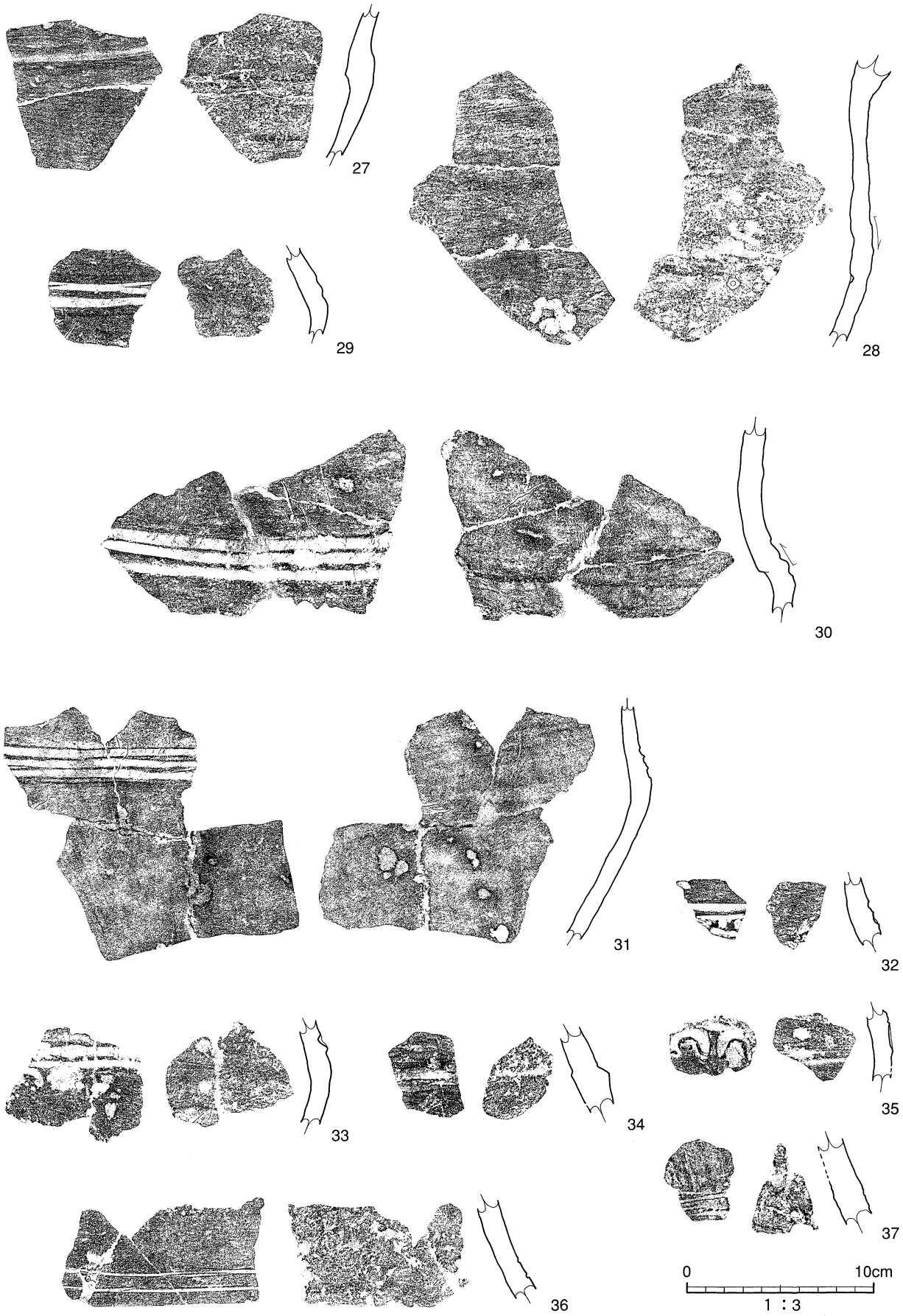
浅鉢形土器（59～63）

59 は粗製の浅鉢形土器である。マリ形を呈し、器壁が薄く、内面屈曲部に明瞭な段を残す。口縁部外面にケズリ痕が部分的にみられる。

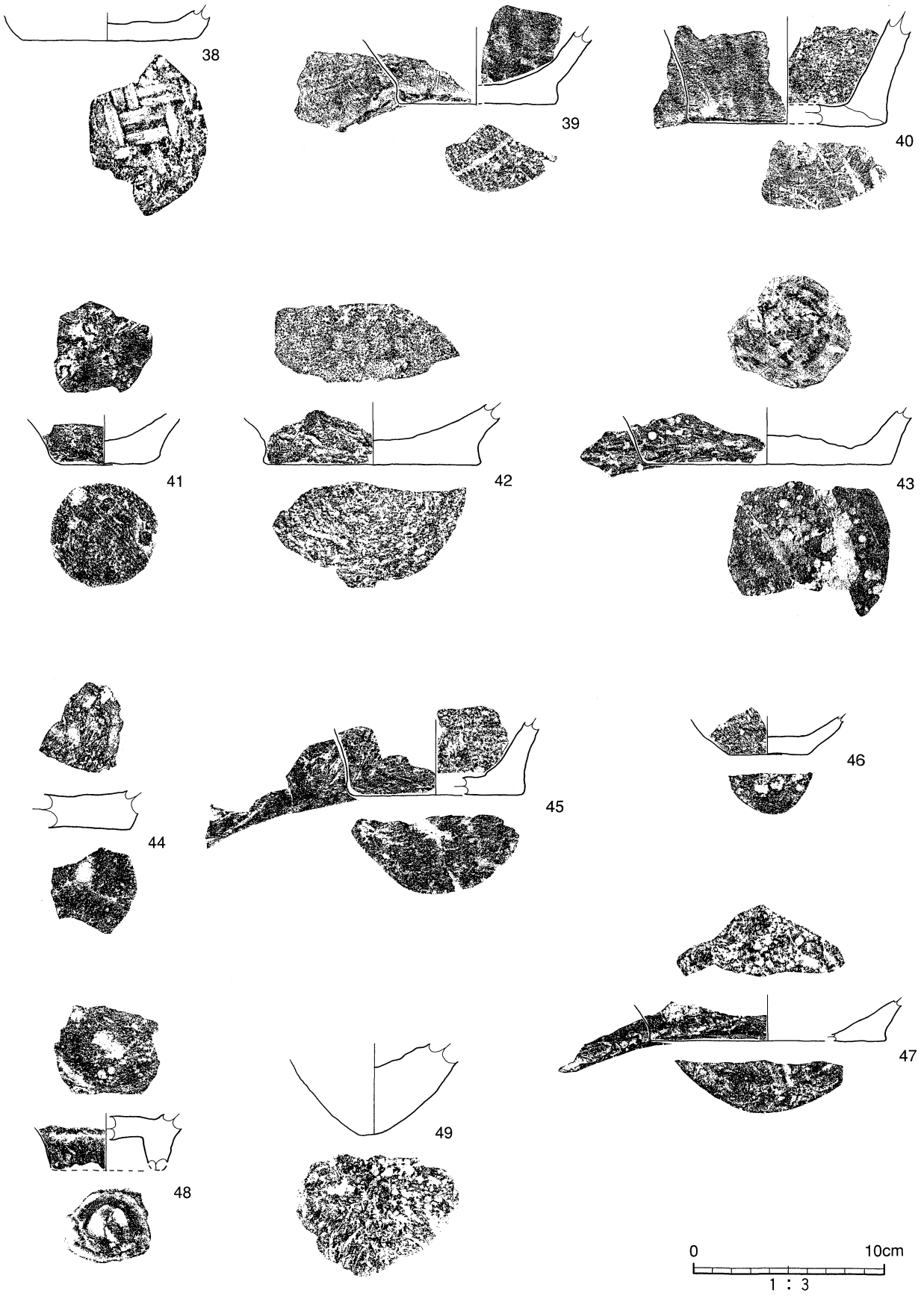
60・61 は精製の浅鉢土器である。60 は内・外面にミガキ調整を施し、口唇部にボタン状突起が貼付けされる。また、外面に赤色顔料が塗布される。61 は直立する器形で、胴部外面にボタン状突起を貼付けし、２条の薄い沈線を巡らす。60 と同様に、赤色顔料を塗布する。



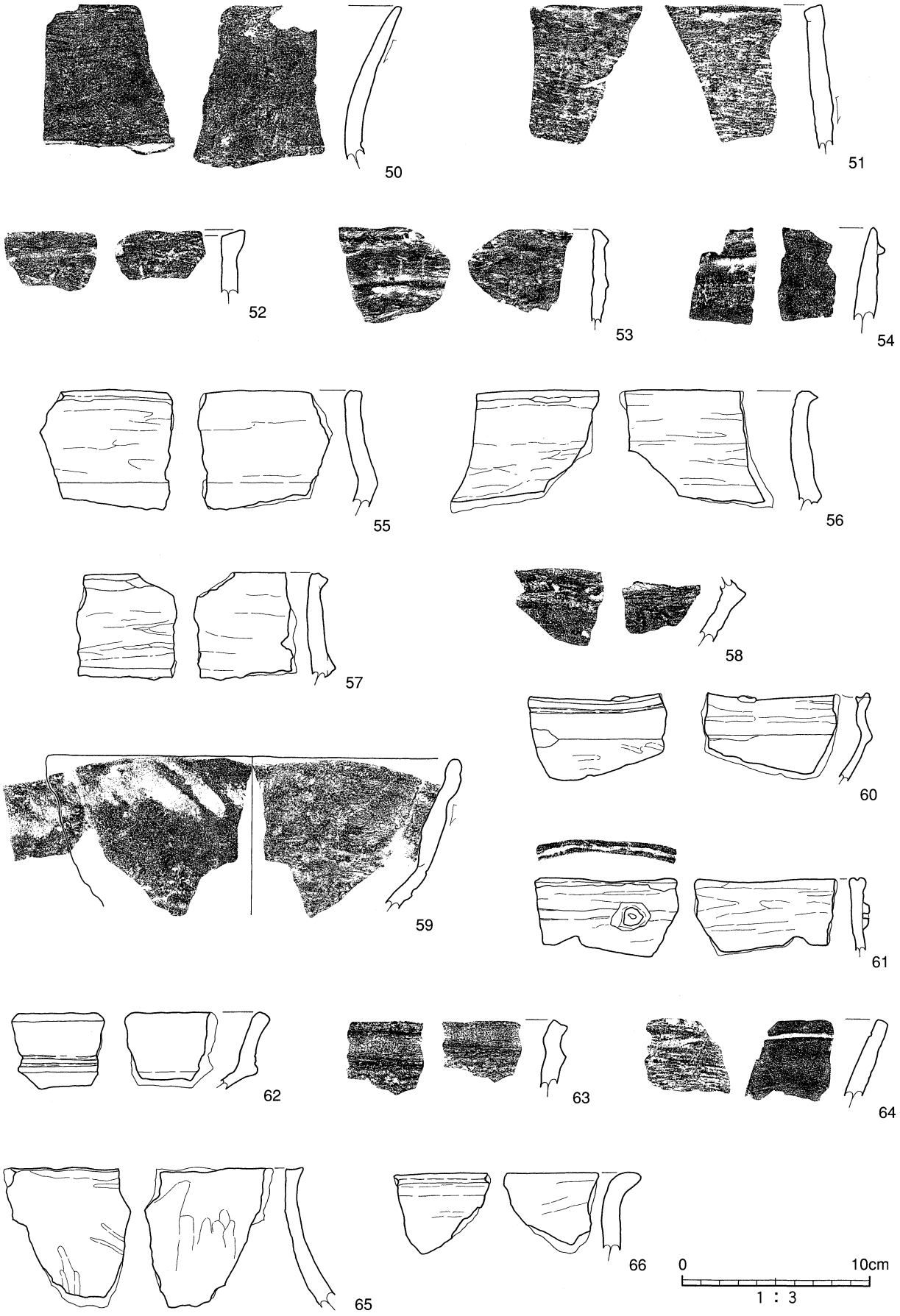
第８図　縄文時代土器（２）



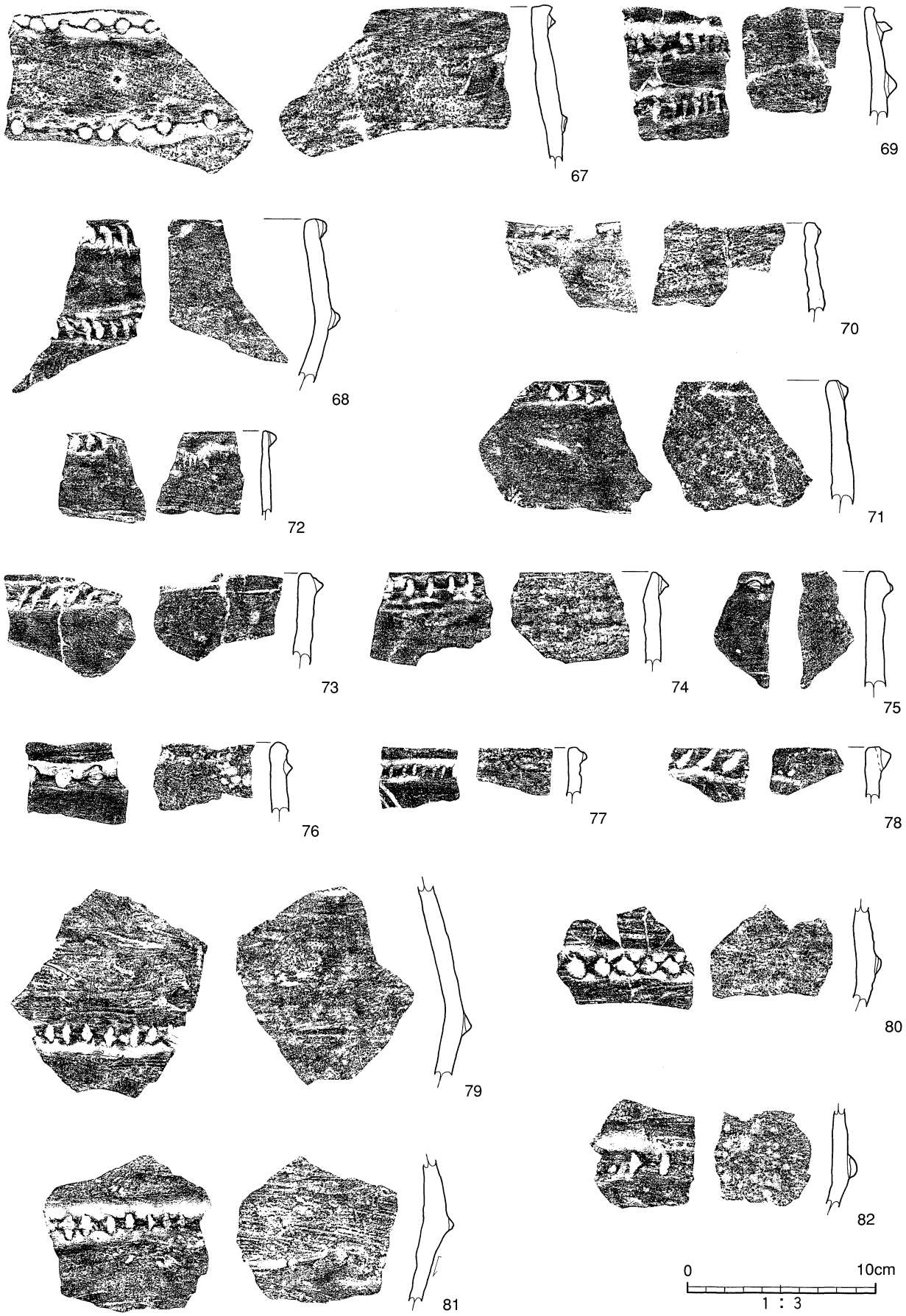
第９図　縄文時代土器（３）



第10図　縄文時代土器（4）



第11図　縄文時代土器（5）



第12図　縄文時代土器（6）

62・63は胴部屈曲部に突帯をもつものである。62は屈曲部上部に２条の浅い沈線を巡らす。

鉢形土器（64）

半粗半精の鉢形土器である。口縁内面に１条の沈線を巡らす。

壺形土器（65・66）

65は内外面にミガキ調整をおこない、口縁端部をわずかに肥厚させるものである。色調・胎土が前述した深鉢形土器の56・57に酷似している。66は頸部より直立して口縁部に至り、口縁端部で外反する器形である。内・外面ナデ調整が施される。

７類土器（第12図67～82）

縄文時代晩期末に比定される、口縁部外面や胴部屈曲部に刻目突帯文を施す一群である。56点出土し、17点図化した。

67～69は、外面に刻目突帯文が２条施されるものである。67・68は、口縁端部と胴部屈曲部に刻目突帯文を施し、屈曲部よりわずかに内傾しながら口縁部に至る。69は胴部に、２条平行にして刻目突帯文を施す。

70～78は、口縁端部に１条の刻目突帯文を施すものである。口縁部片であるため、全体の器形が不明ではあるが、下部にも１条の刻目突帯文が施されるものと考えられる。口縁がわずかに内傾するもの（70・71）や、ほぼ直立するもの（72・78）がある。

79～82は７類に属する胴部片を一括した。すべて胴部屈曲部に１条の刻目突帯文が施されている。

４　石器（第14・15図83～100）

本遺跡の出土石器は、すべてⅣ層内より出土している。明確な時期は層位による特定が困難であるものの、おおむね縄文時代後期～晩期末に属すると考えられる。縄文土器と同様に、C・D地点の出土が主である（第13図）。

石鏃（第14図83～87）

８点出土し、５点を図化した。

83は黒曜石を石材とし、二等辺三角形を呈する。基部に抉りは施されていない。84・85は小型で正三角形を呈し、基部に抉りを施す。石材は頁岩である。

86は頁岩を利用した、部分磨製の石鏃である。刃部を一部打ち欠きにより形成し、基部は磨製により抉りが施される。

87は黒曜石を利用した石鏃の欠損品である。全体的な器形は不明であるが、大型で、84に近い形を呈するものと考えられる。刃部を鋸歯状に加工している。

二次加工剥片（第14図88）

３点出土し、１点図化した。黒曜石を石材としている。片面に剥離面を大きく残し、側縁部には調整痕が確認できる。

石匙（第14図90）

１点のみの出土である。片面に自然面を大きく残し、縁辺部に刃部形成をおこなう。石材はチャートである。

磨製石斧（第14図89・91・92・94）

10点出土し、４点図化した。

89は小型のノミ型石器である。全体を丁寧に磨き形成している。石材は頁岩である。91・92・94は、両側縁部に剥離痕を有しているため、着柄の存在が想定される。

打製石斧（第14図93・95・96）

28点出土しているが、欠損品が多く、完型品の３点を図化した。

93は基部幅に比べ刃部幅が若干広く、ラケットのような形を呈する。95は、基部幅と刃部幅が同じであり、両側縁部に抉りを持つものである。基部に大きく自然面を残す。96は、刃部幅に比べ基部が極端に小さく、有茎の鉄鏃に器形が類似する。両側縁部には細かい刃部形成を行っている。

石錘（第15図97）

１点のみの出土である。三角形状の砂岩を利用している。礫の側縁部と頂点部分を打ち欠いて使用している。

凹石（第15図98）

２点出土し１点図化した。

砂岩の円礫を利用している。両面に凹み部分が確認でき、側縁部には敲打痕が確認できる。

磨石（第15図99）

４点出土し、１点図化した。

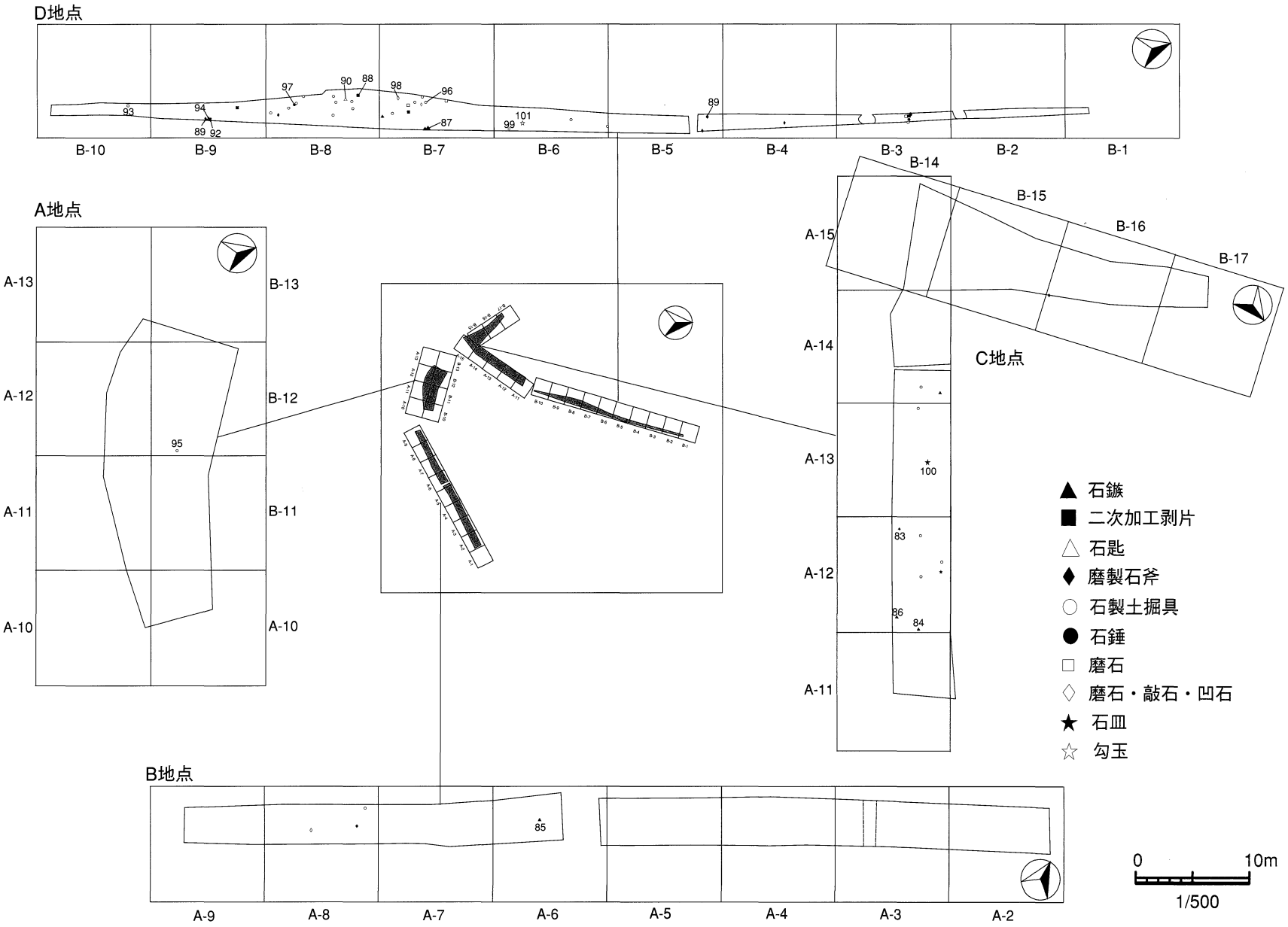
扁平な楕円礫を使用し、表・裏に磨面が認められる。

石皿（第15図100）

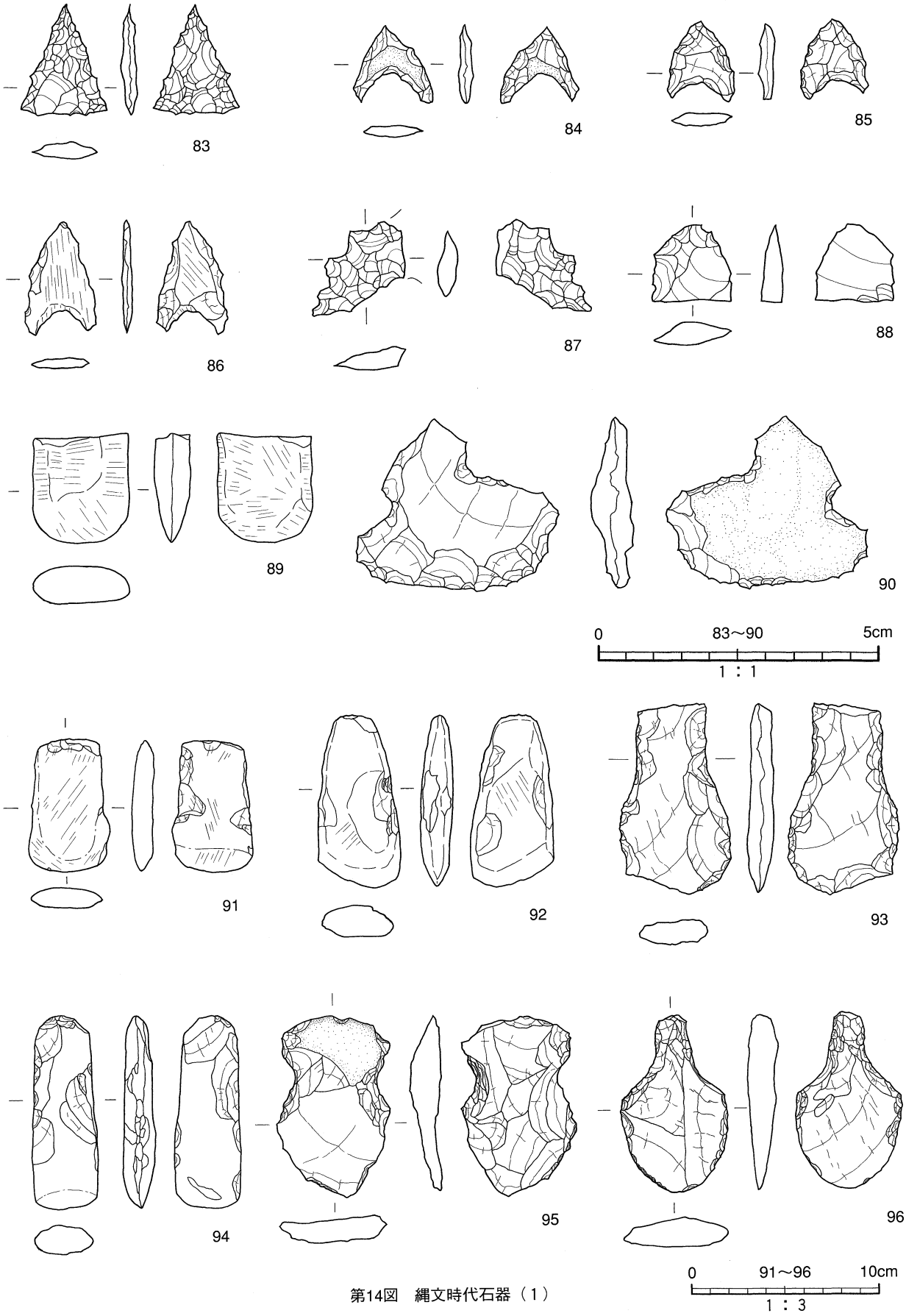
１点のみの出土である。大型の石皿の欠損品である。砂岩を利用し、片面を使用している。

玉類（第15図101）

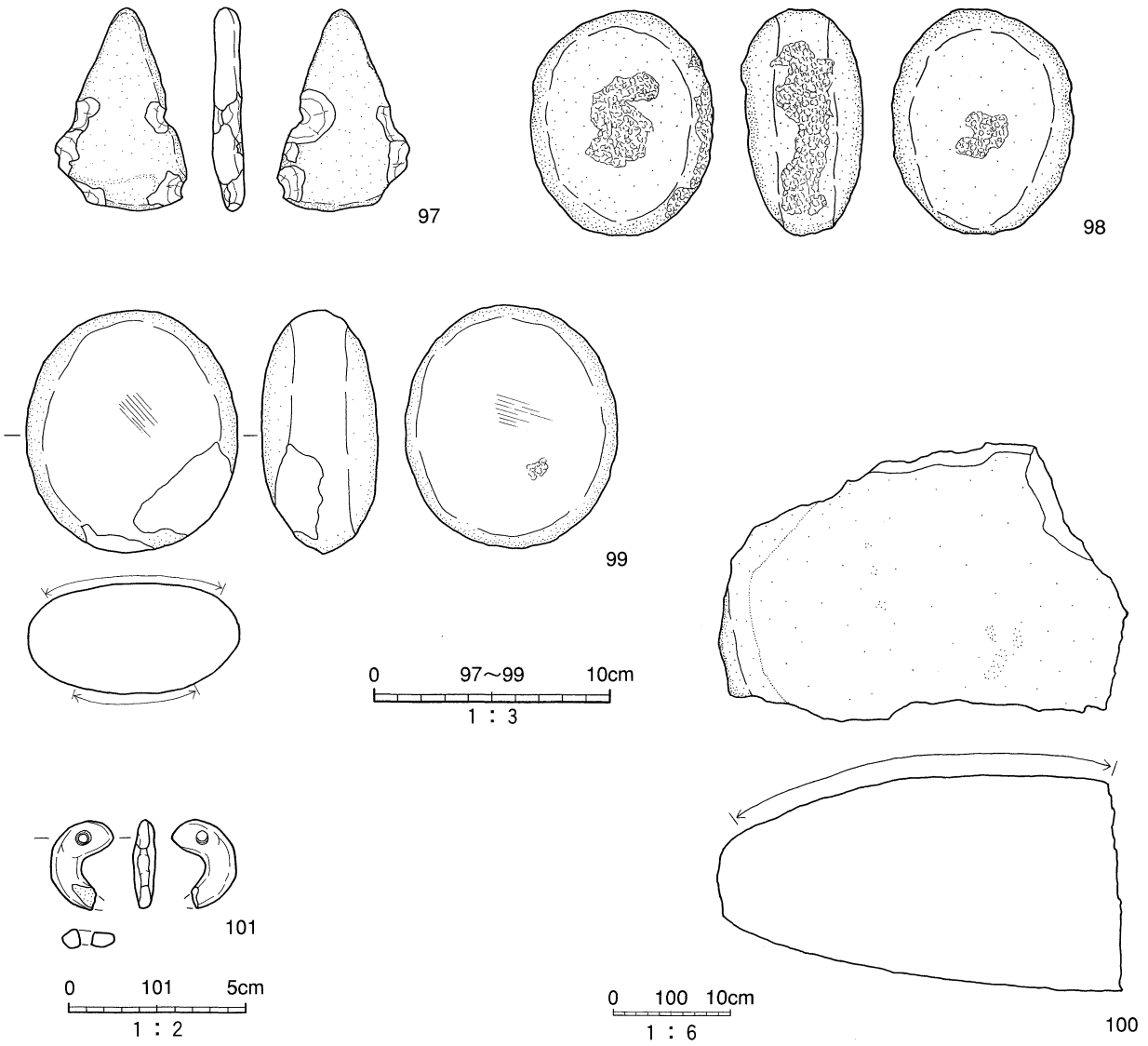
有孔の勾玉である。１点出土した。石英脈状の鉱物が縞状にみられる緑色の石材を使用し、「く」字状に整形している。



第13図　縄文時代石器平面分布図



第14図　縄文時代石器（1）



第15図　縄文時代石器（２）

第２節　古墳時代の調査

１　調査の概要

古墳時代のものと判断できる遺構は確認できなかった。出土遺物はⅣａ・Ⅳｂ層から出土しており、縄文時代遺物と混在している。Ａ・Ｂ・Ｃ地点より散在して出土しているが、出土量は少ない（第16図）。

２　古墳時代土器（第17図102～104）

本遺跡の古墳時代土器は、古墳時代後期に比定される。器種別に分類し、３点図化した。

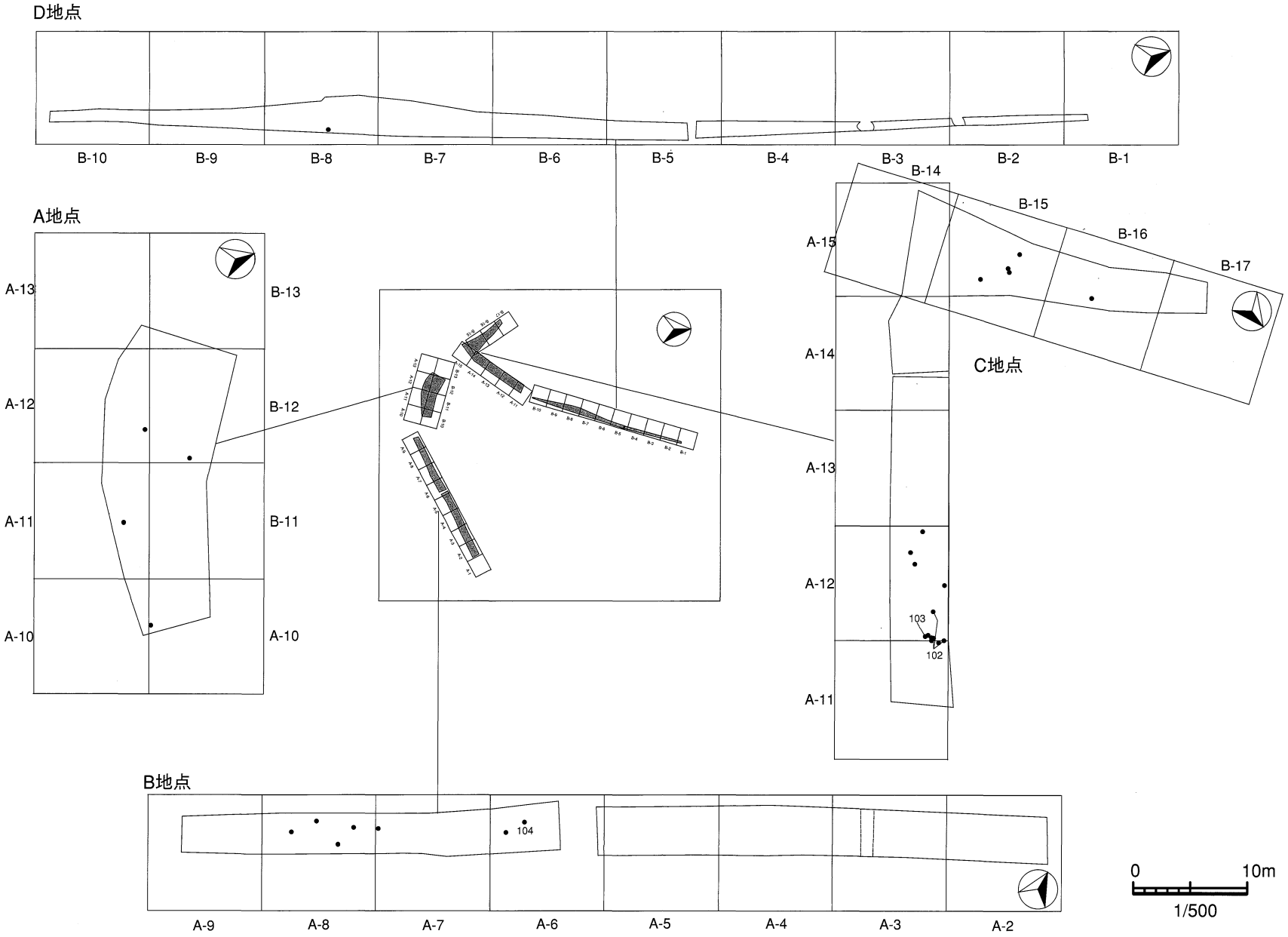
甕形土器（102・103）

28点出土したが、小片が主なため２点のみ図化した。

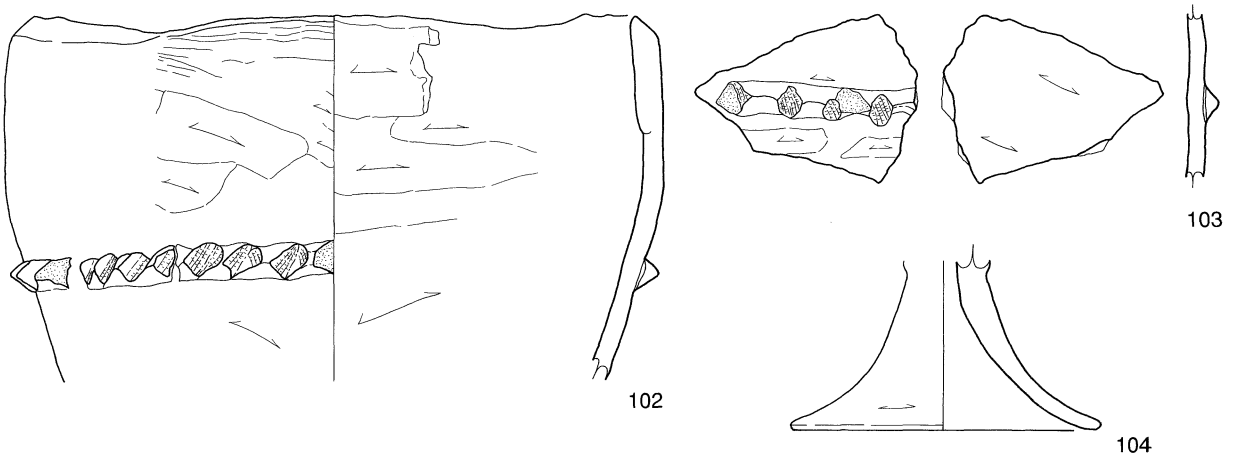
102は胴部よりやや内傾して口縁部に至る器形である。口縁部内外面にヨコナデの調整を行い、外面に粘土紐を貼付けし、刻目文を施す。刻目の中には布目痕がみられる。口径は23.5cmを測る。103も102と同様、外面に刻目の突帯文を施し、刻目の中に布目痕がみられるものである。なお、102と103は形態が類似しているため、同一個体の可能性がある。

高坏（104）

高坏の脚部と考えられるものである。１点出土した。下部に向けてラッパ状に開く器形である。底径は12.2cmを測る。



第16図　古墳時代土器平面分布図



第17図　古墳時代土器

0　10cm
1：3

第２表　縄文時代土器観察表（１）

挿図	No.	取上No.	地点	区	層	分類	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	石／長	角／輝	雲母	風礫	く礫	他	備考
7	1	103	B	6T	8	1	ヨコナデ	工具ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	○	○	○	○			
	2	172	B	A4	8a	1	ヨコナデ	ヨコナデ	暗赤褐(5YR3/6)	暗赤褐(2.5YR3/6)	○	○		○			
	3	90・132	D	B7	4a	2	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	褐灰(10YR4/1)	○			○			
	4	330	C	A12	4a	2	ナデ	ヨコナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○	◎					
	5	77	B	A8	4a	2	ナデ	ナデ	褐(7.5YR4/3)	にぶい黄褐(10YR5/4)	○				△		
	6	17	A	A12	4b	2	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○	◎		○			
	7	326	C	A12	4a	3	ヨコミガキ	ヨコミガキ	暗褐(7.5YR3/4)	褐(7.5YR4/4)	△	△	△				
8	8	241	D	B3	4a	4	丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/2)	○		△				
	9	82	B	A8	4a	4	ミガキ	ヨコミガキ	にぶい褐(7.5YR5/4)	褐(7.5YR4/4)	◎				○		
	10	17	D	B2	4a	4	ヨコミガキ	ヨコナデ	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄褐(10YR5/3)	○	○					
	11	234	D	B8	4b	4	ヨコミガキ	ナデ	黒褐(7.5YR2/2)	暗褐(7.5YR3/4)	○	△					
	12	100	D	B7	4a	4	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐(10YR3/3)	暗褐(10YR3/4)	◎		△				
	13	一括	D	B2	4a	4	ヨコナデ	ヨコナデ	褐(7.5YR4/3)	黒褐(10YR3/1)	○	○		△			
	14	120	D	B7	4a	4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	暗褐(7.5YR3/3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	◎			○			
	15	181	D	B8	4b	4	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(7.5YR3/1)	暗褐(10YR3/3)	○			○			
	16	42	D	10T	3a	4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	暗赤褐(5YR3/4)	暗赤褐(5YR3/2)	○	△		△			
	17	158	B	A6	4a	4	ヨコナデ	ヨコナデ	赤褐(5YR4/6)	暗赤褐(5YR3/4)	◎	○		△			
	18	12	D	B2	4a	4	丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	赤褐(5YR4/6)	にぶい赤褐(5YR4/4)	◎	○					
	19	395	C	A14	4a	4	ヨコナデ	ヨコナデ	褐(7.5YR4/4)	暗赤褐(5YR3/6)	○	○					
	20	34	B	6T	2b	4	ヨコナデ	ヨコミガキ	黒褐(7.5YR3/2)	褐(7.5YR4/3)	○	△					
	21	9	D	B2	4a	4	ナデ	マメツにより不明	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	○				△		
	22	3	D	B1	4a	4	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(10YR3/1)	黒褐(10YR2/2)	○	△	△				
	23	349	D	B7	4a	6	粗いナデ	粗いヨコナデ	黒(10YR2/1)	黒褐(10YR2/2)	○	○	○			△	
	24	34	D	B3	4b	4	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐(7.5YR3/4)	褐(7.5YR4/3)	○		△			△	
	25	371	C	A13	4a	4	ヨコナデ	ヨコミガキ	にぶい橙(7.5YR6/4)	黒褐(10YR3/1)	○				△		
	26	117	D	B7	4a	4	工具ナデ	ヨコナデ	黒褐(10YR3/1)	黒(7.5YR2/1)	○	◎					
9	27	255	D	B9	4a	4	ヨコミガキ	ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/2)	○	○			△		
	28	93・96・116	D	B7	4a	4	ヨコ工具ナデ	ナデ	黒(7.5YR2/1)	明赤褐(5YR5/6)	◎	○		△			
	29	71	D	B6	4b	4	ヨコミガキ	ヨコナデ	黒褐(7.5YR3/2)	黒褐(7.5YR3/1)	○	○					
	30	104・185	D	B7	4a	4	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(5YR3/1)	黒褐(7.5YR2/2)	○	△					
	31	147・149・175	D	B7	4a	4	丁寧なナデ	丁寧なナデ	赤褐(5YR4/6)	明赤褐(5YR5/6)	○	○					
	32	95	D	9T	3a	4	ヨコナデ	ヨコナデ	赤褐(5YR4/6)	明赤褐(5YR5/6)	○	△					
	33	112・129	D	B7	4a	4	ナデ	ナデ	赤褐(2.5YR4/8)	橙(7.5YR6/6)	○	△					
	34	70	D	10T	3a	4	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(10YR3/1)	にぶい黄褐(10YR4/3)	○		△				
	35	281	D	B10	4b	4	ナデ	ヨコナデ	暗赤褐(5YR3/2)	黒褐(7.5YR3/1)	○	△		△			
	36	一括	D	B7	4b	4	ナナメ・ヨコナデ	ナデ	暗褐(7.5YR3/3)	灰黄褐(10YR5/2)	◎	△		○			
	37	29	C	B14	4a	4	ナデ	マメツにより不明	暗褐(10YR3/3)	暗褐(10YR3/3)	○		○				
10	38	200	D	B8	4a	5	胴：ナデ　底：網代	底：ナデ	赤褐(5YR4/6)	赤褐(5YR4/6)	○	○				△	底径9.3cm
	39	413	C	A14	4a	5	胴：ナデ　底：木葉痕	胴：ナデ　底：ミガキ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄褐(10YR4/3)	○	△					底径8.2cm
	40	59	D	B6	4a	5	胴：ヨコナデ　底：ナデ	胴：ヨコナデ　底：ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○				○		底径8.2cm
	41	179	B	A7	4a	5	胴：ヨコナデ　底：ナデ	胴：ナデ　底：ナデ	明赤褐(5YR5/6)	褐灰(10YR4/1)	○	○	△				底径5.8cm
	42	150	B	A7	4a	5	胴：ヨコナデ　底：ナデ	底：ナデ	明赤褐(5YR5/6)	赤褐(5YR4/6)	◎	○					底径11.6cm
	43	51・56・104	D	10T	3a	5	胴：ヨコナデ　底：ミガキ	胴：ヨコナデ　底：ナデ	褐(7.5YR4/4)	赤褐(5YR4/8)	○	○		△			底径13.0cm
	44	139	B	A7	4a	5	胴：ナデ　底：ナデ	底：ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	◎	○		○			
	45	177	D	B8	4a	5	胴：ナナメ・ヨコナデ 底：ナデ	ナデ	にぶい赤褐(5YR4/4)	褐(7.5YR4/4)	○	○					底径9.0cm
	46	197	D	B8	4a	5	胴：ナデ　底：ナデ	マメツにより不明	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	○	△			◎		底径4.4cm
	47	48	C	B15	4a	5	胴：ヨコナデ　底：ナデ	マメツにより不明	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	○	△		△			底径12.4cm
	48	417	C	A21	4a	5	胴：タテナデ　底：ナデ	胴：ナデ　底：ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	◎	◎					底径7.8cm
	49	439	D	B4	4b	5	ナデ	ナデ？	にぶい黄橙(10YR6/4)	黒褐(5YR3/1)	○	○					

第３表　縄文時代土器観察表（２）

挿図	No.	取上No.	地点	区	層	分類	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	石／長	角／輝	雲母	風礫	く礫	他	備考
11	50	348	C	A12	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(10YR3/1)	褐(7.5YR4/3)	○	○	○				
	51	286	C	A11	4a	6	粗いヨコナデ	粗いヨコナデ	黒褐(7.5YR3/1)	にぶい黄褐(10YR5/4)	○	○	○				
	52	147	B	A7	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	黒(10YR2/1)	暗褐(7.5YR3/4)	○		○			△	
	53	262	D	B9	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	黒(7.5YR2/1)	褐(7.5YR4/3)	○		○				
	54	6	D	B2	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	黒(10YR2/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	○						
	55	324	C	A12	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(10YR2/3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	◎	○			△	△	
	56	340	C	A12	4b	6	ヨコミガキ	ヨコミガキ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	○					
	57	357	C	A12	4a	6	ヨコミガキ	ヨコナデ	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	○				△	
	58	387	C	A14	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(7.5YR3/1)	黒褐(10YR3/2)	○		△		△		
	59	99	C	A12	4a	6	ヨコミガキ	ヨコミガキ	黒褐(10YR2/3)	黒褐(10YR3/1)	○	○	△				
	60	87・177	B	A8	4b	6	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR4/3)	○	△			△		外面赤色顔料
	61	334・335	A	A12	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐(5YR4/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	○		△				外面赤色顔料
	62	110	B	A8	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄(2.5Y8/3)	○		○				
	63	163	B	A6	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	○	△	△				
	64	101	D	B7	4a	6	ヨコナデ	丁寧なナデ	黒褐(10YR3/2)	黒褐(10YR2/3)	◎	△					
	65	45	C	B15	4b	6	ヨコナデ	ナデ・タテケズリ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/8)	○	○					
	66	415	C	A14	4a	6	ヨコナデ	ヨコナデ	明褐(7.5YR5/6)	にぶい褐(7.5YR5/4)	○						
12	67	83	B	A8	4a	7	ヨコナデ	粗いヨコナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	○	○		△			
	68	139	D	B7	4a	7	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○	○					
	69	406・411・412	C	A14	4a	7	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(7.5YR3/1)	赤褐(5YR4/6)	◎	○				○	
	70	124	D	B7	4a	7	ナデ	ヨコナデ	暗褐(10YR3/3)	橙(7.5YR6/6)	○	○		△			
	71	378	C	A13	4a	7	ヨコナデ	ナデ	黒褐(10YR3/1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	○	○		△	△		
	72	327	C	A12	4a	7	丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(10YR3/1)	暗灰黄(2.5Y4/2)	△		△				
	73	8・9	A	A11	4a	7	ヨコナデ	ヨコナデ	褐(7.5YR4/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	○				△	
	74	43	C	B15	4b	7	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(10YR3/1)	褐(7.5YR4/4)	○						
	75	218	D	B8	4a	7	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(7.5YR2/2)	赤褐(5YR4/6)	○	○				○	
	76	323	C	A12	4a	7	ヨコナデ	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	にぶい褐(7.5YR5/4)	◎	○					
	77	28	A	A12	4a	7	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(10YR3/1)	明赤褐(5YR5/6)	○	○		△			
	78	273	D	B9	4a	7	ナデ	ヨコナデ	黄褐(2.5Y5/3)	黒褐(10YR2/2)	○	○				△	
	79	46	D	10T	3a	7	粗いヨコナデ	粗いヨコナデ	黒褐(7.5YR3/1)	黒褐(7.5YR3/1)	◎	○		△			
	80	135・151	D	B7	4b	7	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(7.5YR3/1)	褐(7.5YR4/4)	○	○					
	81	290	C	A11	4a	7	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(7.5YR3/1)	褐(7.5YR4/4)	○	○		△			
	82	63	C	B16	4a	7	ヨコナデ	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	○	○		△			

第４表　縄文時代石器観察表（３）

挿図	No.	地点	区	層	時代	分類	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
14	83	C	A12	4a	縄文	石器	石鏃	黒曜石Ⅲ類	2.0	1.6	0.3	0.7	
	84	C	A12	4b	縄文	石器	石鏃	頁岩Ⅱ類	1.4	1.3	0.2	0.3	
	85	D	A6	4a	縄文	石器	石鏃	頁岩Ⅰ類	1.4	1.2	0.3	0.5	
	86	C	A12	4a	縄文	石器	磨製石鏃	頁岩Ⅱ類	2.1	1.3	0.2	0.6	
	87	D	B7	4a	縄文	石器	石鏃	黒曜石Ⅲ類	2.2	1.2	0.3	0.7	
	88	D	B8	4a	縄文	石器	二次加工剥片	黒曜石Ⅲ類	1.4	1.4	3.5	0.7	
	89	D	B5	4b	縄文	石器	磨製石斧	頁岩Ⅲ類	2.0	1.7	0.6	3.42	
	90	D	B8	4a	縄文	石器	石匙	チャート	3.6	3.1	0.7	6.09	
	91	D	B9	4a	縄文	石器	磨製石斧	頁岩Ⅰ類	7.2	4.4	1.0	50.5	
	92	D	B9	4a	縄文	石器	磨製石斧	頁岩Ⅰ類	9.3	4.4	1.7	98.4	
	93	D	10T	4a	縄文	石器	打製石斧	頁岩Ⅰ類	10.3	5.9	1.2	105.76	
	94	D	B9	4a	縄文	石器	磨製石斧	頁岩Ⅰ類	10.6	3.6	1.8	93.6	
	95	A	B12	4a	縄文	石器	打製石斧	頁岩Ⅱ類	9.8	6.2	1.6	98.7	
	96	D	B7	4a	縄文	石器	打製石斧	頁岩Ⅱ類	9.6	5.8	1.7	77.3	
15	97	D	B8	4a	縄文	石器	石錘	砂岩	8.6	5.6	1.3	72.7	
	98	D	B7	4a	縄文	石器	凹石	砂岩	9.6	7.7	5.1	574.6	
	99	D	B6	4b	縄文	石器	磨石	砂岩	10.3	8.9	4.5	568.7	
	100	C	A13	4a	縄文	石器	石皿	砂岩	17.3	11.8	9.0	2642.6	
	101	D	B6	4a	縄文	石器	勾玉	緑色岩	2.6	1.8	0.6	2.6	

第５表　古墳時代土器観察表

挿図	No.	取上No.	地点	区	層	器種	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	石／長	角／輝	雲母	風礫	く礫	他	備考
17	102	300・304・305 306・307・315 424	C	A12	4a	甕	明赤褐(2.5YR5/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	ヨコナデ	ナナメナデ	○	△					口径23.5cm
	103	306	C	A12	4a	甕	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい黄褐(10YR5/3)	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○					
	104	162	B	A6	4a	高坏	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ヨコナデ	ナデ	◎			○		◎	底径12.2cm

第５章　総　括

第１節　縄文時代

１　遺構

本遺跡では、集石遺構が４基検出された。集石１～３号はＢ地点で検出され、検出面であるⅧ層からは、微量ながらも塞ノ神式土器が出土しているため、縄文時代早期に比定されるものと考えられる。集石４号は、Ｄ地点で検出されており、その周辺からは、多くの中岳Ⅱ式土器が出土しているため、縄文時代後期に比定されるものと考えられる。

２　土器

本遺跡出土の縄文土器は、縄文時代早期に比定されるものが２点のみ出土し、それ以外の多くが縄文時代後期～晩期に比定されるものである。これら出土した土器を７類に細分したものを、既存の型式に比定していくと、以下の通りである。

１類：塞ノ神Ａ式土器
２類：西平式土器
３類：三万田式土器
４類：中岳式土器
５類：後期～晩期底部
６類：黒川式土器
７類：刻目突帯文土器

これらの７類に分類した土器のうち主なものについて、時代順に検討していく。

（１）縄文時代早期

本遺跡での主体となる時代ではないが、周辺遺跡において同時期の報告例が少ないため、今回出土は貴重なものとなった。出土した塞ノ神Ａａ式土器は、外面に網目撚糸文を施す甕の口縁部分である。そのため、塞ノ神Ａ式土器期には、この地に人々の生活があったと考えられる。しかし、住居跡が検出されていない点や、出土遺物が少ない点を考慮すると、定住ではなく、キャンプサイトとしての土地利用が考えられる。

（２）縄文時代後期

この時期の主体となる土器型式は、中岳Ⅱ式土器である。東南部九州を中心として分布する土器型式であり、河口貞徳氏によって設定され、鹿児島県曽於市末吉町南之郷に所在する中岳洞穴出土土器を標識としている（河口1980）。その後、桒畑光博氏による中岳Ⅱ式土器の再検討により、西平式土器以降の三万田式・御領式土器と並行関係にあると位置付けられ、それらの土器の器種を補う形で存在するものと提示された（桒畑1989）。

近年、志布志市内でも中岳Ⅱ式土器の出土が数多く確認されており、その中でも、本遺跡から北に直線距離で２ｋｍ程の場所に存在する稲荷迫遺跡では、ほぼ完型に復元できる中岳Ⅱ式土器の埋設土器が出土している。この稲荷迫遺跡の報告の中で、東和幸氏は志布志市家野遺跡出土の中岳Ⅱ式土器と比較し、文様・形態の違いや三万田式土器の有無から、両遺跡の中岳Ⅱ式土器は時間的差があることを指摘している（東2012）。

本遺跡の中岳Ⅱ式土器をみていくと、口縁部内面の窪みが強く、凹線も太いものが多く存在している。この特徴は、家野遺跡出土の中岳Ⅱ式土器の特徴と類似しており、また、本遺跡では三万田式土器も出土している。そのため、本遺跡出土の中岳Ⅱ式土器は家野遺跡出土土器と同時期のものであると考えられる。

なお、胎土に着目すると若干差異が出てくる。本遺跡出土の土器は胎土に金色の雲母を含むものが少なく、確認できたとしても、肉眼観察では観察出来ない程微量である。家野遺跡出土の土器は肉眼観察でも容易に観察できるほど金色の雲母がよく観察できる。これらのことを踏まえると、胎土の違いは時間的な差ではなく、製作地の違いにより差異があるものと考えられる。

以上、本遺跡出土の中岳Ⅱ式土器と他遺跡の土器との検討を行ってきたが、志布志地方には中岳Ⅱ式土器を出土している遺跡がまだ多く存在している。今後は、それらの遺跡との文様・形態と胎土を含めた比較・検討が課題となるであろう。

（３）縄文時代晩期～晩期終末期

この時期を占める土器は、刻目突帯文土器であるが、本遺跡では出土数は少ないが、それに先行する無刻目の突帯を持つ土器が出土している。本報告では、６類黒川式土器として一括している。この無刻目突帯の土器の一群は「干河原段階」と呼称されている（東2009）。志布志市内でも、小迫遺跡において、干河原段階の良好な資料が出土している。

この干河原段階の深鉢形土器と浅鉢形土器の器形を概略すると、深鉢形土器は胴部屈曲部上位で内傾し、口縁部がそのまま内傾した器形になり、屈曲部と口縁部が肥厚する。浅鉢形土器は口縁部・胴部・底部に沈線を巡らすものが特徴的である（東2009）。

本遺跡出土の干河原段階土器もおおむね前述した形式に当てはめることができ、その後に続く刻目突帯文土器文化期に移行していくものと考えられ、本遺跡における、縄文時代晩期～弥生時代初頭の土器文化の流れが看取できる。なお、６類土器として分類した壺形土器は、７類土器の刻目突帯文土器と並行関係にある器種として考えられているが、器種ごとに分類した便宜上、６類土器として一括した。

第６表　縄文時代石器組成・石材組成表

	黒曜石Ⅰ類	黒曜石Ⅱ類	黒曜石Ⅲ類	黒曜石Ⅳ類	頁岩Ⅰ類	頁岩Ⅱ類	頁岩Ⅲ類	砂岩	チャート	クロム白雲母？	合計	百分率
石鏃			2	1	1	2			1		7	7.9
二次加工剥片			1		2						3	3.4
石匙									1		1	1.1
剥片		10	11						3		24	27.0
石核	1										1	1.1
磨製石斧					7	2	1				10	11.2
打製石斧					22	6					28	31.6
石錘								1			1	1.1
磨石								4			4	4.5
磨石・敲石								6			6	6.7
凹石								2			2	2.2
石皿								1			1	1.1
勾玉										1	1	1.1
合計	1	10	14	1	32	10	1	14	5	1	89	－
百分率(%)	1.1	11.2	15.7	1.1	36.1	11.2	1.1	15.8	5.6	1.1	－	－

（４）土器からみえてくる山角Ｂ・炭床遺跡

出土土器を通して、山角Ｂ・炭床遺跡をまとめていく。まず、出土分布をみていくと、Ａ・Ｂ・Ｃ地点（炭床遺跡）側では刻目突帯文土器期の土器の出土が目立ち、Ｄ地点（山角Ｂ遺跡）側では、中岳Ⅱ式土器の出土が目立つ。明確な出土状況の違いがある訳ではないが、おおむね、炭床遺跡は縄文時代晩期～終末期の遺跡、山角Ｂ遺跡は縄文時代後期の遺跡と考えられる。もちろん、両遺跡は隣同士であり、明確な遺跡の線引きは出来るはずもない。よって、以降は調査範囲内での遺跡の時間的な流れを推測していく。

縄文時代早期の頃から、キャンプサイトとして使われたこの土地は、縄文時代後期の西平式土器期より徐々に生活の場として利用され始め、中岳式土器期には生活の場の中心となった。しかし、縄文時代晩期に入ると、人々は他の土地へと移動し始める。そして、畑作農耕文化の流入とともに、この土地も開墾されはじめ、少しずつ人々が戻ってきており、刻目突帯文土器期の頃まで生活が営まれていた。以上のことを踏まえると、山角Ｂ・炭床遺跡は継続的ではなく、断続的に利用された遺跡であると考えられる。

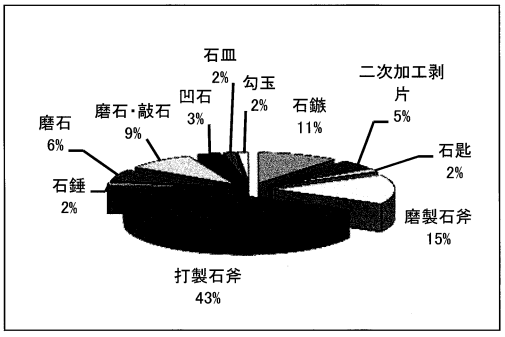
３　石器

本遺跡の出土石器を石材・器種ごとにまとめたものが石器組成表（第６表）である。また、その中から器種として認定できる石器を組成グラフ（第18図）として表した。打製石斧（石製土掘具）が全体の４割以上と多く、次に磨製石斧、石鏃の順となっている。一方、漁撈具としての石錘は１点と少ない。また、磨石・石皿等の製粉具や石匙等の生活道具が出土している点をみると、この地が生活の場として使用されたことを、彷彿とさせる。

ここで一つ疑問点も残る。石錘の出土点数が少ない点である。本遺跡東側崖下には、安楽川が流れており、現在でも天然の鮎や鰻等が獲れる自然豊かな川である。縄文時代には現在と比べ、より豊富な漁業資源が存在したと思われる。また、時期が異なるが、本遺跡より北側には谷を一つ隔てた場所に、465点もの石錘が出土した、中原遺跡が存在しており、漁撈がいかにこの地域の大切な生業であったかは容易に推測できる。現在でも本遺跡より、崖下の安楽川までは、徒歩にして10分程度で移動できる近場である。

では、本遺跡の人々は漁撈に依存せず、狩猟・農耕中心の生活を営んでいたのであろうか。

同じような事例は、前項で触れた稲荷迫遺跡でも報告されている。縄文時代後期～晩期に相当する石器組成をみると、石器全体の出土量に比べやはり石錘の出土量が少ない。このような状況に羽嶋淳洋氏は、魚網錘として使用する石錘は漁場に保管し、住居周辺の生活空間には持ちこまなかった可能性を推測している（羽嶋2012）。つまり、この時期、この地域の人々は、住居などが存在する生活場所と、漁撈・農耕を含め、生産場所を明確に分けた生活体系を構築していたと推測できる。本遺跡において新たに類例を増やしたことは大変興味深いことであり、今後志布志地方における



第18図　縄文時代石器組成

同時期遺跡の石器出土組成について、注意深く見ていくことが必要であろう。

勾玉について

本遺跡からは緑色を呈する勾玉が出土した。勾玉の出土例は、本市では３例目である。鹿児島県内でも緑色を呈する玉類の出土例があり、薩摩半島では南さつま市上加世田遺跡や出水市大坪遺跡で数多く確認されており、大隅半島では曽於市西原遺跡において出土が確認されている。

近年、大坪志子氏により、縄文時代後・晩期における緑色の石材を用いた石製装身具の研究がされており、科学分析の結果「クロム白雲母」という石材であると報告し、出土分布域により中九州地域が原産地であると推定した（大坪2010）。また、藁科哲男氏は、この石材の供給遺跡の分布域をまとめ、その結果、南北800ｋｍの伝播距離が推定できるとしている(藁科2005)。

本遺跡出土の勾玉も緑色を呈しており、出土時期も合致しているため、クロム白雲母を石材としている可能性がある。中九州地域の石材が志布志地方に供給されたとするならば、新たな類例を提示できる貴重な発見になると思われる。今後、石材についての詳細な分析に期待したい。

第２節　古墳時代

この時代における遺構は確認できなかった。出土土器は甕の口縁部分と高坏の脚台である。器形により笹貫式土器であると考えられ、６世紀代に位置づけられる（中村1987）。

近年、志布志市安良遺跡や同市宮脇遺跡にて、笹貫式土器に後続するものと考えられている、内外面に粘土紐接合痕を強く残す等の特徴をもつ、笹貫式土器新段階（中村2009a）が大量に出土し、共伴遺物の須恵器により、おおむね７世紀代に位置づけられると報告されている。両遺跡とも本遺跡より２km圏内に位置し、６世紀代の笹貫式土器の出土は確認されていない。また、本遺跡では、７世紀代の笹貫新段階に位置する遺物は確認できていない。

今回の調査により、この地域において、古墳時代終末期の短い期間で、居住域の変化がみられることが確認できた。

（引用・参考文献）

大坪志子　2010「縄文時代九州石製装身具の波及」『先史学・考古学論究Ｖ　上巻』　龍田考古学会

河口貞徳　1980『中岳洞穴』末吉町教育委員会

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008『西原遺跡・牧ノ原Ｂ遺跡・原村Ⅰ遺跡・原村Ⅱ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書（124）

桒畑光博　1989「東南部九州におけるある縄文土器の型式組列－中岳Ⅱ式土器の再検討－」『鹿児島考古』23　鹿児島県考古学会

志布志町教育委員会　1985『志布志の埋蔵文化財　周知の遺跡詳細分布状況』

志布志町教育委員会　1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）

志布志町教育委員会　1994『家野遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（24）

志布志町教育委員会　1998『小迫遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（27）

志布志町教育委員会　2001『宮脇遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（28）

志布志市教育委員会　2012『安良遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

堂込秀人　1997「南九州縄文晩期土器の再検討」『鹿児島考古』31　鹿児島県考古学会

中村直子　1987「成川式土器再考」『鹿大考古』６

中村直子　2009「７・８世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考』　南九州縄文研究会

羽嶋郭洋　2012「第Ｖ章　第３節」『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

東　和幸　2012「第Ｖ章　第２節」『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

東　和幸　2009「干河原段階の土器」『南の縄文・地域文化論考』　南九州縄文研究会

藤尾慎一郎　1992「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』27　鹿児島県考古学会

水ノ江和同・前迫亮一　2010「１.九州」『西日本の縄文土器　後期』　真陽社

藁科哲男　2005「大坪遺跡出土の玉類・玉材片の産地分析」『大坪遺跡　下巻』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）

付編　宇都遺跡出土遺物の紹介

第１節　概要

宇都遺跡は志布志市松山町新橋に所在し、標高約180ｍのシラス台地上に立地する。平成５(1993)年12月～平成６(1994)年２月に県営畑地帯総合土地改良事業に伴って、旧松山町教育委員会が確認調査を行い、平成６(1994)年３月に報告書が刊行されている。ところが、諸般の事情により出土遺物が報告されなかったため、今回ここで報告する。特に14トレンチでは縄文時代中期の大平式土器が数多く出土しており、注目できる資料と考える。

第２節　出土遺物

トレンチごとに出土遺物を紹介する。

１　１トレンチ（第19図１・２）

縄文時代後期土器が出土している。

１は凹線文を３＋α状施す。宮之迫式土器に比定できる。２は編組製品の圧痕が残る底部である。

２　３トレンチ（第19図３・４）

縄文時代早期土器が出土している。

３は斜位の貝殻条痕後に縦位の貝殻復縁刺突文を施す。加栗山式土器に比定できる。４は楕円押型文を施す。

３　６トレンチ（第19図６～８）

縄文時代早期土器が出土している。

６は口縁部上端に横位の貝殻腹縁刺突文を、その下位には縦位の貝殻条痕後に縦位の貝殻腹縁刺突文を施す。７は斜位の貝殻条痕後に縦位の貝殻腹縁刺突文を施す。８は貝殻条痕を綾杉状に施す。６・７は加栗山式土器に、８は石坂式土器に比定できる。

４　11トレンチ（第19図５）

縄文時代後期土器が出土している。

口縁部外面上端に二条の凹線文が施されるもので、中岳Ⅱ式土器に比定できる。

５　13トレンチ（第22図43）

三船産と考えられる黒曜石を利用した石鏃である。基部に深い抉りがあり、明確に脚部が作出される。13トレンチでは土器が出土しておらず、時期は不明である。

６　14トレンチ（第19～22図９～41・44）

縄文時代早・中・後・晩期の遺物が出土しており、特に中期の大平式土器がそのほとんどを占める。

（１）早期土器（９）

角筒土器の底部で、底端部に刻目が巡る。加栗山式～吉田式土器の底部と考えられる。

（２）中期土器（10～36）

口縁部に段を作出して、その段から上位に施文するもので、大平式土器に比定できる。器面調整は貝殻条痕やナデ調整が行われる。器面がアバタ上に磨滅しているものが多い。口縁部は形態から４つに細分した。

口縁部１類（10～12）

内湾するものである。10はヘラ状工具による刺突文を施す。口縁部に三叉状の突起を有する。11はヨコ貝殻条痕後に粘土を貼付し、段をなす。二叉状工具による押引文を施す。12は沈線文を施す。

口縁部２類（13～20）

内傾・直行・外傾し、段が明瞭なものである。13・14・18・19は沈線文を施す。15は二条の沈線内に連点文を施す。16は貝殻条痕による押引文を施す。17はヘラ状工具による押引状の連点文を施し、胴部にも文様が認められる。20は二叉状工具による沈線文を施す。

口縁部３類（21～26）

直行・外傾し、段が不明瞭なものである。21は沈線文と一部沈線に沿うように連点文を施す。22は凹線文を施す。粘土を貼付して段を作出するが、不明瞭である。胎土に金色雲母を含む。23・24は沈線文を施す。

25は口縁部が外傾し、胴部が張り、平底となる。歪みが著しく、断面形は一様ではない。口縁部の段が部分的に確認できる。口縁端部には突起が貼付されていたと考えられ、接合痕が残る。

26は平底となる底部から口縁部にむかって外傾するものである。口縁部の段が部分的に確認できる。歪みが著しく、口縁部上面観は楕円形となる。大平式土器の無文土器と考えられる。

口縁部４類（27～29）

段の有無が不明瞭なものである。27は沈線間に連点文を施す。28・29は貝殻復縁により波状文などを施す。

胴部・底部（30～36）

大平式土器の胴部または底部と考えられるものである。30は内面に赤色顔料が付着しており、赤色顔料の容器であった可能性がある。なお、赤色顔料は鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて成分分析を行った結果、パイプ状ベンガラであることが判明した（第３節参照）。

31～34は底端部に張り出しを持つもので、35・36は張り出しを持たないものである。底面や外面に木灰と思われる白色物質が付着しており、特に31・33～35は大量に付着している。

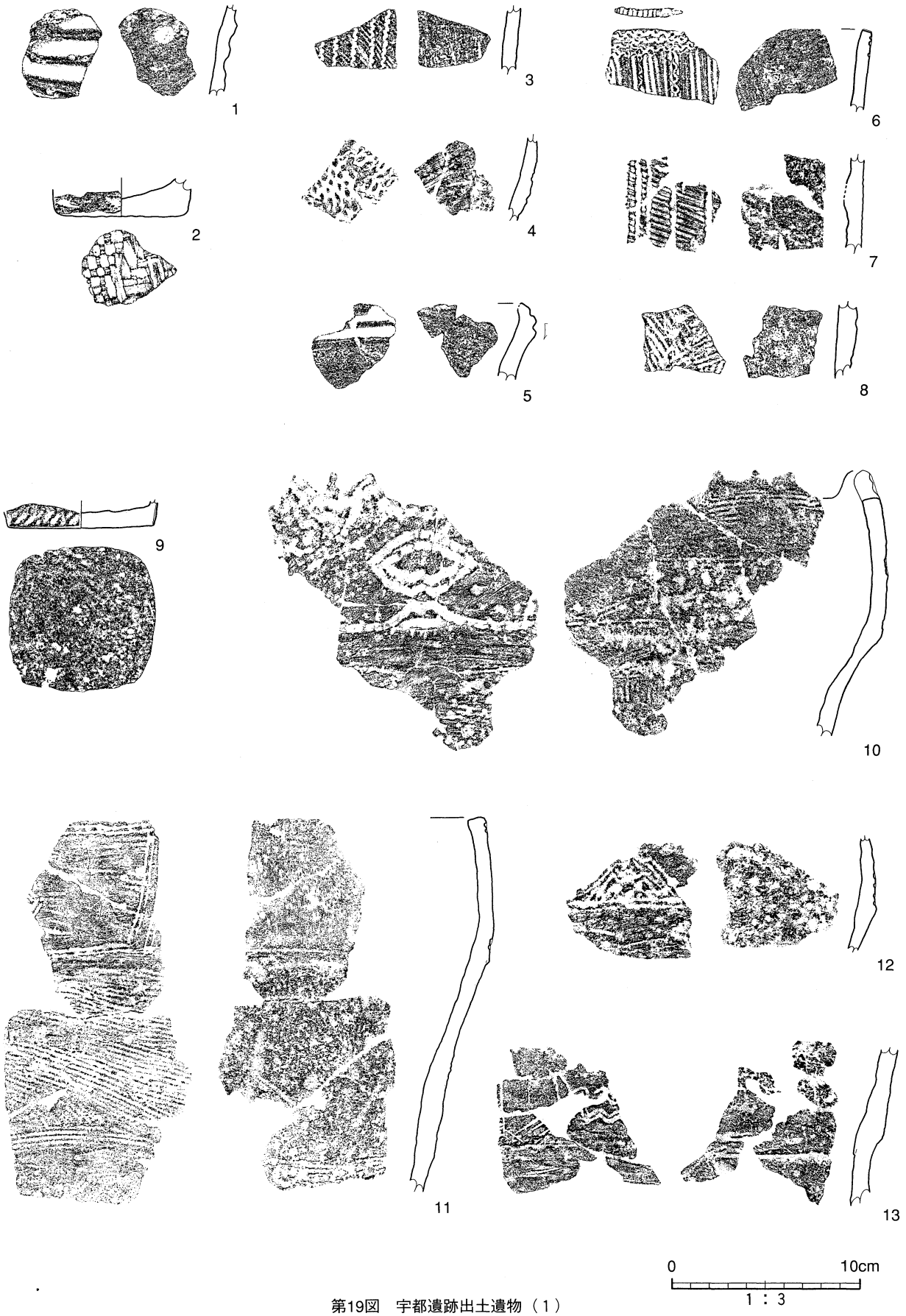
（３）後期土器（37・38）

37は口縁部上端に凹点を２段に施し、その下位に横位の凹線文を施す。宮之迫式土器に比定できる。

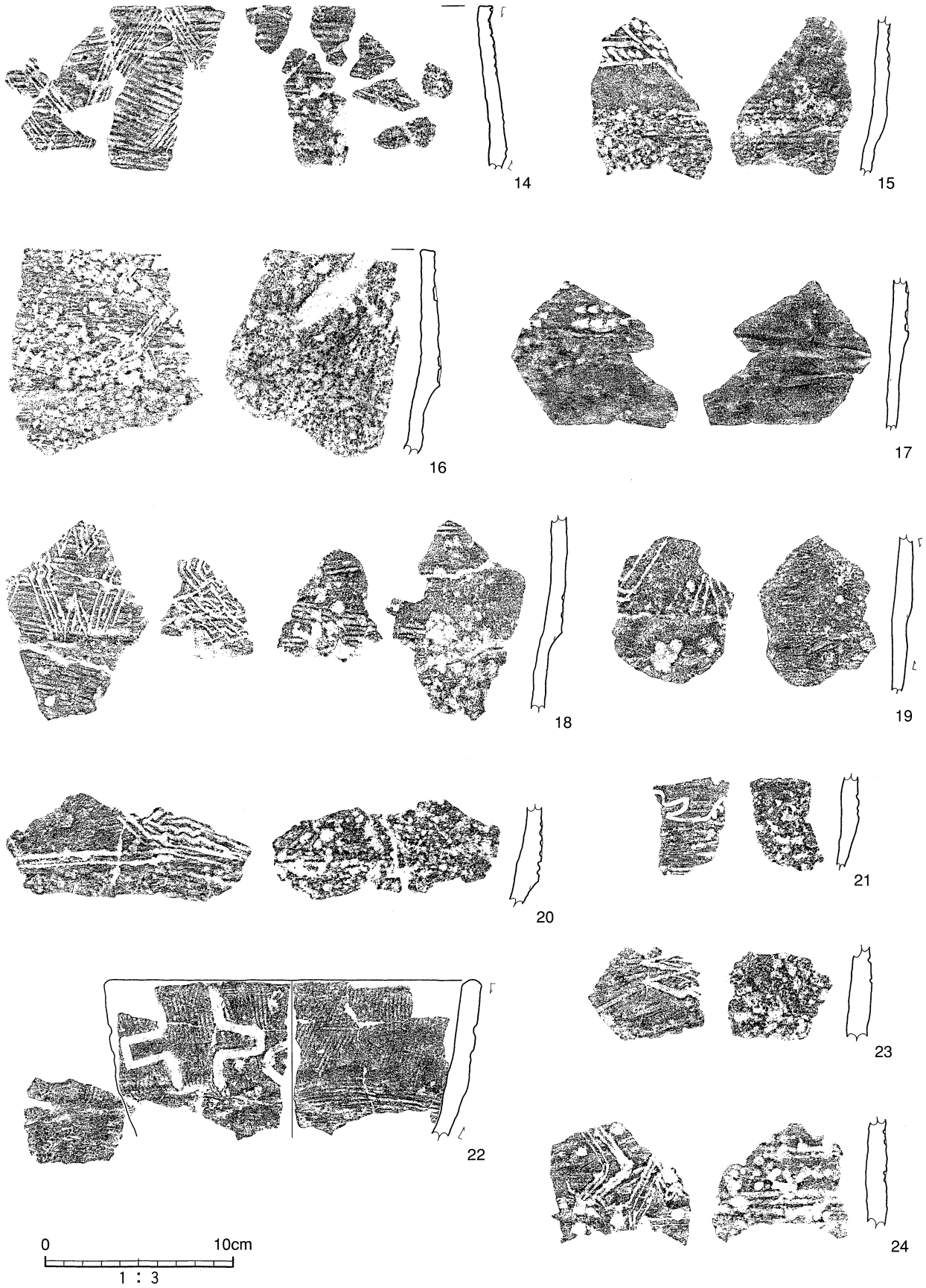
38は口縁部上端を肥厚させ、そこに貝殻腹縁刺突文を斜位に巡らせる。市来式土器に比定できる。

（４）晩期土器（40）

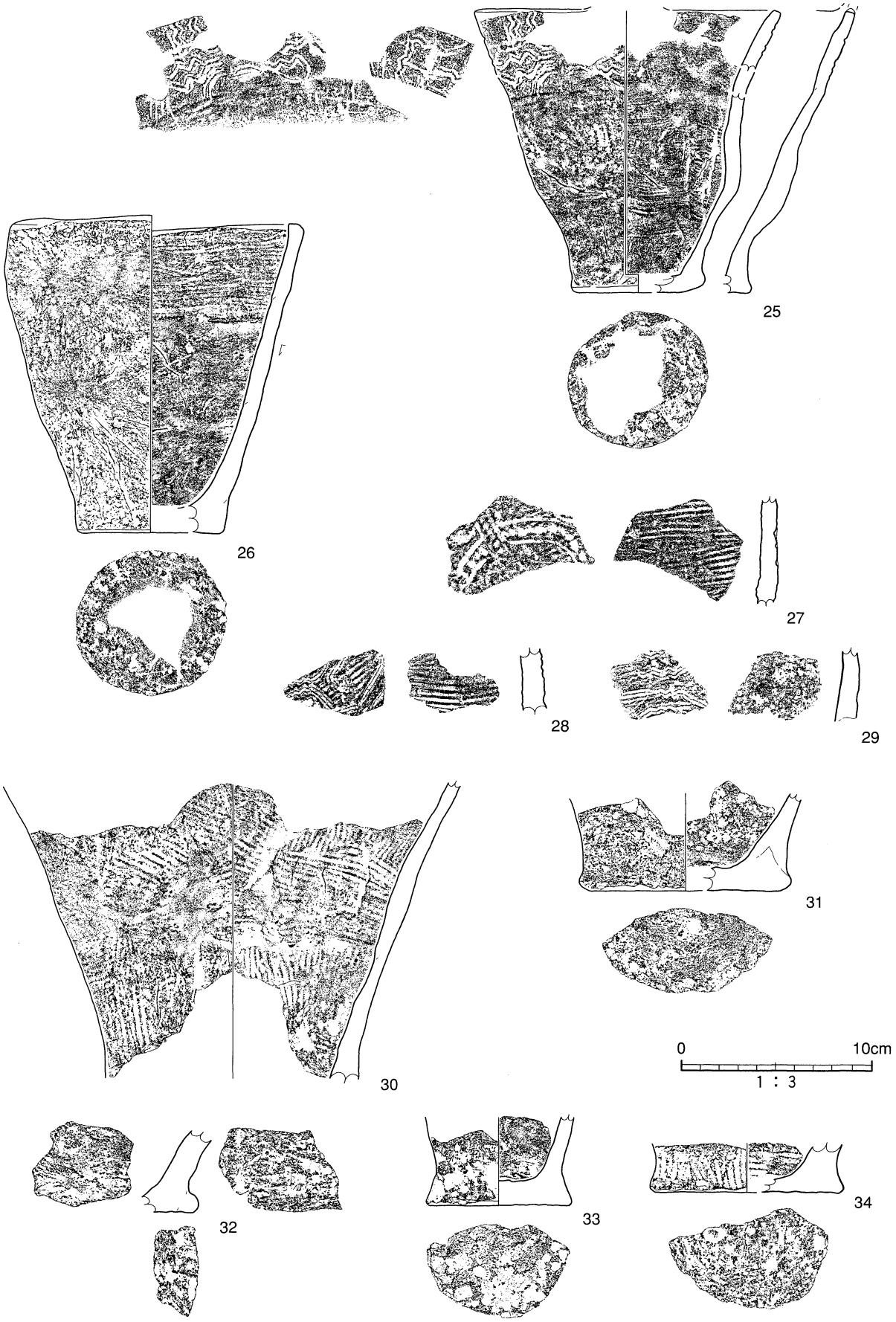
中華鍋形を呈すると考えられ、底部に組織痕が残る。



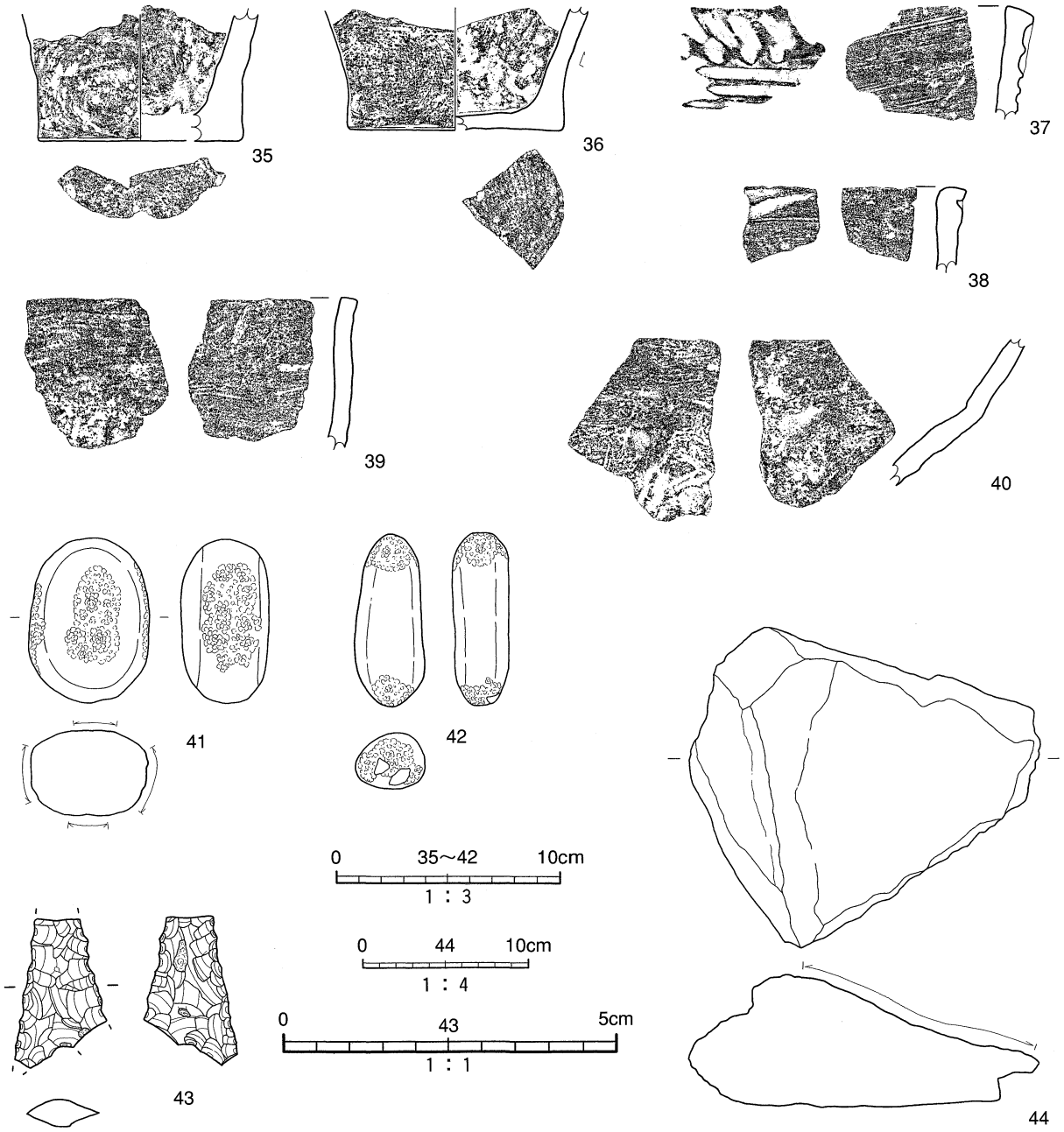
第19図　宇都遺跡出土遺物（1）



第20図　宇都遺跡出土遺物（２）



第21図　宇都遺跡出土遺物（３）



第22図　宇都遺跡出土遺物（4）

黒川式土器に比定できる。

（5）型式不明土器（39）

大平式土器の無文土器の可能性も考えられる。

（6）石器（41・44）

41 は磨石・敲石である。表・裏面に磨面が認められ、表・裏・両側面に敲打痕が認められる。

44 は花崗岩を利用した石皿である。表面に顕著な磨面が残り、裏面は地面に接地していたためなのか、磨滅している。これらは、縄文時代中期の大平式土器期に位置づけられる可能性が高い。

7　採集品か？（42）

出土位置の注記が無く、採集品の可能性が考えられる資料である。棒状を呈するハンマーストーンで、長軸の両端に敲打痕をもつ。

第３節　分析

志布志市宇都遺跡の土器内面赤色遺物について

鹿児島県立埋蔵文化財センター
南の縄文調査室　中村幸一郎

第７表　宇都遺跡出土土器観察表

挿図	No.	トレンチ	取上No.	調整 外面	調整 内面	調整 底面	外面色調	内面色調	胎土 石/長	胎土 角/輝	胎土 雲母	胎土 風礫	胎土 く礫	胎土 火ガ	備考
19	1	1	表土	ナデ	ヨコナデ	-	黒褐(10YR3/1)	明赤褐(5YR5/6)	○				△	○	
	2	1	一括	ナナメ貝殻条痕後ナデ	ナデ	編物底	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/8)		△		△	△		底径7.2cm 底面白色物質付着
	3	3	4	ナナメ貝殻条痕	タテケズリ(↑)	-	浅黄(2.5Y8/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	○	○					
	4	3	5	ナデ	ナナメナデ(擦痕残る)	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	○	○					
	5	11	一括	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ	-	黒褐(10YR3/1)	灰黄褐(10YR5/2)		○		○			
	6	6	一括	ヨコナデ/タテ貝殻条痕	タテケズリ(↑)	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(5YR6/6)	△	○					
	7	6	一括	ナナメ貝殻条痕	ナデ	-	橙(5YR6/6)	にぶい橙(5YR6/4)	○	○		△			
	8	6	一括	貝殻条痕	ナデ	-	橙(5YR7/6)	黄灰(2.5Y4/1)	○	△	○	△			
	9	14	一括	ナデ	ナデ	-	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)		○				○	
	10	14	74	ヨコ貝殻条痕後ナデ	ヨコ貝殻条痕	-	明赤褐(5YR5/8)	明赤褐(5YR5/8)	○	△		△		○	
	11	14	85・86 160・161	ヨコ貝殻条痕後ヨコナデ /ヨコ・ナナメ貝殻条痕	ヨコナデ	-	橙(5YR7/8)	橙(5YR6/6)	○	△		△		○	
	12	14	106	ナデ(ほぼマメツ)	マメツにより不明	-	橙(5YR6/8)	明赤褐(5YR5/6)	○			△		○	
	13	14	73・75	ヨコナデ	ナデ	-	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y8/3)	△		△				
20	14	14	117・118	ヨコ貝殻条痕	ヨコ貝殻条痕	-	明赤褐(5YR5/8)	明赤褐(5YR5/8)	○	△		○		○	外面スス付着
	15	14	一括	ヨコナデ(擦痕残る)	ヨコナデ	-	にぶい褐(7.5YR5/3)	橙(5YR6/6)	○						
	16	14	一括	ヨコ条痕	マメツにより不明	-	明赤褐(5YR5/8)	明赤褐(5YR5/6)	○	△		△			
	17	14	一括	ヨコナデ	ヨコナデ	-	橙(5YR6/6)	にぶい黄褐(10YR5/3)	○	△					
	18	14	12・48 50・100	ヨコ貝殻条痕後ナデ	ヨコ貝殻条痕後ナデ	-	明赤褐(5YR5/6)	褐灰(10YR4/1)	○					○	
	19	14	一括	ナデ	ヨコナデ	-	にぶい褐(7.5YR5/4)	灰黄褐(10YR4/2)	△					○	外面スス付着
	20	14	63	ヨコナデ	ナデ(マメツ著しい)	-	黄灰(2.5Y4/1)	橙(5YR6/8)	○	△				○	
	21	14	一括	ヨコナデ(擦痕残る)	ナデ	-	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	○	△		△			
	22	14	一括	タテ貝殻条痕後ナデ /ヨコナデ	タテ貝殻条痕後ナデ /ヨコ貝殻条痕	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	黒褐(2.5Y3/1)	○		○				外面スス付着
	23	14	101	ヨコナデ	ナデ	-	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○					○	
	24	14	一括	ヨコナデ(擦痕残る)	ヨコナデ	-	明赤褐(2.5YR5/6)	橙(5YR6/8)	○	△		△		○	
21	25	14	46	ヨコナデ	ヨコナデ/ヨコ条痕	ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	△	△					口径16.1×14.6cm 底径8.0×6.5cm
	26	14	139	ヨコナデ	板状工具ヨコナデ /ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	△	△		△			口径15.5×13.6cm 底径7.7cm 外面スス付着 底面白色物質付着
	27	14	一括	ナデ	ヨコ貝殻条痕	-	黒褐(10YR3/1)	褐灰(10YR4/1)	○			△		○	
	28	14	151	ナナメ貝殻条痕	ヨコ貝殻条痕	-	橙(5YR6/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	○	△					
	29	14	19	ナデ	ヨコナデ	-	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	△		△				
	30	14	一括	ヨコ貝殻条痕 /タテ貝殻条痕	ヨコ貝殻条痕後 タテ貝殻条痕	-	橙(5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)	○	△	△				内面赤色顔料付着
	31	14	15	ナデ	ヨコ工具ナデ	ナデ	橙(5YR6/8)	橙(7.5YR6/6)		○		○			底径11.2cm 外・底面白色物質付着
	32	14	一括	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)		△		△	△		
	33	14	一括	タテ貝殻条痕後ヨコナデ	ナデ/ユビオサエ	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい橙(5YR6/4)	○		○				底径7.7cm 底面白色物質付着
	34	14	一括	タテ貝殻条痕後ナデ	ヨコ貝殻条痕後ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR6/3)	黒褐(7.5YR3/1)	○			△			底径10.2cm 底面白色物質付着
22	35	14	一括	タテナデ	タテナデ	ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)		○		△			底径9.2cm 底面白色物質付着
	36	14	一括	ヨコナデ	タテナデ	貝殻条痕後ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	○					○	底径9.6cm 外面スス付着
	37	14	一括	ヨコナデ	ヨコナデ	-	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	○	○		○			
	38	14	一括	ヨコナデ	ヨコナデ	-	にぶい赤褐(5YR5/3)	橙(5YR6/6)		○		○			外面スス付着
	39	14	一括	ヨコナデ(擦痕残る)	ヨコナデ(擦痕残る)	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	褐灰(10YR4/1)	○			△			
	40	14	一括	ヨコナデ	ナデ	組織痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)		○		△			

第８表　宇都遺跡出土石器観察表

挿図	No.	トレンチ	取上No.	時代	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
22	41	14	53	縄文	磨石・敲石	砂岩	7.50	5.40	4.00	223.10	
	42	採集？	-	縄文	ハンマーストーン	頁岩Ⅲ類	7.80	3.20	2.50	83.80	
	43	13	6	縄文	石鏃	黒曜石Ⅱ類	2.30	1.40	0.40	1.10	
	44	14	22	縄文	石皿	花崗岩	21.00	19.50	8.10		

宇都遺跡から出土した土器の内面に付着する赤色遺物について成分分析を行った。一部を採取し、試料とした。

１　試料（赤色遺物）

（１）赤色遺物

宇都遺跡土器の内側に付着する赤色遺物（１点）

２　観察・分析方法

（１）形状観察

観察用の試料を採取し、双眼実体顕微鏡（Nikon

SMZ1000）による８倍観察を行い、表面の特徴的な色調や形態等を観察した。

走査型電子顕微鏡（日本電子製 JSM-5300LV）による1,500～3,500倍観察も行った。

（２）成分分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000、Ｘ線管球ターゲット：ロジウム、Ｘ線照射径100μｍ）を使用して、非破壊で測定した。分析条件は次のとおりである。

Ｘ線照射径	：100 μｍ
測定時間	：200 ｓ
Ｘ線管電圧	：15/50kV
電流	：1000/320μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	：P3
Ｘ線ﾌｨﾙﾀ	：なし
試料ｾﾙ	：なし
定量補正法	：ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

３　結果

（１）形状観察

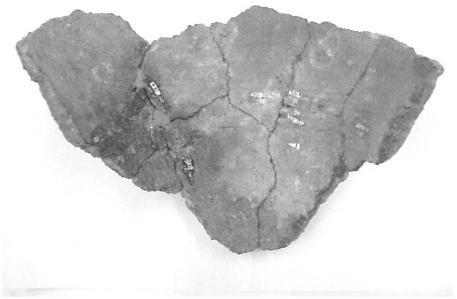
赤色遺物は、土器内面に部分的に付着し少量残存している（第23図）。鮮やかな赤色を呈し、周囲の胎土の色と比較すると目立つ（第24図）。走査型電子顕微鏡で拡大観察すると、この赤色遺物はパイプ状の粒子が見られる（第26図）。

（２）蛍光Ｘ線分析

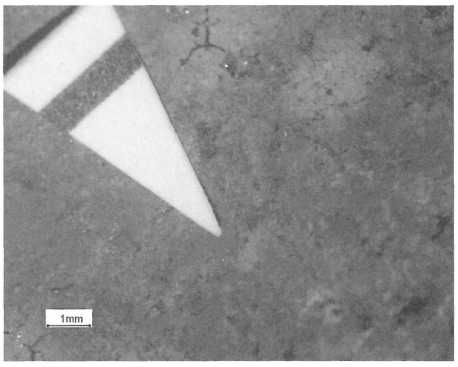
分析の結果、強い鉄（Fe）のピークが得られた（第25図のグラフや表を参照）。

鉄のピークが見られる部分の他に、アルミニウム（Al）やけい素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）などのピークも見られた。これは、土器に含まれる胎土の成分として考えられる。

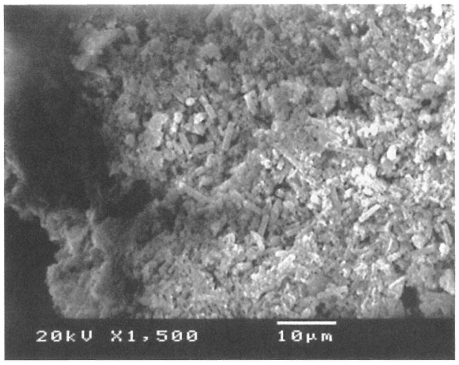
電子顕微鏡観察の結果から、鉄バクテリア由来のパイプ状ベンガラとしての赤色顔料を認めた。



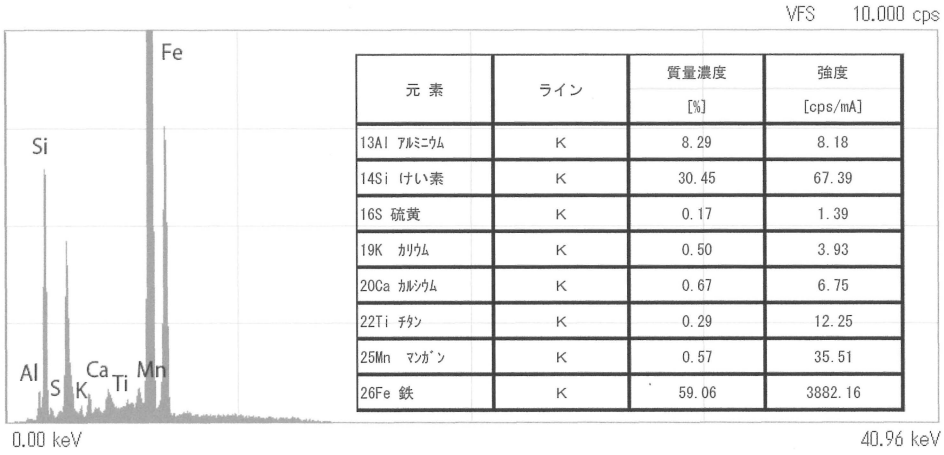
第23図　分析対象土器内面



第24図　双眼実体顕微鏡（８倍）



第26図　電子顕微鏡（1,500倍）



元 素	ライン	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
13Al ｱﾙﾐﾆｳﾑ	K	8.29	8.18
14Si けい素	K	30.45	67.39
16S 硫黄	K	0.17	1.39
19K ｶﾘｳﾑ	K	0.50	3.93
20Ca ｶﾙｼｳﾑ	K	0.67	6.75
22Ti ﾁﾀﾝ	K	0.29	12.25
25Mn ﾏﾝｶﾞﾝ	K	0.57	35.51
26Fe 鉄	K	59.06	3882.16

第25図　蛍光Ｘ線分析装置による成分分析

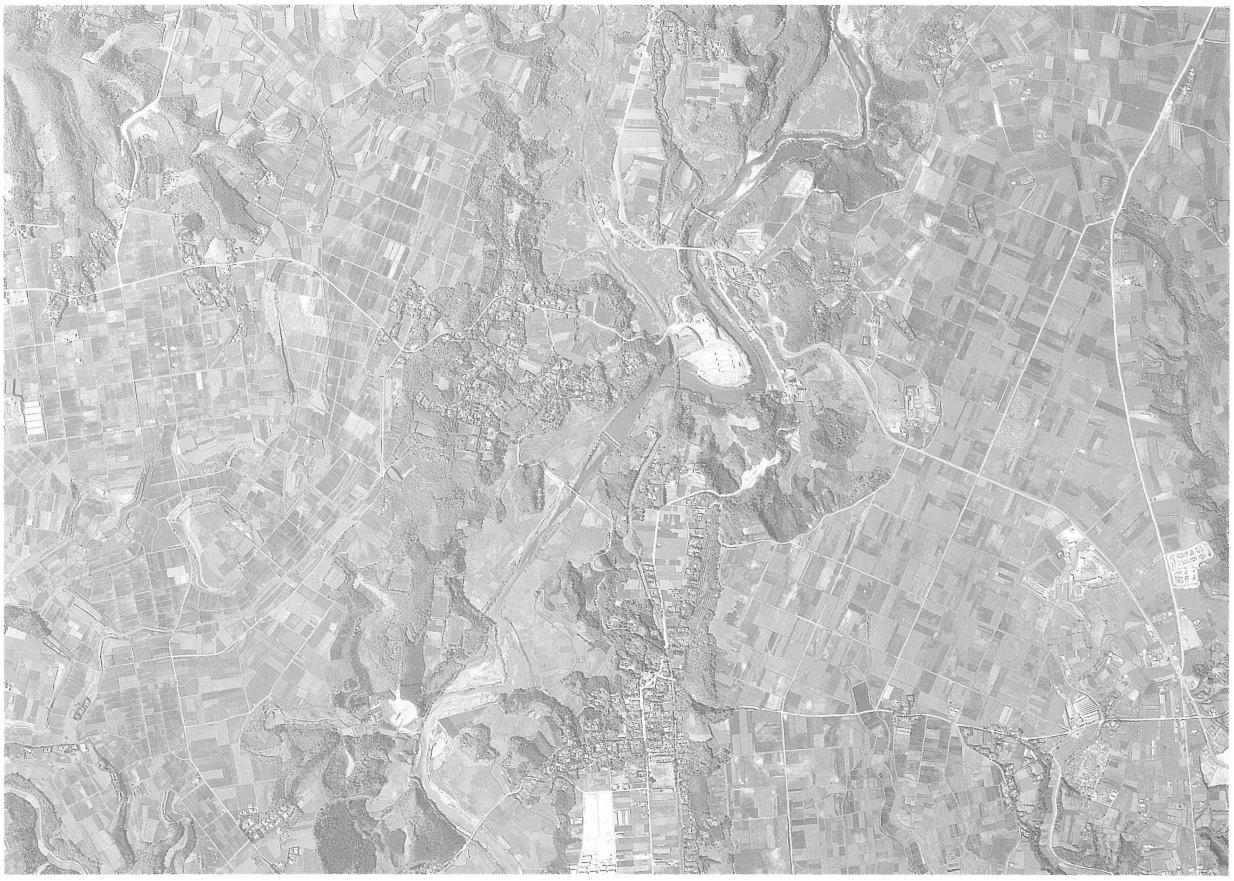
【参考・引用文献】

大久保浩二　1993「榎崎Ｂ遺跡出土土器に付着した赤色顔料について」『榎崎Ｂ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（４）

内山伸明ほか　2008「上水流遺跡出土の赤色粒子と鉄バクテリアとの関連について」『日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

図　　版

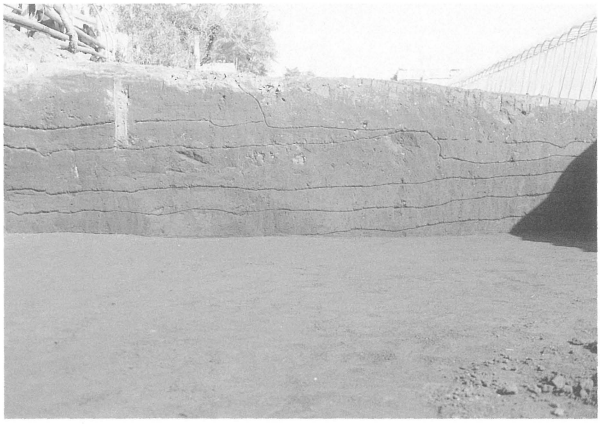
図版1



① 空中写真（国土地理院　1970年撮影）

② A地点土層断面図

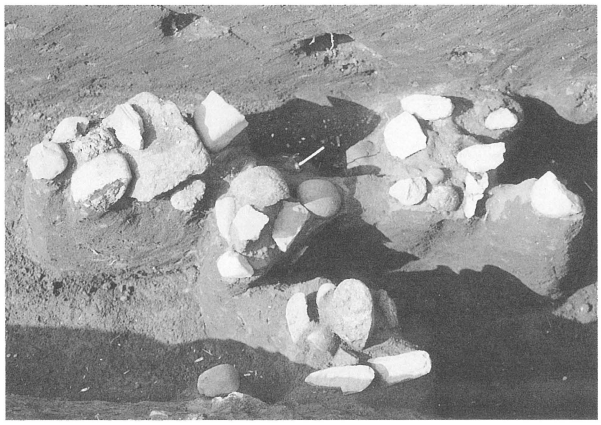
③ B地点土層断面図（A－6区）



④ C地点土層断面図（A－14区）

⑤ 集石1号検出状況（南から）

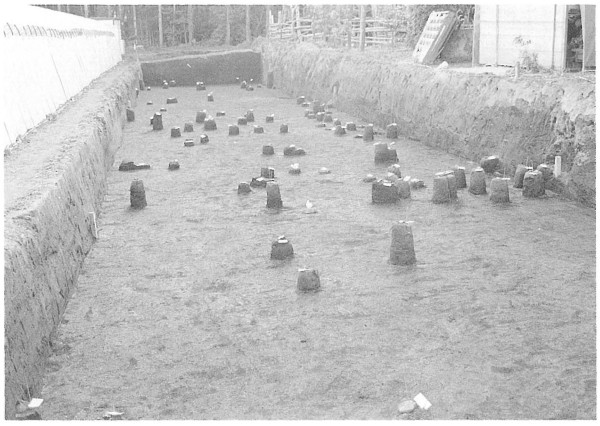
図版2



① 集石４号検出状況（東から）

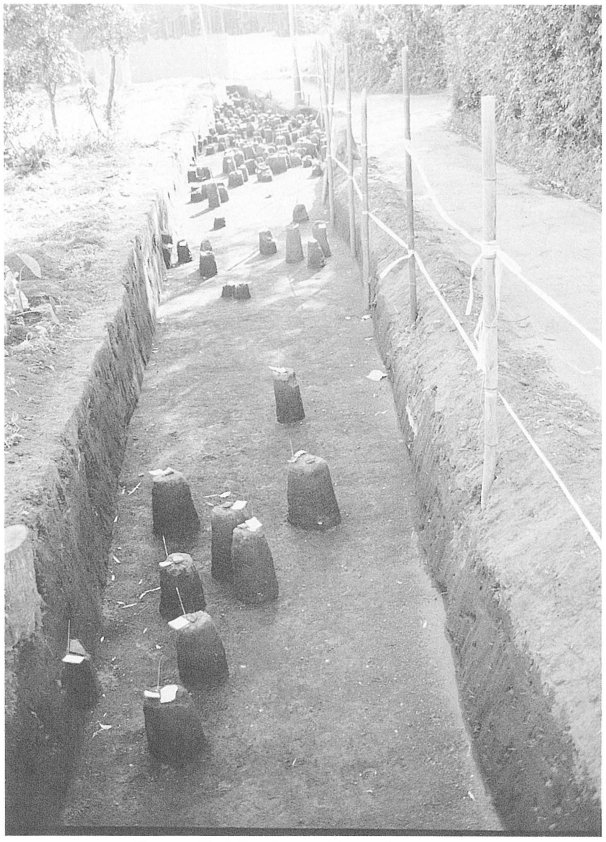
② Ａ地点遺物出土状況（南から）

③ Ｂ地点遺物出土状況（西から）

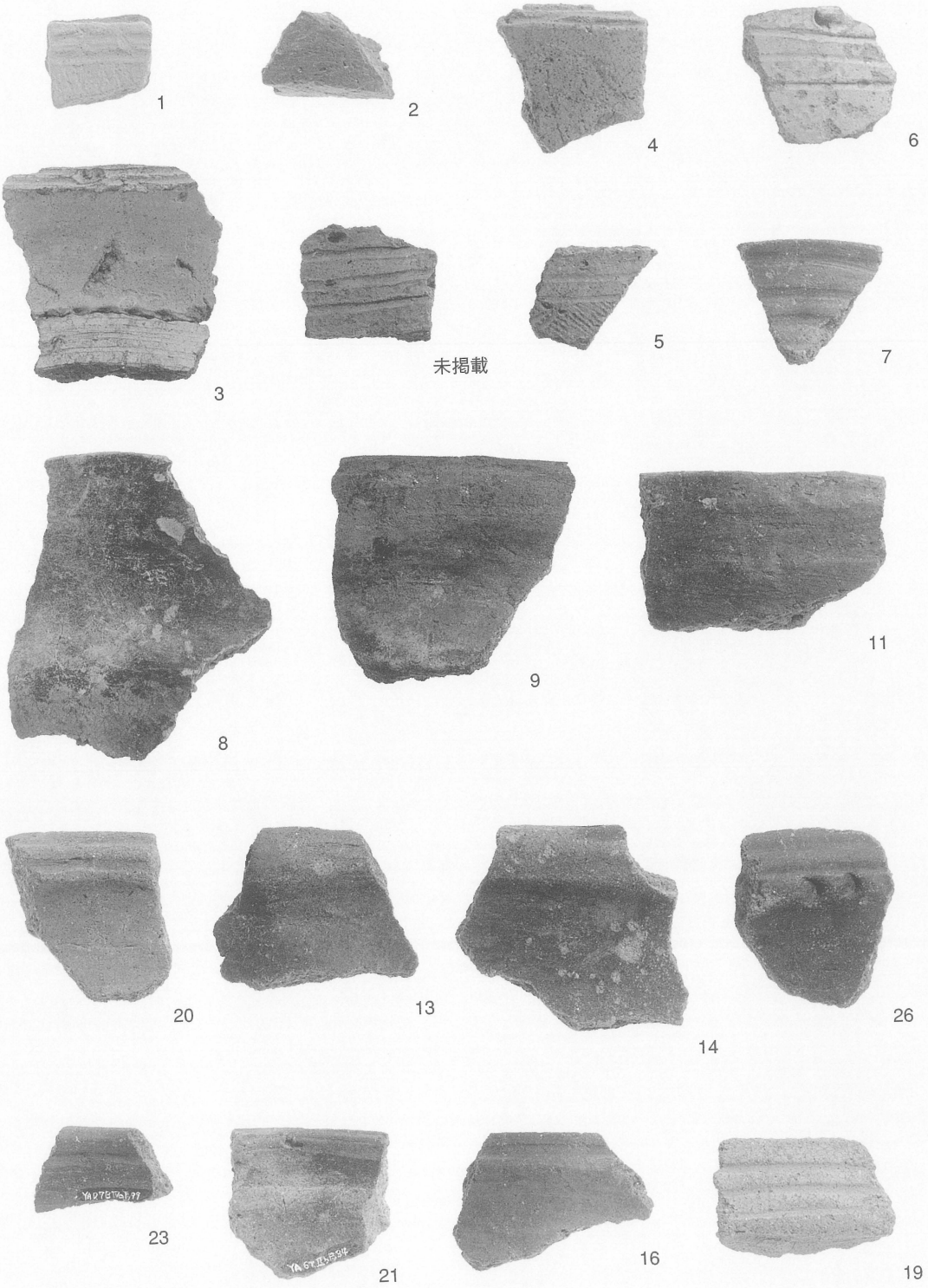


④ Ｃ地点遺物出土状況（西から）

⑥ 石匙（No.90）出土状況

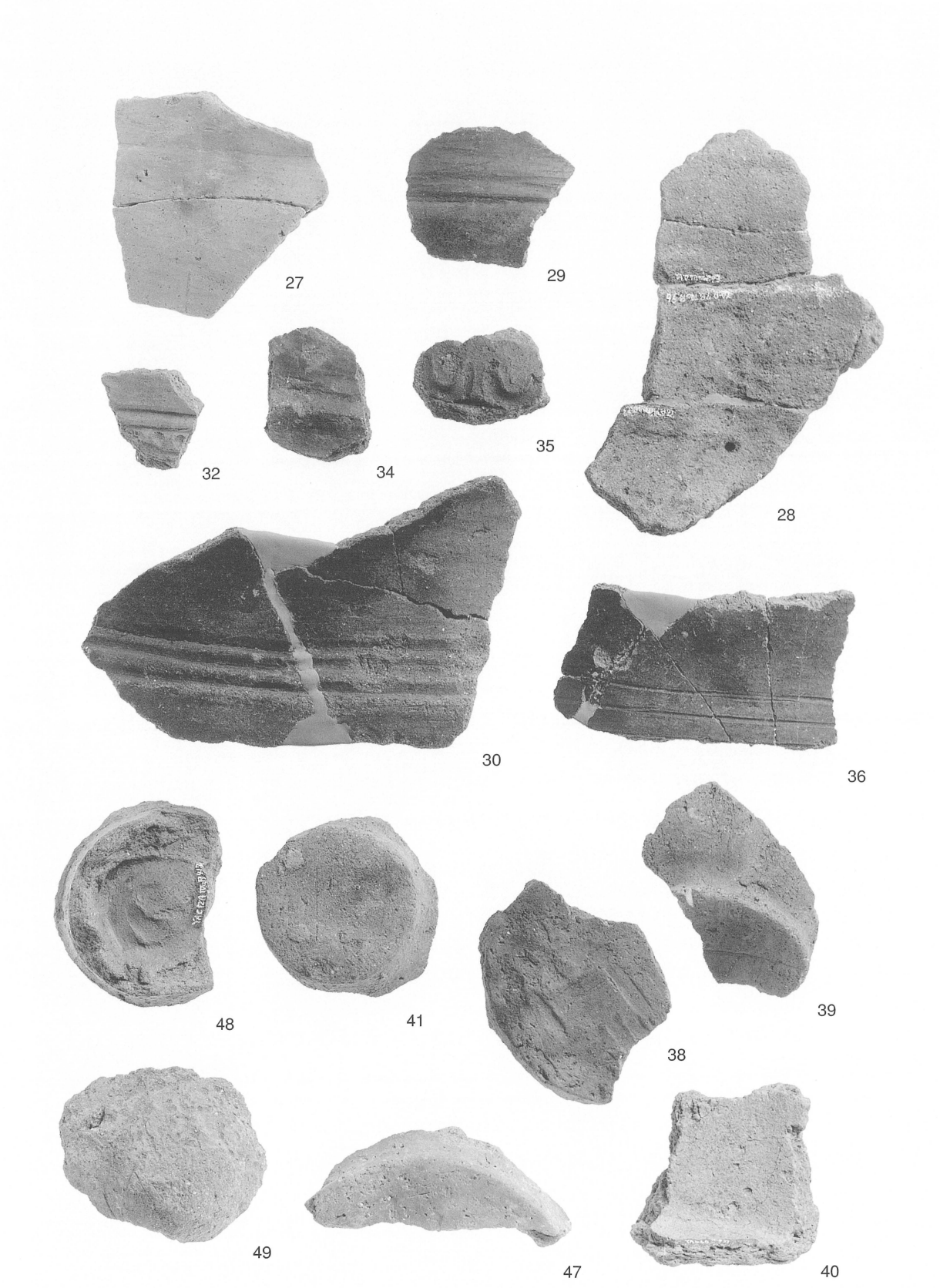


⑤ Ｄ地点遺物出土状況（北から）

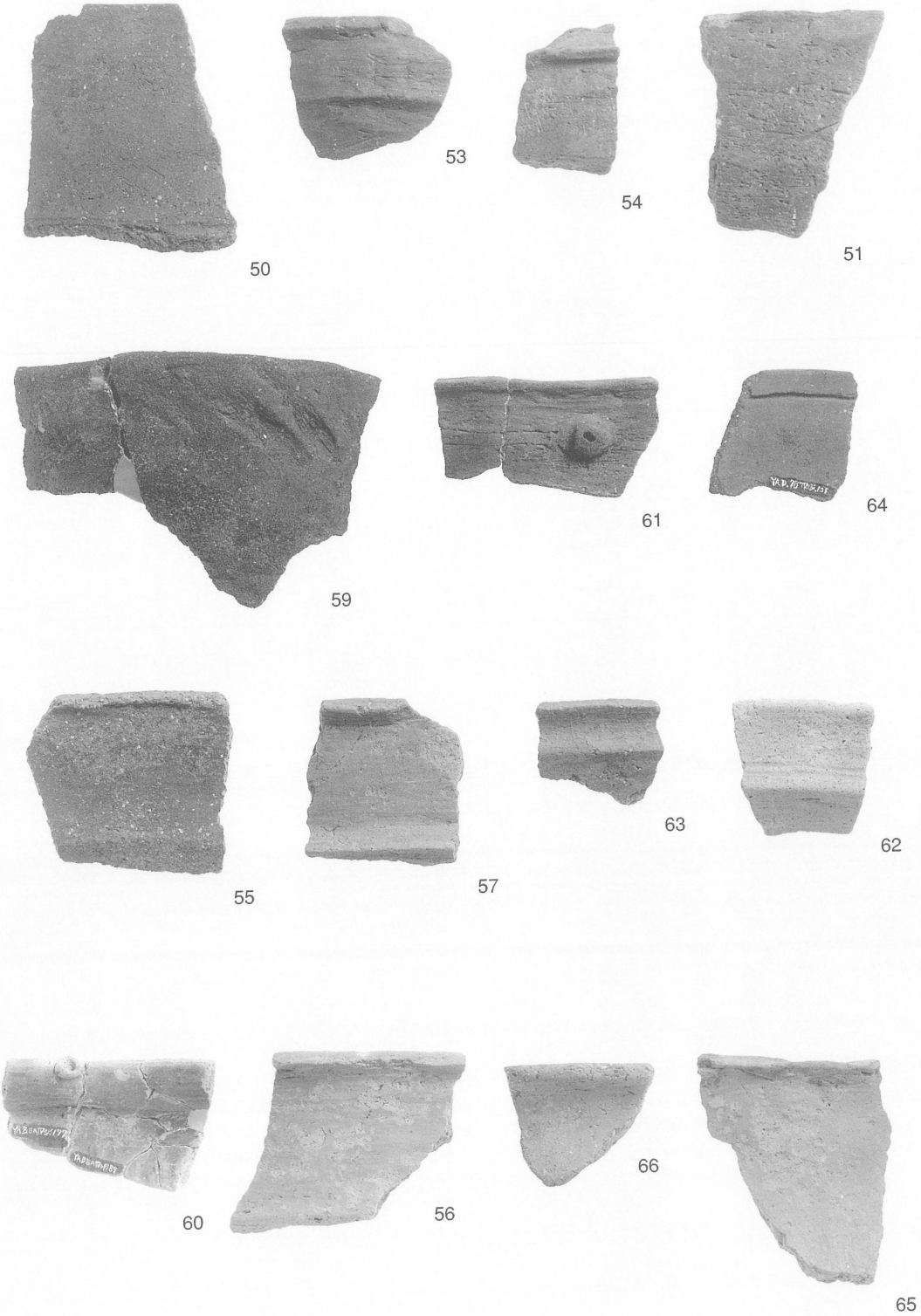


縄文時代土器（1）

図版4

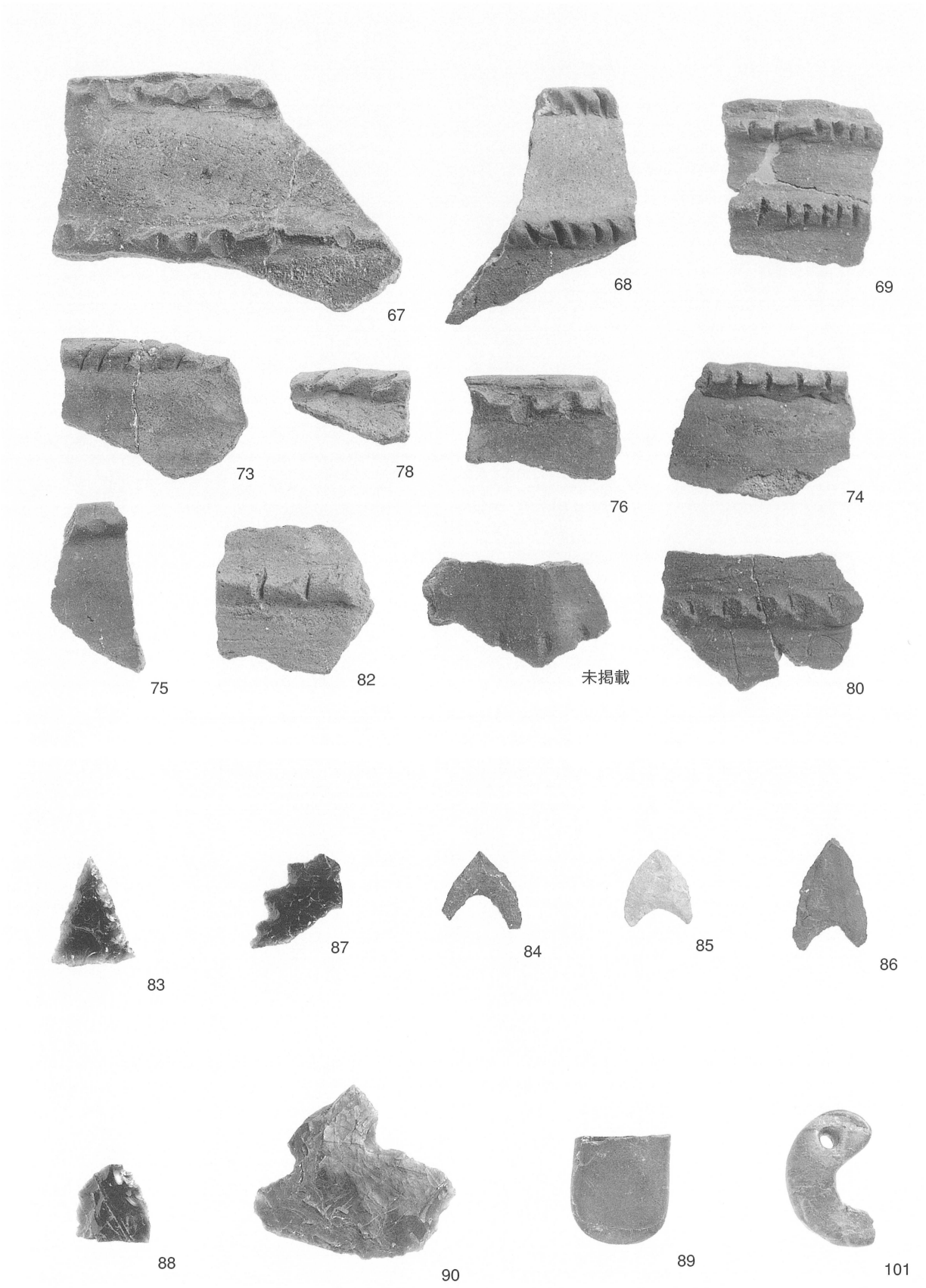


縄文時代土器（２）

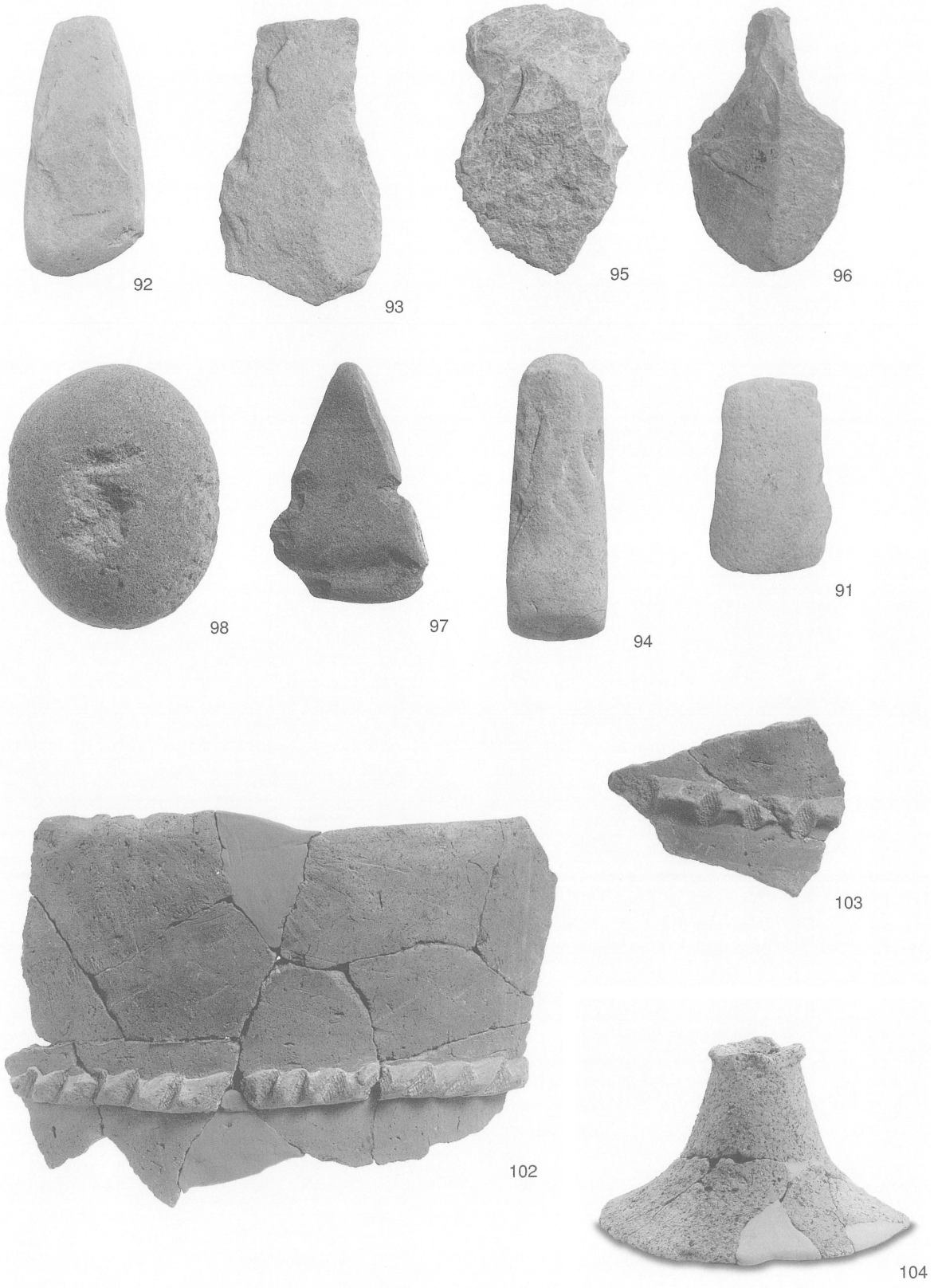


縄文時代土器（3）

図版6

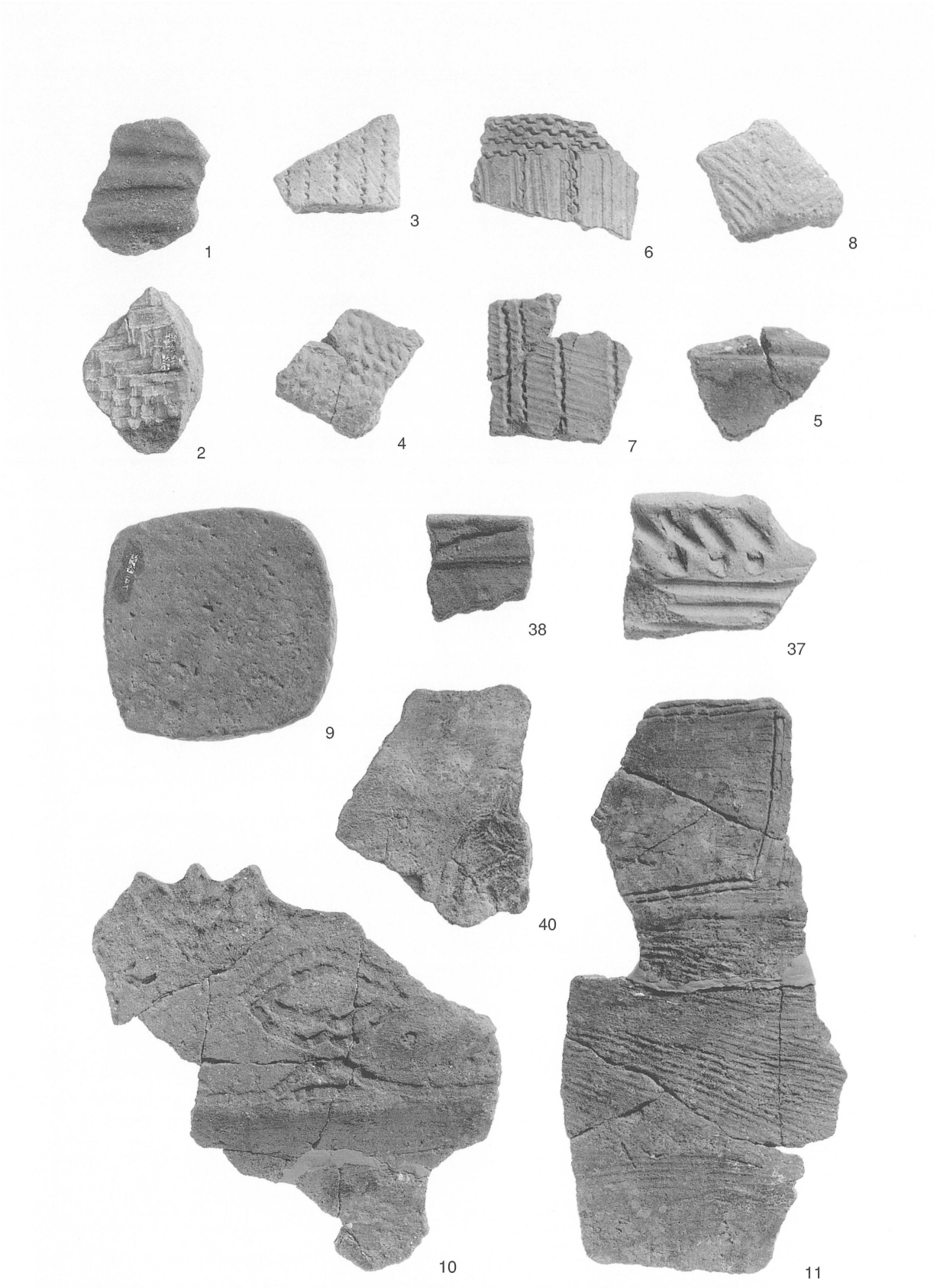


縄文時代土器・石器

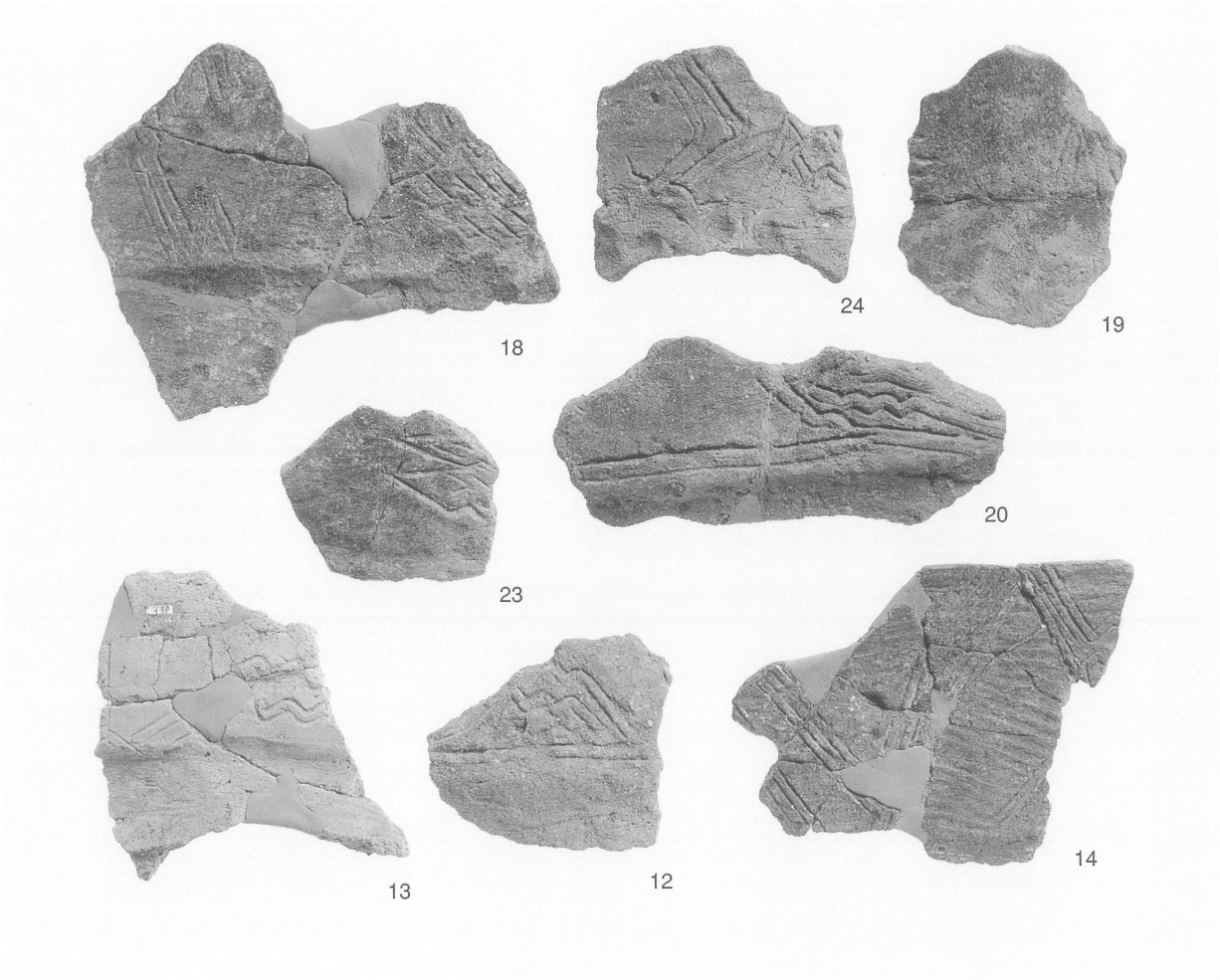


縄文時代石器・古墳時代土器

図版8

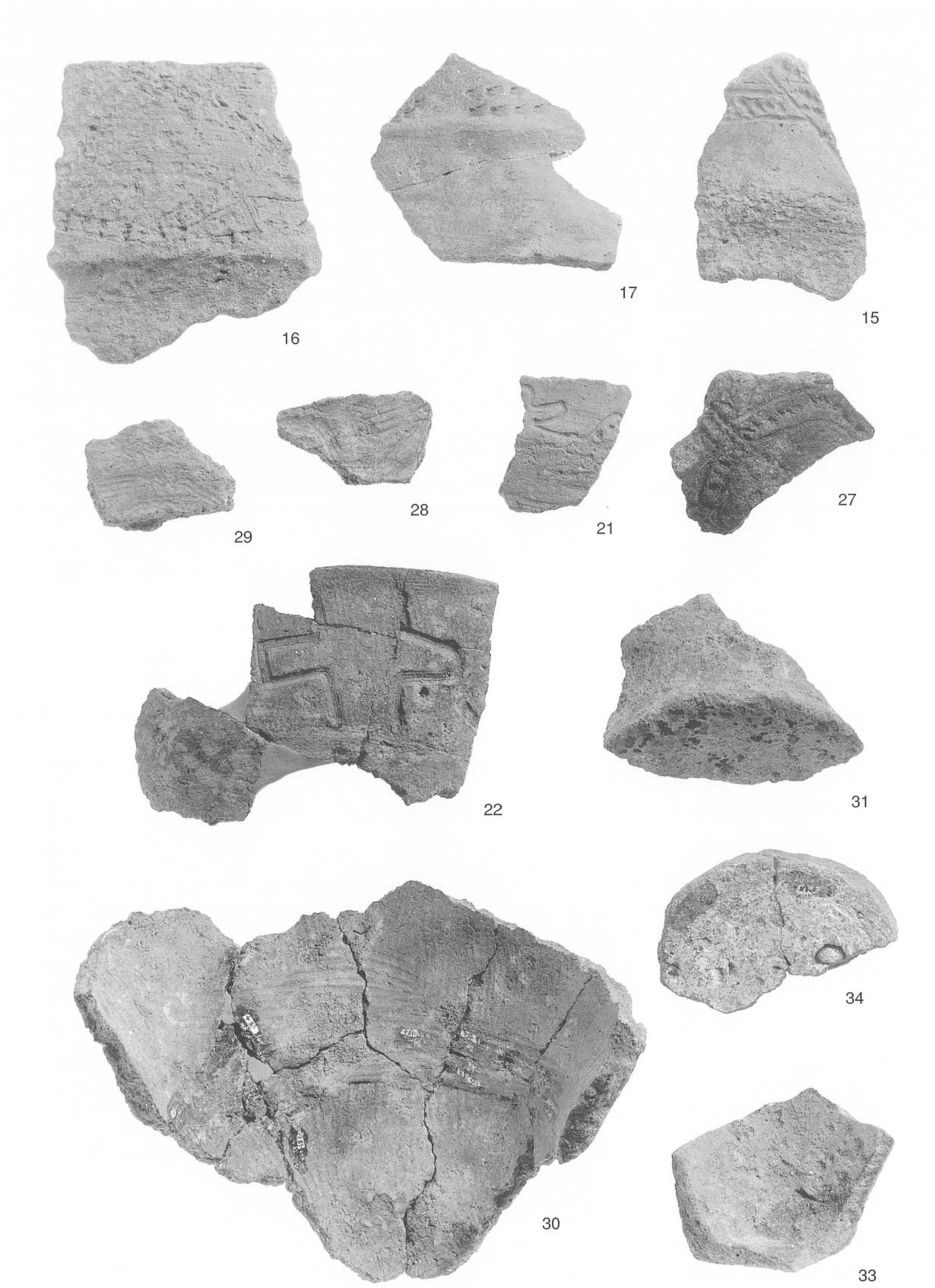


宇都遺跡出土土器（1）



宇都遺跡出土土器（2）

図版10



宇都遺跡出土土器（3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまずみびー・すみとこいせき
書　　名	山角Ｂ・炭床遺跡
副 書 名	農業農村活性化農業構造改善事業上門地区及び県営農免農道整備事業安楽地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	11
編 著 者 名	坂元裕樹・相美伊久雄（編）
編 集 機 関	志布志市教育委員会
所 在 地	〒899 - 7192　鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目１番１号　　TEL099-472-1111
発行年月日	2014年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
山角Ｂ遺跡 炭床遺跡	鹿児島県 志布志市 志布志町 安楽 字炭床・山角	462217	15-140 （山角Ｂ） 15-141 （炭床）	31° 44′ 33″	131° 07′ 25″	確認調査 19910703～ 19910808 本調査 19910912～ 19911122	915	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山角Ｂ遺跡	散布地	縄文時代 古墳時代	集石1	西平式土器 中岳式土器 黒川式土器 刻目突帯文土器 石鏃・石製土掘具・磨製石斧 勾玉 笹貫式土器	市内では３例目となる勾玉が出土している。
炭床遺跡	散布地	縄文時代 古墳時代	集石３	塞ノ神Ａ式土器 西平式土器 中岳式土器 黒川式土器 刻目突帯文土器 石鏃・石製土掘具 笹貫式土器	

要　約

山角Ｂ・炭床遺跡は縄文時代と古墳時代の複合遺跡である。縄文時代は早期・後期・晩期の遺構・遺物が認められており、その中心は後期後半と晩期後半である。

縄文時代早期は炭床遺跡側で塞ノ神Ａ式土器と集石遺構が認められている。後期後半は中岳Ⅱ式土器が、晩期後半は黒川式土器の干河原段階と刻目突帯文土器が認められている。古墳時代は６世紀代の笹貫式土器がわずかに認められている。

特記事項としては、縄文時代後期後半～晩期に位置づけられる勾玉が見つかっている。志布志市内では３例目となる。この勾玉は緑色の石材を利用しており、クロム白雲母の可能性も考えられる。今後、石材分析を行えば、石材の流通を考える上で貴重な事例となろう。

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）
農業農村活性化農業構造改善事業上門地区及び
県営農免農道整備事業安楽地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

山角Ｂ・炭床遺跡

発行年月　2014年３月
編集・発行　鹿児島県志布志市教育委員会
〒899－7192
鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目１番１号
TEL　099－472－1111　FAX　099－473－1880
印刷所　西文社印刷株式会社　志布志支店
〒899－7103
鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目16番21号
TEL　099－471－1328　FAX　099－471－1329